

531

43



始



H-26-13



訂校

西

齋

全集

卷

上

卷



大正

14. 12. 22

内交



西鶴翁肖像

→ 春れ初の松葉山

又大唐の花は草葉れ陰に影は依格んで詩をどう
 へし和歌乃ち花の木くけのうらた歌を吟下
 け時かたはるる海代乃山と動す空の海系不
 小細浪弱し玉珠の如きく流れる流の久し
 ちよりれ翁ありて百余歳なり高きてもゆき
 突撃しななく善悪ゆつ川の年かこくまの徳
 へ海花結る今れ世乃徳と草とともなりて
 くれ風は礼ましく海花とともなりて
 今きる道のな徳乃廣ら草葉れな海と
 中くまのなすて孫へぬむく都の町よま
 乃清古例を勤むは年男ありて毎は十二月

序

井原西鶴は三代將軍家光の武威海内を壓し徳川の流れ淀みなき寛永の十九年に生れ浮世の月末二年を見過して元祿の六年に身まかりぬ清朝の巨匠にして黄大癡の淺絳山水に於いて獨絶の目ありし王麓臺と同時に生れ近代の花鳥畫に純没骨の一派を開きし白雲外史憚壽平の逝きし前年に歿したるなり始め西鶴は西山宗因に師事して俳諧を學び出藍の譽あり一日住吉の社頭に在りて二萬三千句の獨吟を吐露し二萬堂また二萬翁と稱し後紀子の凌駕する所となりしかば西鶴勃然として再度の興行を催し遂に紀子を閉息せしめて威勢を俳林に振へり

其の敢爲の氣象と縦横の才藻とを見るべし天和二年三月二十八日其の師宗因が七十八歳を一期として白玉樓中の人と化するや西鶴は直ちに俳壇を退き浮世草子の一派を拓きて世相の表裏を寫し出しぬ其の草子は之れを寫實の制作としては源氏物語、隆能源氏等に比すべく又ゾラ、モウバツサン等の諸作にも比すべく之れを武士階級に對する平民の氣焰録として近代の社會主義の小説に較ぶべく之れを世相の記録として見れば必ずしも正史たる「徳川實記」に劣らざる活ける元祿の人生を觀すべきなり。

由來西鶴の作品は坊間に二三の單行本を散見するのみにて毫も全集らしき者なし余之れを憂ふる久し頃日有宏社主佐伯

光俊氏其の蒐集せる所の稿本を齎し來つて校訂を需む余其の藝苑に功獻する事の多大なるべきを喜び即ち魚魯を訂し年代を整へ肖像筆蹟等を加へ裝釘を凝らして讀者に見えしむ官權許す所の範圍に於いては、全集の體裁を得たりと云ふべし。

若し、夫れ西鶴を精研せむと欲する人は水谷不倒氏の「西鶴本」。

「列傳體小説史」中の「井原西鶴」幸田露伴氏の「西鶴論」(國民之友 第八三號) 饗

庭篁村氏の「俳諧一斑」(同第九一號) 藤岡、佐々、五十嵐、尾上諸氏及びア

ストン氏の國文學史。藤村氏の諸論文。「國語及國文學」の西鶴號等を參考せらるべし。

今や俗惡なる翻譯小説が滔々として一世を風靡するの秋日本文藝の爛熟期たる元祿時代の社會相を回顧し固有の文化を

序
發揮する道程より見るも再び西鶴熱の勃興すべき時期あるを
信ず果して然らば本全集の如きも大方必讀の書と稱すべく余
が校訂の如きも亦此の風潮に對する猷芹の微志に外ならざる
なり。讀者諒焉。

大正乙丑初秋

和軒識

上卷總目次

題名	原本卷數	出版年代	出版當時ノ西鶴年齡
西鶴五百韻	(一)卷	延寶七年	(三十八歲)
諸國はなし	(五)卷	貞享二年	(四十四歲)
近代艶隱者	(五)卷	貞享三年	(四十五歲)
好色五人女	(五)卷	同	(四十五歲)
本朝二十不孝	(五)卷	同	(四十五歲)
懷硯	(五)卷	貞享四年	(四十六歲)
武道傳來記	(八)卷	同	(四十六歲)
日本永代藏	(六)卷	元祿元年	(四十七歲)
武家義理物語	(六)卷	同	(四十七歲)
新可笑記	(五)卷	同	(四十七歲)

(以上)

西曆五百餘

西鶴五百韻

(延寶七年板)

上々青清水の流れ、上戸も下戸もなべてすくべき酒なり、諸國
の人のや／＼いやと口いは残り、あもふなりとも、かろふなり
ともお相手になるべし、時に華は盛り、山は彌山の六日、七日、八
日にすらりと此五百韻、千秋樂には座を立ち、萬歲樂にはちよ
うちん釣鐘、夜更けて歸る口俳諧師ぞかし、

延寶七_{己未}年三月 日

井原	西鶴
山本	西六
松井	西花
水田	西吟
山本	西友

何
鞠

曲水の水のみかみや鴻の池
挽置きなれどかすみたつ山
あらう楸柳龍天ときつ風
たまにもぬけてなつる目はつこ
飛螢あるいな尻に生れつき
ささねの野邊のすて庵
かねのつる光りもどめて暮の月
一升ますにはかる白露
土賣や紅葉をおしむ崩山
地震のあと種のかなしさ

西 西 西 西 要

六 友 花 六 鶴 吟 友 花 六 鶴

ひき風や今は扇のかなめ石
東のはてまでかたれ道行
むかし男馬からおりて二年ぶり
よう堪恐をしたる小便
會稽の恥をすゝき洗濯に
三度さられて戻る唐人
しのび笠涙の雨がふつてきた
薄の様子尋ぬるは戀
月夜よし口道女道あるめく
進退棒にふつて行く露
乗物まで世間見合す花盛り
葬禮釋迦はやり梅
此の上は永ふりひたる日影にて

鶴 吟 花 友 六 鶴 吟 花 友 六 鶴 吟 花

五人與よる五十丁一里
神樂おのこふりさけ見れば鈴鹿山
湯釜の下へあのの松原
世帯しらぬ譬へばすたる雪なりとも
いくたび袖のつきしても又
うちよする碁にすぎ入て濱の浪
蕎麥きり懸けの友鶴の呼
君が代は長の數よむひいふうみい
たばね木をつむ高き屋の内
煤を箒き餅をついての其後は
取あけははがさはく吳竹
夜半の月手ねむさい風や通ふらん
はくちに雁は八百の負

友 六 鶴 吟 花 友 六 鶴 吟 花 六 鶴

鹽で淵種の湊はむまり兼
經が嶋をば土扁にかくとも
足形を干瀉に残す聲はして
盗人つけてむかね響く也
さかえてはいけて置かれぬ戀無常
肌をふれたら蚤とつてこい
いきつくに鐵のつめを磨き立て
釣瓶とりにもかゝるおなさけ
約束の繩動せばこゝろへた
念佛講中もくよくの露
糟煎し枕に残す月の影
野は色薄き焼酎の壺
にほふては花の浪よるあはさ堀

吟 花 友 六 鶴 吟 花 友 六 鶴 吟 花 友 六 鶴

二日はまつて水上の春
百目ではとまらぬ別れ朝霞
八聲の鳥に鐵砲のたま
神軍世に逢坂の關をすね
若やき討死しら髪の宮
龍灯の光を請けて讀むかるた
藻にすむ虫が出すにすました
ちいさい子したからぬらす袂にて
地藏は慈悲をたるゝ雪隠
寒汁のたで摺子木が過ぎたよう
風待つ暮れに五器ふいて居る
浮世かなたつた今でも出る舟の
ねふとおせばいたむ足すり

六 鶴 吟 花 友 六 鶴 吟 花 友 六 鶴 吟 花 友 六 鶴

生風呂に入方おしむ空の月
めつたにたつてきたる薄霧
強藏か又かゝつたる露時雨
ふんぞしきれて逃る三尾の谷
一の谷尻のわれめの後ろつき
いかな出家も逆おとしとて
口日の火地獄の釜の真中へ
里魚に別れて浄土双六
子日三人よればなぐさみ事
鈍太郎殿の手車の道
丹波口いらぬ銀がなすて所
天神かこひはしたての月
初しほに浪のうねく二ッ紋

六友花吟鶴六友花吟鶴六友花

てゝ方母方磯松の露
やつし事萬能丸を花にきて
ころは彌生の末の棧敷
あれはところのさは姫なるぞぬけ申す
ころせずかたの池の樋の口
鶴の首をしめ出しに逢ふ戀の間
小舟の箒越るはしの子
是は亦旅行の暮の自身番
都へのほり給ふ上夫口
掃除してあれにひら様お立ある
かつてさはるに煩惱の垢
涙川土用干にて埒明す
やるとのはしのながきくるしみ

花吟鶴六友花吟鶴六友花吟鶴

是をなげく親は空にてちりけもど
 岩戸の前にて舊里きらるゝ
 厄害わざはひをかけたてまつる町へ皆
 何の風情も今晚の月
 渡り鳥遠ひ所をはれやれやれ
 とやいて見てもさかぬみみつく
 逢生の宿をならべて祖父祖母
 東に影を善道法然
 當山靈地となつて二階堂
 峯にはしやなの梢に花さく
 こしきより香ひの通ふ米櫻
 千年の春の庭の名木

友 六 鶴 吟 花 友 六 鶴 吟 花 友 六

早 何

もゝく桃一盃一ばい又一盃
 いなれざ泊りや三月三日
 律義りぎなる親仁かきかぬ春暮て
 初ほととぎすなんのかけねを
 看板に有明の影見やつたり
 四番すきては霧の立つ空
 引出しに山の錦をたゝみこめ
 物さし針さし糸萩の花
 緑組の其晩よりも女鹿なく
 のべをまぐらに戀はもみくしや

西 西 西 西 西
 六 吟 鶴 花 友 六 吟 鶴 花 友 六

よめもせぬ御文殊に日外は
一座をいたす阿蘭陀が宿
俳諧や難波につけて替るらむ
くさ草紙の名も書籍目録
釋迦このかたあることない事爰に山
既に提婆あり峯の松風
大悪は又山もなき作りもの
ころして見せる白石の露
芝の野邊へかり装束て出る月
焼香場より立のほる霧
花に銀涙片手につままれて
なさけとおもへば旅籠屋の春
たまされて一はいくふた鮎繪

六 鶴 吟 六 友 花 鶴 吟 六 友 花 鶴 吟 六

勢田の長橋浮から水
ひつたりと鬢なでつくとこの山
あいふかくればなき別れ行
此ほと御筐とて黍の畠
稻葉龍天小米屋のかゝ
ひすらこふ上目をつかふさほの雁
しついで計穂風そふく
月の都供もつれすに出しかと
劑じかきいては乗物にのる
かし銀や利は朝の間にまはるらん
はつちにいる、善六かどか門
功德池のうけ樋かけられて
濱乃ん眞砂のたゝらふむらん

六 友 花 鶴 吟 六 友 花 鶴 吟 六 友 花 鶴 吟 六

夕風に下葉をならすあしや笠
かこゑをたつる木の丸の關
たいこ女郎名をなめるまで手あはず
奇異のくせ者と引くんで寝る
なけの情四十八手口日事
假令死んでも彌陀の本願
ふくと汁くふてじやくく腹心
遊行の杓子すくはんがため
ふち澤に人をとめぬるつらがまへ
うせ物かあ鎌倉の月
おしまるゝ只一文を水の種
渡しかなくは不自由なる露
花にくるひ耳はきこぬす目は見えす

吟 鶴 花 友 六 吟 鶴 花 友 六 吟 鶴 花

手かけ所か老のうくひす
玉をよふて浮世小路の朝霞
一夜もしたやさいや町すち
此の句にはつけあぐんたるきをいくち
浪蕪苔の髭ぬいて居る
川つらも二十あまりの女方
堺の春か通ふ塩尻
ばいの實のからになりてもすけべいじや
むかしは花やるさくら鯛
春の心絶えて客人なかりせば
問屋半分雪のむら消
惣領に是れほととらす芳野山
高嶺の木々も種は錦戸

友 六 吟 鶴 花 友 六 吟 鶴 花 六 吟

月の影おちて行とものがすまい
瘡の性体風の夕露
護魔一座たけは其儘霧煙
鈴錫杖の響く山彦
胎内に宿り初めたる松ふくり
則天鼓と名つけ親呼
五番目はうちつけなる事にくへと
めぐりくゝて大和の壺坂
蓋をいすいてまいれ飛鳥川
流れてはやき卵そうめん
腹中は世界の中に譬へたり
本朝通鑑つがひ一代の秋
洗濯物孔子嗅くもうつ衣

鶴 花 友 六 吟 鶴 花 友 六 吟 鶴 花 友

日の思火をば糊口にたく月
花そかし君うちとけて山の芋
春行水のまさる腎せい
にきび出る岸の額は薄かすみ
いらふて見やれ住吉の濱
家にきて伯樂天か寢入たか
夕の雲の帯を仕ながら
無理やりに時雨ふり行戀の道
横紙をさく僞りの文
あいつの顔詠めまいらせ、口く
も又給仕はしおろふ事じや
御明あかしも茶湯も絶て持佛堂
三十三年三十四年

六 吟 鶴 花 友 六 吟 鶴 花 友 六 吟 鶴 花 友

しやうしきにいはずと帳を出して見よ
此等類は有明の月
虫の聲自慢におもふて居た物を
野にきりくす髪ははやらす
穂の霜立るひ男はめらりひよん
一日暮らしときくの花さく
明上や石火の影のたばこの盆
口のそけは玉津島姫
三味線の歌の望をおもふ人
花や今宵の幽霊が出た
みとりたつ印の松のくらがりから
公儀もつばら初禮の聲

友花鶴吟六友花鶴吟六友花

何餅

花にくむやもとより爰は上々吉
櫻のにはふ山おろしあり
鐵の谷は薬研の雪きゝて
この鏝のねと鶯の聲
見世の先へ朝毎にはきたれとも
およりやつたりこういふてたも
内この五口を仕舞ふ夜半の月
人は我でもつ山の端の色
一の繩で上らふ物か露時雨
軒口くゝるとつたりの聲

西 西 西 西 西
六 花 友 鶴 吟 六 花 友 鶴 吟

毛をふひてあらしはけしきてじはよう
初瀬といへる傾城のはて
肌ふるる尾上のかねの敵にて
忽ち大蛇とうごく瀧浪
海のみは絶えすとふたりうたふたり
壺屋か所に今晚も又
傘をやふれ口きかぬ時
貞徳立圃の真中にたつ
帆柱や京を見みかけて上り舟
二十六日七日八日
月に影ないにきわまる物節季
脈かあかつてたのむ米種
雁啼を皆一門の中嶋

吟 鶴 友 花 六 吟 鶴 友 花 六 吟 鶴 友 花 六

雲も隔てぬ嫁に取のり
鳴神の物おもひをむるも臍の下
檜原の奥は二つにわれなへ
尋ねんおからおもての臺所
すいふんしまつを心らふべきもの
わずらひは晝にさかつて夜のぬれ
つけさしおさえし生姜一べき
山城の大臣さまと申さるゝ
海ちかか、えた玉川の里
卯の花の浪間の貝は入残し
石灰にほしてなく郭公
昆弱こんじやくやふるひのやまぬ月に風
精進めしはひゆる水漬

花 六 吟 鶴 友 花 六 吟 鶴 友 花 六 吟 鶴 友 花 六

穂淋し寺はどう治どの其間
關路の駒の一番さそうか
旅の空武士荷はあらし風過で
松平家の雲の行末
是てしる時雨ぞそむる紋盡し
生れ落ちると胞衣洗つて見る
お目出度ひ中天竺の事なるに
それは仕合宰人ありつく
かみさまの氣にさへいれはあの家は
月に六さい自由なる影
穠の夜は枕ならべてよい加減
大よせさする戀草の色
人ときけり七十餘度に落ちる園

鶴 吟 六 花 友 鶴 吟 六 花 友 鶴

又雪隠へ通ひ路の春
あさ霞常衣の袴かいからけ
溝飛越へて大内の山
今ははやうばもさすかに桂川
身をなけうとは短夜の月
ころは梅の雨の帝もなけかれて
かしらかいたい玉のかんざし
あんまごり蓬萊宮へ尋行
嘶の伽になるほどながひ
京の喧嘩五尺三寸候いひしが
大きなことなる瀧の水
たつて見よさあ背くらべの彌陀女來
今度かゝゆる地獄の馬どり

鶴 吟 六 花 友 鶴 吟 六 友 鶴 吟 六

口と非時も二合半なし月の宮
初しはのさすおむかひの舟
穰の風七胴の濱はもはや是
西向になをすあはち嶋山
稔房かするしの煙つけそめて
賣薬てはまさの下庵
寶劍の假令きり疵なりとても
あい手は見知つた大おこ山
小額をたてるとおもへばなでつけて
先三番三をはしめい
あいたところへてうとまいつてくつすり
露のぬきとてとをすをささし
かせきてしや中將姫の袖の月

友 花 六 吟 鶴 友 花 六 吟 鶴 友 花 六

とし子にくなくきりくす
渡りそめ長橋かるし岡の花
赤めし白餅躑躅さく山
暖那日光責あいにけり
室の八島の末と一段
おもしろい替つた煙たつ所
松さへ梅に蒲鉾の板
山入や谷の摺鉢くはらくく
さて聞度はしたるやうすを
西國へ責て状にてつけ届け
上らうとまつ生の松原
戀風はまさる扇屋住吉屋
替て呼名もあらわれ出し

友 鶴 吟 六 花 友 鶴 吟 六 花 友 鶴 吟

僧正今はかやう乃姿にて
紙子二くわんの御經の聲
月も雪も無常の風の通さぬか
喉の腫れたる白河の關
梅干のしほかまこ浦の見渡して
いつくは口れと青物の店
出るよりいる日口やおもらん
大工の道具乾坤の箱
すめる世の人の心の横手かね
あたまの辻の邪む花の山
何事も柳にやつて道化役
めつたにおかしい鳥の囀り

六花友鶴吟六花友鶴吟六花

葛 何

いろくよ花よ團子よ上戸よ下戸よ
めいくき、の春と腹中
甚兵衛座をさてもといひてかすみひきて
とらぬ合点のかねもとの山
はじめから天ほと出たる空の月
唯短ふて種風そふく
下の句は又下の句を夕露の
鈴むし日ぐらし飛んで火渡し
隔番に不破の關屋を住かえて
藤川の浪與力同心

西 西 西 西 西
友 花 六 鶴 吟 友 花 六 鶴 吟

自然の時君につかへる志し
事關になら采女になりとも
三津寺の影間の子ではまだもあれ
行基取たてすこし合力
すきはひの道つけ給ふ有かなや
樂屋からして人中を見る
富士淺間煙くらべの藥辨當
服紗ひろけて武藤野の角
よう書た草にかくる、女の手
おきくたのめば煩惱の垢
月をうらみややすさかだる耳の穴
錢一文のもじの雁金
住吉の割松賣は穂さびし

友 吟 鶴 六 花 友 吟 鶴 六 花 友

ちいさい時には塩をふまする
蛤は希きにあつて蜆貝
春日の影もまはり振舞
はなは一重かさねて人は進せまい
持て這ふたる藤の店賃
春日山北側はよき所なり
曆ひらて巻向のおく
反故はらえ白雨の雪のかさなりて
師匠の手風つよふふく見ゆ
六尺の棒には七尺しさりけり
先木戸口を両方へひらけ
一陣に進出たる月の駒
このたび命を露とも存せず

友 吟 鶴 六 花 友 吟 鶴 六 花 友 吟 鶴

朝顔のはなすけさま貰ふてこふ
揚屋は樂に胸の火をする
はらたてなむしごおもへば飛登
親の前では勢田の唐はし
ふるひ嘶昔むす計なりにけり
それと神代の鳥おどろかす
龍田山から鐵砲もしづまりて
御殿しきりに御誕生をまつ
天下にすむ土の車のわれらまで
子どもの時は人形つくる
物のあはれさいの川原であそんたり
東へむいて四條のあみ屋
明方の月かしらには櫛をさし

花 六 鶴 吟 友 花 六 鶴 吟 友 花 六 鶴

今は芭蕉葉に獨も寝られす
世間寺いつのころより松の風
稽古嘶子に松虫の聲
とこそては舞臺を踏ふ音羽山
水碓や瀧のしら浪
うごんの粉絶て久しくなりぬれと
かたし目貫をつけ替てをく
のほり龍くたりちかつく旅ころも
矢たてにしこむ雪舟が筆
魚の店百年計過にけり
袖の湊といふた所も
見次手に幸のはしかまど山
御内儀様へはまだ無案内

吟 友 花 六 鶴 吟 友 花 六 鶴 吟 友 花 六 鶴

腰もと龜かどくしやと夕月
のつてまいつた織姫の手
年にこそ待てども遅ひ穗の雲
不老門の前に食かさめけり
すししこむかはんれいが釣の魚
身にまかせたるまつり客人
負つ抱つ貧乏神とも皆つれて
夜ぬけのあとには出雲八重垣
人魂を結ひどめたきつまこめに
醜ふなられた貴妃の面影
妊まして腹をかゝゆ家胃糸の帯
當寺の靈寶沙汰なしの穂
血脈に包みこふたる心の月

六 鶴 吟 友 花 六 鶴 吟 友 花 六 鶴 吟 友 花 六 鶴 吟

所作を繰ぬる露の玉水
世中や唯居る能に花の晝
人をそしつて歸るかり金
おもて向になんどもなしに春の雲
問屋の霞引負の外
請出すといふ計にや芳野山
比翼連理の材木の數
隠し男何人の内とあらためて
終には命おはるまさかど
初段からあすもや聞ん芝居すき
くじやくもくまも犬ものこさす
重寶な訓蒙圖彙やあけぬらん
なほ書物とおほし月の影

友 鶴 六 花 吟 友 鶴 六 鶴 吟 友 花 六 鶴 吟 友 花 六 鶴 吟

種風藥違をせぬやうに
 桑酒忍冬枯枝かるかや
 榮耀には色々の野を好まれて
 小六ころりと死んだあともまで
 町衆も不祥についた竹の杖
 此道行とへたの大連れ
 乗掛の尻にこりつく蠟まいり
 鼻ねち持てはらひきよむる
 大節季喧嘩まなこはすかぬ人
 花の雪とて峰てわき物
 むしの子や柳の髪をすきぬらん
 池の水とさえて水いれ

吟 鶴 六 花 友 吟 鶴 六 花 友 吟 鶴

何 秤

一のみや酒呑童子がはなの山
 渡邊行手をねちる藤の枝
 春の夜の自然の時はやはらにし
 とつこい〜鳥の囀り
 其くろは目が御座るとて打霞
 高嶺に色の残る一丁山楸
 浪の月碎けてしほの置あはせ
 しつくいつめの入海の露
 横槌て打出の濱の穂のくれ
 石山寺のかねの草鞋
 韋駄天妄執の雲も晴れかたし

西 西 西 西 西
 花 鶴 六 吟 友 花 鶴 六 吟 友 花

須彌の四州は八せんの入
きうすえは臍土器の内すすむ
氣かかるふなるはうつき桃灯
こう九十百にふりても躍出
紅葉うつらふ御朱印傳馬
公家衆の分たせたまふ萩の陰
野にすむ月をいる、長持
今日は大夫揃の轡むし
夕淋しき二口もこひ
しのび駕籠ののほり詰めたる峯の松
江戸は法度のつよい山風
火用心きのふの雲は静にて
夜食時分をきく郭公

友 吟 六 鶴 花 友 吟 六 鶴 花 友 吟 六

病人の枕にちかきまさのはし
常にすきたる女のかみかき
浮世町阿波島殿のたいて持
酒のしたみに海はなみたの
此上は薄ふ呑みなき茶舟こく
あの松原に寺かあらふか
法華になれ兼平勸め申すやう
妙の一字に二字銘の鍛治
終に炭からだは土中に埋むとも
醤油つけて骨は喰れす
じやのしすも昔をおもふ浪の月
草のわんの石臼に岩
羽衣は夏ともつかぬ布まきて

友 吟 六 鶴 花 友 吟 六 鶴 花 友 吟 六

ちと雇ひませよあさしのかく山
 ついそこな住來岡へい口しのまに
 戯女とらえてはやひ事した
 見たまはふたつ見へたる下帯
 かの海底に飛入は風呂
 ついてをつて盗まれおるなそでの浦
 おのれつかえは年のよるなみ
 世をわたる業はさまくはんや猿
 すりには訴人月に群雲
 向ふさしき西には秋の山見えて
 津々りきてう三十余壘
 煤箒や野くれ里くれ花の春
 おり湯しかけてくます若水

吟 六 鶴 花 友 吟 六 鶴 花 友 吟 六 鶴

蕉働あはらたんどく山の朝霞
 光明遍照十方擅那
 勤の文古御手持れたり
 刷毛と申すは遊ひ子の供
 待宵やうたふも舞ふも糊細工
 是とよう似たはや鳥加なく
 あの二子東路さして行道に
 さても因果のめくれる富士の根
 つかんだか煙は空に火の車
 ふき出しの銀見る目か鼻か
 犬の聲物静なる狐なく
 月すむ棟に棟にあい槌
 萬葛嘶の伽にかゝつたり

吟 六 鶴 花 友 吟 六 鶴 花 友 吟 六 鶴

太閤の時うつのやの露
先金のひやう簞よりも馬を出せ
人間万事からくりの種
もたねとも商上手に生れつき
こひ病をおもへは世界圖法師しや
天地の二つあはす賢薬
雲水に三日ひたする心玉
たつ波絶て硯石とる
長寝故古郷の花も忘れけり
髪もいはすに柳はみどり
禪法の詰ひらきや大口舌
ねんころ是まで九年面目
軍既にあいそも今は月の空

六 鶴 花 友 六 鶴 花 友 六 鶴 花 友

壽永の秋につまみ喰する
元來もいやしき古紅葉
歟ひら足の鹿やなくらむ
はいよせの跡は菅野となりけり
おどこの子はなし武庫の山風
薄情片帆にかけて行はとに
波のまくらを二つとり出す
磯際の松田の名譽つかまつる
一群の鷺たつなり東西
六條さし入り源氏のはゝかど肝をけす
綿帽子しめる紫式部
立姿くも隠れにし夜見世見に
樂に影を井筒屋の月

六 鶴 花 友 六 鶴 花 友 六 鶴 花 友

徳はなし

先無事て老にけらしな老の秋

白比丘尼とてそでの露霜

むしの音もほそりを一つのそもうか

唯はあからぬ武藏野の草

この米にいかなる風の明當て

鏡よ網よ楫よ日和見

外海をいそく事にて口らはす

爰は香ひの花の浪たつ

□□の梅の飛人た所かおもしろい

時そのとかな天下天神

物かく物縫ふ裸てもよへ

吟

(三八頁三行
四行間へ入ル)

花友吟六鶴花友吟六鶴

序

世間の廣き事、國々を見巡りて、談話の種を求めぬ、熊野の奥には、湯の中に鱒振る魚あり、筑前の國には、一ツをさし荷ひの大蕪あり、豊後の大竹は手桶となり、若狭の國に、二百餘歳の白比丘尼、近江の國堅田に、七尺五寸の大女房もあり、丹波に、一丈二尺の鹹鮭の宮あり、松前に、百間續きの滑海藻あり、阿波の鳴戸に、龍女のかげ硯あり、加賀の白山に、閻魔王の巾着もあり、信濃の寐覺の床に、浦島が火打箱あり、鎌倉に、頼朝の小遣帳あり、都の嵯峨に、四十一まで大振袖の女あり、是れを想ふに、人は妖

物世に無いものはなし

難波 西 鶴

諸國はなし

大下馬

卷之一

初 公事は破らずに勝つ

□奈良の寺中にありし事

▲此段 智惠

二 見せぬ所は女大工

□京の一條にありし事

▲此段 不思議

三 大晦日は合はぬ算用

□江戸の品川にありし事

▲此段 義理

四 傘の御託宣

□紀州の掛作にありし事

▲此段 慈悲

五 不思議の足音

口伏見の間屋町にありし事

▲此段 音曲

諸國はなし

◎奈良の寺中にありし事

智恵の段

大織冠讃岐の國房崎の浦にて、龍宮へ取られし珠を取り返さむために、都の伶人を呼び下し給ひて、くはんげんありし唐太鼓、一つは南都東大寺に納め、又一つは西大寺の寶物となりぬ、此の太鼓何時の頃か西本願寺に渡りて、今に二六時中を勤めける、昔日に革張り替ゆる時此の中を見るに、西大寺の豊心丹の方組を細字にて書き附けありけるなり、外は木を露はし、中には諸々の羅漢を彩色金銀の置き上げ、日本比類無き名筒なり、毎年の興福寺の法事に在る事ありて、東大寺の太鼓を借りて勤められしに、一年東大寺より太鼓を貸さずして事を欠きける、衆徒神主の言葉を當年ばかりはと添へられ、やうく借りて佛事を済ましぬ、其の後東大寺より使者を立つれども太鼓を戻さず、興福寺の寺中集つて評判する、數年貸し來つて今此の時に到り憎き仕方なり、唯は返さじ打ち破つてといふものあれば、それも手緩し飛火野にて焼けど、あまたの若僧惡僧勇みて方丈に聲響き渡りて鎮まらず、其の中に學頭の老法師の進み出で、今朝より聞くに何れもの申分皆國土の費なり、某が存するには、太鼓を其の儘當寺のものになせる分別ありと、筒の中に東大寺と先年よりの書附を削り、新しき墨にて元の如く東大寺と書き記し、此の事沙汰せず東大寺に戻せば、悦び寶藏に入れ置き重ねて出す事な

し、翌の年また興福寺の法事前に使僧を遣はし、例年のとはり預け置き候太鼓を取りに参つたと申せば、腹立して使者の坊主を打擲して歸しける。此の事奉行所へ申し上ぐれば、御詮議になつて太鼓を撿めたまふに、名筒を削りて東大寺との書附、たごへ興福寺からの仕業にても古代の書附知れ難し、自今興福寺の太鼓にきはめ、先例のとはり置き所は東大寺に預け、年々いる時をうちけるとなむ、

◎見せぬ所は女大工

不思議の段

道具箱には錐鉋墨壺曲尺、顔も三寸の見直し、凹なる女房手足選しき、大工の上手にて世を渡り、一條小反橋に住みけることなり、都は廣く男の細工人もあるに、何とて女を雇ひけるぞ、されば御所方の奥局忍返の損ね、または窓の竹打ち替へるなど、少しの事に男は吟味も煩厭く、これに仰せ附けられけるとなり、折節は秋も末の、女臈達案内して彼の大工を紅葉の庭に召され、御寐間の袋棚裏比須大黒殿まで急いで打ち放せと申し渡せば、未だ新しき御座候を毀ち申候事はと尋ね奉れば、不思議を立つるも道理なり、過ぎにし名月の夜更けゆくまで、奥にも御機嫌好くおはしし、御轉業の枕近く右丸左丸といふ二人の腰元どもに琴の連弾、此の面白さ、座中睡を覺まして四邊を見れば、天井より四つ手の女、顔は乙御前の黒きが如し、腰うすびらたく匂匂にして、奥様のあたりへ寄ると見えしが、悉しき御聲を揚げさせられ、守刀を持ちて参れと仰せけるに、御傍にありし藏之助取りに立つ間に其

の面影消えて、御夢物語の恐ろし、我が背後骨と想ふ所に、大釘を打ち込むと思し召すより、魂消ゆるが如くならせられしが、されども御身には何の仔細も無く、疊に血を流してありしを、祇園に安部の左近といふ卜占召してみせたまふに、此の家内に業なす験のあるべしと申すによつて、残らず撿むるなり、用捨無く其處等も打ち放せと、三方の壁ばかりになして、なほ明障子まで放しても何の事も無し、心に懸るものはこれならではと、叡山より御祈念の札板おろせば、暫時動くを見て何れも驚き、一枚宛離して見るに、上より七枚下に長さ九寸ばかりの守宮、胴骨を金釘に閉ぢられ、紙は薄くなりても活きて働かしを、其のまゝ煙になして其の後は何の咎も無し、

◎大晦日は合はぬ算用

義理の段

榎乾栗神の松やま草の賣聲も忙しく、餅搗宿の隣に煤をも拂はず、二十八日まで髭も剃らず、朱鞘の反を返へして、春まで待てといふに、是非に待たぬかと、米屋の若い者を睨みつけて、直なる世を横に渡る男あり、名は原田内助と申して、品川の藤茶屋の邊に店借りて、朝の薪に事を欠き夕の油火をも見ず、是れは悲しき年の暮に、女房の兄半井清庵と申して、神田の明神の横町に薬師あり、此の許へ無心の状を遣はしけるに、度々迷惑ながら見捨て難く、金子十両包みて、上書に貧病の妙薬金用丸萬に吉と記して、内儀の方へ送られける、内助喜び、日頃別して語る浪人夥間へ、酒一つ盛らむと呼

びに遣はし、幸ひ雪の夜の愉快さ、今までは崩れ次第の柴の戸を開けて、さあこれへといふ、以上七人の客何れも紙子の袖を連れ、一重羽織ごこやら昔を忘れず、常の禮義過ぎてから亭主の罷り出で、私任せの合力を請けておもひのまゝの正月を仕ると申せば、各々それはあやかりものいふ、其れにつき上書に一作ありと件の小判を出せば、さても輕口なる御事と見てまはせば、盃も數重なりて、良い年忘れ殊に長座と、千秋樂を謳ひ出し、燗鍋盃辛壺を手造りにしてあげませ、小判も先づ御仕舞ひ候へと集むるに、拾兩ありしうち一兩足らず、座中居直り袖などふるひ、前後を見れどもいよく無いにきはまりける、主人の申すは、其の内一兩はさる方へ拂ひしに、拙者の覺え違ひといふ、只今までたしか十兩見えしに面妖の事か、兎角は銘々の身晴れと上座から帯を解けば、其の次ぎも檢めける、三人めにありし男澁面造りてものをも謂はざりしが、膝立て直し、浮世には斯かる難儀もあるものかな、某は身ふるうまでも無し、金子一兩持ち合はすこそ因果なれ、想ひも寄らぬ事に一命を棄つると、思ひ切つて申せば、一座口を揃へて、こなたに限らずあましましき身なればとて、小判一兩持つまじきものにもあらずと申す、如何にも此の金子の出所は、私持ちざりたる徳乗の小柄、唐物屋十左衛門方へ一兩二歩に昨日賣る事紛れはなけれども、折節悪し、常々談り合はせたる好誼には、生害に及びし後にて御尋ね遊ばし、尸の恥をせめては頼むと申しもあへず、革柄に手を懸くる時、小判はこれにありと、丸行燈の陰より投げ出せば、扱はと事を鎮め、ものには念を入れたるが良いという時、

内證より内儀聲を立て、小判は此方へ參つたと、重箱の蓋を着けて座敷へ出されける、これは宵の山の芋の煮染物を入れて出されしが、其の湯氣にて取り着きけるが、然もあるべし、これでは小判十一兩になりける、何れも申されしは、此の金子拾ひたもの數多くなる事目出度しといふ、亭主申すは、九兩の小判十兩の詮議するに十一兩になる事、座中金子を持ち合はせられ、最前の難儀を救はむために御出しありしは疑ひ無し、此の一兩我が方に納むべきやうなし、御主へ返したしと聞くに、誰返事にしてもなく、一座異なるものになりて、夜更け鶏も鳴く時なれども、各々立ち兼ねられしに、此の上亭主が所存のとほりに遊ばされてたまはれと願ひしに、兎角主人の心隨せにと申されければ、彼の小判を一升樹に入れて庭の手水鉢の上に置き、誰方にも此の金子の主取らせられて御歸りたまはれと、御客一人宛立たしまして、其の後内助は手燭ともして見るに誰とも知れず取つて歸りぬ、主人即座の分別座馴れたる客のしこなし、彼是武士のつきあひ格別ぞかし、

◎傘の御託宣

慈悲の段

慈悲の世の中とて、諸人のために好き事をして置くは、紀州の掛作の観音の貸傘二十本なり、昔より或る人寄進して、毎年張替とて此の時まで掛け置くなり如何なる人も此の邊にて雨雪の降り懸かれば斷りなしにさして歸り、日和の時律義に返して、一本にても足らぬといふ事無し、慶安二年の春、

藤代の里人此の傘を借りて和歌吹上に差し懸かりしに、玉津島の方より神風どつと、此の傘取つて行衛も知らずなるを、惜やと思ふ効もなし、吹き行くはどに肥後の國の奥山、穴里といふ所に落ちける、此の里は昔より外を知らず住み續けて、無佛の世界は廣し傘といふものを見た事の無ければ、驚き法躰老人集まり、此の年まで聞き傳へたる例も無しと申せば、其の中に小賢しき男出で、此の竹の數をよむに正しく四十本なり、紙も常のとは格別なり、忝くもこれは名に聞きし日の神内宮の御神躰、爰に飛ばせ給ふぞと申せば、恐れをなし俄に鹽水を打ち、荒蕪の上に直し里中山入をして、宮木を引き萱を刈り、はごなう伊勢移らして崇めるに従ひ、此の傘に姓根入り、五月雨の時分社壇類に鳴り出で体む事なし、御託宣を聞くに、此の夏中竈の前をしだらくにして油虫を湧かし、内神まで汚らはし、向後國中に一疋も置くまじ、又一ツの望みは美しき娘をおくら子に備ふべし、然もなくば七日が中に車軸をさして人種の無いやうに降り殺さむとの御事、各々恐怖やと談合して指折の娘どもを集め、それかこれかと穿鑿する、未だ白齒の女泪を流し嫌がるを聞けば、我々が命とてもあるべきかと、傘の神の異な所に氣を着けて歎きしに、此の里色よき後家のありしが、神の御事なれば若い人達の身代に立つべしと、宮所に通夜待つに何の情もなしとて、腹立して御殿に驅入り、彼の傘を思へば身躰だふし奴と、引き破りて棄てける、

◎不思議の足音

音曲の段

唐土の公治長は諸鳥の聲を聞き分け、本朝の安部の師泰は人の五音を聞く事を得給へり、此の流れとや申すべし、爰に伏見の豊後橋の片陰に笹垣を結び心を行く水の如くにして世を暮らしぬる盲人あり、捨てし身の昔残りて常人とは見えす、常に尺八吹きて萬の調子を聞きたまふに、違ふ事稀なり、或る時は問屋町の北國屋の二階座敷にて、九月二十三夜の月を待つ事ありて、宵より此の所の若い者の集まりて、御酒機嫌の小唄淨瑠璃、日待月待何處も同一騒きぞかし、旦那山伏の多聞院めでたき事どもを語れば、主人嬉しさのあまりに何れに因らず御遊興を御好み次第、客方より尺八を聞く事ならばとの望み、主人知己とて頓て呼び寄せける、先づ吉野の山を所望して吹く時、茶の通ひする小坊主箱階子を上げるを聞きて、油溢すよし申されける、大事にかけて油注子持ちしに、放し置きたる杉戸轉け悪かり想はぬ怪我をいたしける、各々これはと横手を拍つて、唯今大道を行く者は何人ぞと申せば、足音の調子聞き合はし、これは老女の手を引き男は物思ひして行く顔色、足取の忙しき取揚婆なるべし、それかと人をつけて聞かすに、しきりがまわつたら腰は我等でも抱きますが、とても事の事に息子を産めば仕合せと申す、大笑ひして又其の次に通る者を聞くに、二人ちやが一人の足音を、見せに遣れば、下女小娘を負ふて行く、其の後に通る者を何と聞くに、これは正しく鳥類なるが己が身を大事

がるといふ、又見に行くに、行人鳥の高足駄を穿きて道を静かに歩み行く、さても争はれぬ事どもなり、とても慰みに今一度聞きたまへど、何れも虫籠を開けて待つに、道筋も見兼ね初夜の鐘の鳴る時、旅人の下り舟に乗り遅れしを急ぐ風情、二階の灯火に映りて見るに、一人は刀脇差をさして黒き羽織に菅笠を擔ぎ、今一人は挾箱に酒樽を附けて行く、彼を問へば二人連なり、一人は女一人は男といふ、宵からの中に是ればかりが違ひぬ、我々見留めてなるほど大小までさして侍衆じやと申す、いな事や女にてあるべし、各々の目違ひはなきかと申せば、又人を遣はし様子を聞かせけるに、樽持ちたる下人に低語くは、夜舟にて其の樽心懸けよ、酒にはあらず皆銀なり、夜道の用心に斯く男の風俗して、大坂へ買物に行くと申す、よく聞けば五條のおかた米屋とかや、

諸國はなし巻之一終

諸國はなし

卷之二

六 雲中の腕おし

□箱根山熊谷にありし事

▲此段 長生

七 狐の四天王

□播州姫路にありし事

▲此段 恨

八 姿の飛乗物

□津の國池田にありし事

▲此段 因果

九 十二人の俄坊主

□紀伊國あは島にありし事

▲此段 遊興

十 水筋のぬけ道

口若狹の小濱にありし事

▲此段 報

諸國はなし

◎雲中の腕押

長生の段

元和年中に大雪降つて、箱根山の玉笹を埋みて往來の絶えて、十日ばかりも馬も通ひ無し、爰に鳥さへ通はぬ峰に庵を結び、短齋坊といふ木食ありしが、佛棚も世を夢の如く暮らして百餘歳になりぬ、常に十六むさしを慰みにされけるに、或る時奥山に年重ねたる法師の來つて、むさしの相手になつて遊びける、其の有様を見るに、木の葉を貫き肩に懸け、腰には藤蔓を絡み、黒き顔より眼光り、人間とは想はれず、松の葉をこじり食物として、物いふ事稀にして、これはど好き友は無し、一日夕暮に焚火に事を欠きしに、彼の老人腰より草巾着を取り出だし、是れは鞍馬の名石にて、火の出づる事早しと、判官殿に貰ふたと云さくしう語る、短齋驚き、そなたは如何なる人ぞ、其の時は久しき事といへば、我こそ常陸坊海尊、昔に變る有様といふ、是れを思ひあはすに、此の人の最後の知れぬ事を申し傳へしが、扱は不思議と、過ぎにし辨慶は色黒く背高く、繪にさへ恐ろしく見ゆると尋ねければ、それは大きに違つた、また無き美僧と語る、義經こそ丸顔にして鼻低う、向齒抜けて斜視眼にて、縮み頭に横肥つて、男振は一つも取柄なし、唯志が大將で、其の他は片岡が萬に吝ひ事、忠信は大酒啖ひ、伊勢の三郎は買掛を濟まぬ奴、尼ヶ崎渡邊福島の船賃待顔して一度も遣らず、熊井太郎は一年

中比丘尼好き、源八兵衛はぬけ風に俳諧して埒のあかぬもの、駿河二郎は面妖な事の夏冬なしに禪窟嫌ひ、龜井は何をさしても小刀細工が利いた、鈴木次信は捧組にて一生飛子買うて暮らす、兼房は淨土宗にて後世願ひ、此の他一人もろくな者はなかつたと語る、さてまた静は今に申すほどの美人かと問へば、否々十人並に少し勝れた女房を、其の時は判官世盛りにて借銭は無し、唐織鹿の子の法度も無く、明暮京の水で磨きぬれば美しい、今でも大名衆の妾ものども、御關所の検めに見るに、其の時よりは風俗が好いと申して、まだ談したい事もあれども、皆嘘のやうにおもやう、誰ぞ據證人欲しやといふ折節、柴の網戸を音信れ、正しくこれに海尊のお聲がしまする、少御目に懸かりたしと内に入る、やれ懐しやく、命ながらへて又逢ふ事の嬉し、先づ御亭坊へ引きあはしましよ、是れは猪俣の小平六とて昔の好誼なるが、自今以後は顔見識られて互にと申して通夜古の軍物語昨日今日の如く、今に平六力のほどとはいへば、さのみ變らじと片肌脱ぐ、常陸坊も腕まくりして、龜割坂にて挽引せし事憶出だして、さらば腕押と兩人負けず劣らず、三時あましも揉あへば、短齋も中に立ち兩方へ力を附けて、懸聲雲中に響き渡つて、三人ながら姿を失ひて、此の勝負知つた人もなし、

◎狐四天王

恨之段

諸國の女の髪を切り家々のはうろくを破らせ高民を煩はせたる、大和の源九郎狐がために姉なり、知

年久しく播磨の姫路に住み馴れて其の身は人間の如く八百八疋の眷屬を役ひ、世間の眉毛思ふ隨に鑿みて人をなぶる事自由なり、爰に本町筋に米屋して門兵衛といふ人、里ばなれの山陰を通るに、白き小狐の集まりしに何心もなく礫打ち懸けしに、自然あたり所悪くそのまゝ空しくなりぬ、不便とばかり思うて歸る、其の夜門兵衛が屋敷の棟に、何百人か女の聲して、御姫様たゞ野遊びましますを命を取りしもの、そのまゝは置かじと石を擲つ事雨の如し、白壁窓蓋で打ち破れども其の礫一ツもなし、家内驚く、翌の日の晝前に旅の出家の來つて、お茶一ツ賜はれと申されけるに、下女に申しつけて參らせけるに、間もなく同心らしき大男二三十人亂れ入りて、御尋ねの出家を何とてかくし置さけるぞと、其の斷り聞き入れず、亭主内儀を押して主になして後、彼の出家ともに尾のある姿を露はして遁歸る、是非もなき仕合せなり、又門兵衛が嫁息子の門右衛門、北國に行きて留守の内とて里へ歸りてありしに、彼の門右衛門になりて四五人連にて走り込み、女房を捉へ、我他國の後にて密男露顯れたり、命は許してと申しもあへず、天窓を刺られ身に覺えの無き事すと、年月の恨みをいうて歎きぬ、おのれ證據を見せむと、女を引き立て遙の山中に行きて、五人立ち並び一人々々名乗りける、これは二階堂の煤助、鳥居越の中三郎、隱笠の金丸、鶏喰の關太郎、野あらしの鼻長とて、於佐賀部殿の四天王一人武者これなりと、形を變へてぞ失せける、此の事門兵衛に行きて深く歎くに効無し、又其の次ぎの日大きな葬禮を拵へて、引導の長老旗天蓋をさしかけ、玉の輿光をなし孫に位牌を持

たせ、一門白衣の袖を絞り、町衆は袴肩衣にて野墓に送る氣色、門兵衛親里五六里も離れしが、けはしく人造はし、夜前頓死いたされ候、御歎きあるべしと、少しも晚く御知らせ申すなり、直に墓へ御越しぬれと、此のありさま哀れに煙となし、親類ばかり後に残り、さてもく夢の世や、若いを先きに立て、おもしろき事もあるまじ、これにて法体ましますと、俄躰主になし姫路に歸れば、門兵衛内儀も姿を變へてありし、様子聞きて悔めども、髪は生えずしてをかし、

◎姿の飛乗物

因果之段

寛永二年冬のはじめに、津の國池田の里の東、吳服の宮山、衣懸松の下に新しき女乗物、誰かは棄て置きける、柴蒔る童子の見つけて町の人に語れば、大勢集まりて戸閉を開けて見るに、都めさたる女郎の二十三なるが、美人といふはこれなるべし、黒髪を亂して末を金の平元結を懸けて肌着は素く上には菊栴の地無しの小袖を襲ね、帯は唐織に練の薄物を被ぎ、前に時代蒔繪の硯箱の蓋に秋の野を寫せしが、此の中に所落御養雁種々の菓子積みて、剃刀かたし見えける、御方は何國いかなる事にて斯くお獨はましますぞ、仔細を御物語あるべし、故郷へ送り歸して參らすべしと、いろく尋ねけれども言葉のかへしもなし、唯さし俯向きてまします、目つきも恐ろしくて我先きにと家に歸りぬ、今宵そのまゝ置きなば狼が憂目を見すべし、里におろして一夜は番して、翌朝は御代官へ御斷りを申

すべきと、又山に上れば彼の乗物は一里南の瀬川といふ宿の沙濱に行きぬ、既に日も暮れて松の風凄まじく、往來の人も絶えて所の馬士四五人此の女郎を忍び行きて、浮世の事をも語り盡くして情といへど取り合はずましますば、荒男の無理に手をさして腦める時、左右へ蛇の頭を出だし、男どもに喰ひ附きて身を痛める事大方ならず、何れも眼眩み氣を失ひ、命を不思議に免れ、其の年中は難病に合へり、其の後は乗物芥川にありといへり、または松の尾の神前にも見え、次ぎの日は丹波の山近く行き、片時も定め難し、後には美しき禿に變り、または八十餘歳の翁となり、或る日は顔ふたつになり、目鼻の無い姥ともなり、見る人毎に同一態にはあらず、これに恐れて夜に入り里の通ひもなく、世の防げとなりぬ、此の事知らぬ旅人夜道を行くに、思ひも寄らぬ乗物の棒肩を離れず、奇異の思ひをなしける、されども少しも重からずして一町ばかりも過ぐると、俄に草臥出で容易く足も起たず、難儀にあへる陸繩手の飛乗物と申し傳へしはこれなり、慶安年中まではありしが、いつとなく絶えて、橋本狐川の渡に見馴れぬ玉火の出でしと、里人の語りし、

◎十二人の坊俄主

遊興之段

泳ぎ習ひは瓢箪に身を任せて、浮き次第に水練の上手となつて、自然の時の心懸け深し、折節夏海の静かに、ただの浦遊びとて御船を寄せられしに、御臺所船より御膳の通行、浪の上を行くに腰より下

ばかりを濡らして、自由なる事疊の上にかはらすして、月代をする人もあれば、中將基をさすもあり、あふむ盃を交はし、曲飲するも可笑し、曲舞にのせて小鼓をうち、または瓜の曲剣さ、これさへ奇妙に詠めしに、四五人してすくりならを何程か手毎に抱へて、海中に入りて出ぬ事二時に餘りて、二王の形を造りて手足の力みまでを細繩がらみの細工、是れぞ佛師も及び難し、種々御遊興の折から、御舷に關口の何某豊かに遠見きて居られしに、小性衆に仰せ附けられ、御意と言葉を懸けて小浪の中へ突き落しけるに、遙の舟にあがりぬ、いかなる手者もたすすにはと大笑ひすれども、少しも驚かずめし舟に乗り移れば、何とて手も無く一人は沈みけるかと仰せける、少人にあやまりもあればと存じ、左の袂にしるしを附け置くのよし申し上ぐる、彼の者めして御覽あるに、麻袴より帷子まで二三寸突き通し、其のかすり脇腹かけて茨がきの如く細き筋のつきしに、御前はじめて各々横手を拍ちぬ、落ちさまに差添抜きてあてしに、其の人さへ覺えねば、況して外よりは眼にとまらず、早き事日本一の御機嫌、御舟は浦々巡れば、家中の舟は磯にさしつけ、阿波島の神垣の邊までも荒らし若き人々酒興せしに、俄かに高波となり、黒雲立ち累り長十丈餘の大蛇の出で、鱗は風車の如し、左右の角枯木と見えて火焰吹き立て、山更に動くを見て何れも騒ぎけるに、間近く來りしに、御長刀にて拂ひたまへば恐れて後に歸る、大敵りして小船は天地覆へして惱みぬ、沖より十二人乗りし小早横切れに押すと見えしが、蛇蝎一息に飲み込み身煩悶せしが、間もなく後へぬけて汀に流れ着さしを見るに、殘ら

す夢中になつて頭髮一筋も無く十二人造り坊主となれり、

◎水筋の拔道

報之段

若狭の國小濱といふ所に、獵師の使ふ網の糸を商賣して、有徳に世を渡る人あり、越後屋の傳助とて此の湊に隠れ無し、年切の女に名を久と呼びて、其の姿北國者には優しく、心を懸けし人あまたの中にも京屋の庄吉とて都より通ひ商ひせしが馴染めば、片里も任家となりて年を重ねてありしが、未だ定まる妻も無し、彼の久を忍び馴れて未々までの事を申し交はせしに、親方の女房見咎めあられなく折檻して、兎角は能人並なるがゆゑにいたづらをするなれば、目の前に思ひ知らせむと、火箸を赤めて左の脇顔にさしつけゝるに、皮薄なる所焼け縮みて、女の身にしては此の悲しさ、大方亂氣になつて年月手馴れし鏡臺に向へば、顔をかしくなるを身煩悶して歎き、世にながらへても詮なしと思ひ極め、心にある事書置して、小濱の海に身を投げゝるに、其の夜は沖浪荒く死骸も行方知れず、不便とばかり申し果てける、其の頃は正保元年二月九日の事なるに、大和の國秋志野の里に、田島の用水のために百姓集まりて、古き寺地の跡をきりならして池を掘りけるに、世間より深く土をあぐれども水筋にあたらぬ事を悔み、鋤鍬の暇無く三日三夜穿るはどに、水の蓋と聞こえて車何白輛か引く音して、片隅に穴明きてそれより青波立ち昇り、俄に阿波の鳴戸の渦のまく事二時餘、池より水餘りて國中大雨

の思ひをなし轟く事限り無し、明けの口水静かになつて見れば、十八九なる者身を投げしが岸の茨に寄り添ひしを、哀れと引き上げ見るに此の里々の女とも見えす、殊更十日も以前に身を捨てしありさ
 ぞ最不思議と申す折節、二月堂の行ひに参詣せし旅人暫時目をとめて、世には宵たる面影もあるもの
 かな遠き國里を隔てしに越後屋の下女に其のまゝなるわと、前に廻りて檢めけるに、木綿着物に鹿の子の散らし紋、帯は常々見つけし横縞の黄色にして胸に守袋、これを開けて見るに善光寺如來の御影、檀得の淨土珠數、書き残せしものをわらまし讀むに、疑ひ無く若狭の事なり、これを思ふに奈良の都へ若狭より水の通ひありと傳へしが、古より今の世まで例も無きごと、身躰は其の里に埋みてさ
 ましく吊ひ、各々右の品々を持ちて國許に歸りしに、何れも横手を拍つて此の物語に哀れ増して、庄吉萬事棄て其の身を墨染になして、秋志野の里に行きて、塚の印に笹陰に昔の事ごと申し盡くし、おのづからの草枕まだ夢も結ばぬうちに、火燃えし車に女二人取り乗りて飛び來るを見るに、正しく傳助が女房なり、これをおさへて焼金あつるは、我が馴れし久が姿の變る事なし、今ぞおもひを晴らしけるぞといふ聲ばかりして消えぬ、三月十一日の事なるに日も時も違はず、若狭にて一聲叫びて空しくなりけるとなり、

諸國はなし卷之二終

諸國はなし

卷之三

十一 残る物とて金の鍋

□大和の國生駒にありし事

▲此段 仙人

十二 夢路の風車

□飛彈の國の奥山にありし事

▲此段 隱里

十三 樂の男地藏

□都北野の片町にありし事

▲此段 現遊

十四 神鳴の病中

□信濃の國淺間にありし事

▲此段 慾心

十五 蚤の籠拔

▲此段 武勇

□駿河の國府中にありし事

十六 面影の焼残

▲此段 無常

□京上長者町にありし事

諸國はなし

◎残るものごとて金の鍋

仙人之段

俄に時雨しぐれて生駒いこまの山も見えず、日は暮れに及び、平野ひらのの里へ歸る木綿買もめんかひ、道みちを急ぎ、昔業平むかしなりひらの高安通たかやすどひの、息つぎの水といふ所までやうく走りつきしに、後より八十餘の老人來つて頼むは、近來ちかごろの無心なれども老足の山道やまみち、さりとは難儀なり、暫く負ふてたゞはれといふ、易き事ながら斯かる重荷の折ふしなれば叶はじと申す、いたはりの志あらば重くは懸からじと、鳥の如く飛び乗りて行くに、一里ばかりも過ぎて、松原の蔭かげにて日和ひよりもあがれば、老人ひらりと下りて、草臥くたびれのほども思ひやられたり、せめては酒一つ盛るべし、これへと見え渡りて吸筒すいづつも無く、不思議ながら近う寄れば、吹き出だす呼吸いっさにつれて、美麗うつくしき手樽てづる一つ顯はれける、何ぞ着もど黄金の鍋幾個か出だしける、これさへ合點あてのゆかぬに、とても馳走ちそうに酒の相手をと吹けば、十四五の美女琵琶びわ出だしてこれを掻き鳴らし後にはつけざしさまじく、我を覺えず酔出よひでければ、冷し物とて時ならぬ瓜うりを出だしぬ、此の自由極樂の心地して樂みけるに、彼の老人女の膝枕ひざまくらをして躰出いづきでし時、女小聲おんなこゑになつて申すは、自分これなる御方みかたの手懸者てかけものなるが、明暮あけくれ附つきき纏まとひて氣盡きじん休やすむ事なし、御目みめのあかぬうちの樂みに、隨夫まがらふにあふくと御許みよこしてたゞはれと申す、言葉の下よりこれも呼吸吹けば、十五六なる若衆わかしゅを出たし、最前さいぜん申せし

は此方と手を引合そのあたりをつれ歌唄うて歩行さしが、後には久しく行方の知れず、老人目覺めたらばと、寤返の毎々に彼の女を待ち兼ねつるに、何時となく立ち歸り、若衆や女呑み込みければ、老人目覺まして此の女を呑み込み、はじめ出せし道具を片端から呑みしまひ、黄金の小鍋を一つ残して、これを商人に取らし、両方ともにどれになつて、色々の物語盡きて既に日も那古の海に入れば、相生の松風謠ひ立れに、老人は住吉の方へ飛び去りぬ、商人は暫時枕して夢見しに、花が散れば餅を搗き、蚊帳を畳めば月が出で、門松もあれば大踊あり、盃も正月も一度に、晝とも夜とも知れず、すこしの間に好い慰みをして、残るものとて鍋一個、里に歸りて此の事を語れば、生馬仙人といふもの、毎日住吉より生駒に通ふと申し傳へし、それなるべし、

◎夢路の風車

隠里之段

世にはめいよなる事あり、飛驒の國の奥山に昔より隠里のありしを、所の人も知らず、或る時山人の道も無き草木を分け入るを、奉行見附けて後を慕ひ行くに、鳥も通はぬ峰を越し、谷あひ三里ほども過ぎて、恐ろしき岩穴あり、彼の山人これに入りける、覗けば唯暗うして下には清水の流れ蒼し、目馴れし金魚多し、我これまで来て此の中見届けずに歸るも、侍の道にはあらずと思ひ定め、四五丁來ると思ひしが、唐門階五色の玉をまきすて、喜見城とは今こそ見れこれなるべし、折節は冬山を分け

のほり、落葉の霜を踏みて來りしに、爰の景色は春なれや、鶯雲雀の囀りて生鳥賊さはら賣る聲自らのどやかに、暫時詠めけるうちに眠り出で、これなる草枕して前後も知らず假寐する、其の夢心に女の商人二人來て、あとや枕に立ち寄り我を頼みて申すは、恥づかしながら斯かる面影を見え申すなり、自分は此の都の傍に絹織を織りて世を渡りしに、何に不足なる事も無かりしに、つれたる人風邪の心地とて假初のわづらひ休む事なく、最後の残念に織りたひし絹二千匹ははり、子も無いもの、事なれば、これを賣りて年月を送りて、未々は出家にもなれとの名残の言葉にまかせ、此處彼處の市に立ちて渡世とす、未だ一年も経たざりしに、我に執心の文を遣はしける、思ひも寄らぬ事なり、其の男は谷鐵と申して此の國に住みし大力なり、其の後文のかへしをせぬ事を恨み、一夜忍び入り二人のものを切り殺し、貯へ置きし絹織を取りて歸り、死骸は野末に埋みける、此の事穿鑿遊ばしけるに知れずして、今に谷鐵を浮世に置くことの口惜や、殊に執心と申せしは、虚言なり、唯絹を取るべき謀計なり、あはれ國王へ申し上げられ、讐を取つてたまはれと、女の首両方より袖に縋りて歎く、それこそ易き事なれども何をかするべに申し上ぐべき便りも無しと申せば、それにこそ證據あれと懇に語る、これより南に方つて廣野あり、常は木も草も無き所なり、我等を掘り埋めし後に、二岐の王柳の生えしなり、是れしるしに頼むとの言葉もつひ絶えて夢は覺めける、不思議と思ひ彼の野に行けば、其の里人集まり今までは見馴れぬ柳と駭く、扱はと此の事國王へ申し上ぐれば、あまたの人を遣

はし披の地を穿ちせ見給ふに、夢に違はず女二人昔姿變らず、首落してありける、あらし奏問仕れば、谷鐵が住家に大勢亂れ入りて搦め取り、おのれが身より出でぬる錆なればと、鐵の櫛さしにして衛に曝らしたまへり、其の後彼の侍には御褒美とて目馴れぬ唐織の縞絹數々賜はりて、汝此の國にては命短かし、急いで故郷に歸れと、紅の風車に乗せられ、浮雲取り巻きて目ふる間に住み馴れし國に販り、ありのまゝに申せば其の所を捜し出せと、數百人山入りして谷峰たづね見れども、今に知れ難し、

◎男地藏

現遊之段

北野の片傍に、合羽のこはせをして其の日を送り、一生夢の如く草庵に獨住む男あり、都なれば萬の慰み事もあるに、此の男は西東をも知らぬほどの娘の子を集め、好けるもの持て遊びものを拵へ、これに打交りて何の罪も無く明暮樂むに、後には新塞の川原と名付けて、五町三町の子ども爰に集まり、父母をも尋ねず遊べば、親ども喜こび佛のやうに申しける、其の後此の男夜に入り月影を忍び、京中に行きて美しき娘を盗みて、二三日も愛してはまた返しぬ、これを不思議の沙汰して、暮れより用心して幼き娘を門に出さず、都の騒動大方ならず、昨日は六條の珠數屋の兒が見えぬとて歎き、今日は新町の椀屋の子を尋ね悲むがし、頃は軒端に菖蒲茸く五月の節句の色めける、室町通の何某の

一人娘、今七才にて其のさ勝れて生れつきしに、乳母腰元がつきて、入目を除ける傘さしかけて行くを見濟まし、横奪にして抱きて逸ぐるを、それそれと聲を立つるに、追懸くる人も早姿を見失ひける、此の男の足の疾き事、京より伊勢へ一日に下向するなれば、後に續くべき事及び難し、其の面影を見し人のいふは、先づ菅笠を着て耳の長き女と見るもあり、否顔の黒き眼の一ツあるものと、とり／＼に姿を見かへぬ、彼の娘の親いろ／＼歎き洛中を捜しけるに、自然と聞き出し彼の子を取り返へし、此の事を言上申せば、召し寄せられて思ふ所を御聞き遊ばしけるに、唯何となく幼き娘を見ては、其のまゝに欲しき心の出で來、今まで何百人か盗みて歸り、五日三日は愛して又親元へ歸し申すのよし、他の仔細も無し、斯かる事のありしに今まで世間に知れぬは、さすが都のおはやうなる事、思ひ知られける、

◎神鳴の病中

欲心之段

慾には一門兄弟の中も見棄つる事世に習俗がかし、信濃の國淺間の麓に、松田藤五郎と申して、所久しき里人のありしが、今年八十八歳にして浮世に何をか思ひ残す事も無く、末期の近づく時、藤六藤七二人の子を枕に、我相果て、の後摺練の灰までも二つに分けて取るべし、扱又此の刀はめいよの命を助かり、此の年まで世に住む事の目出度く、此の家の寶物となれば、譬へ牛は賣るともこれを放つ

事なかれど、懇ろに申し置かれて、つひに佛の國へ參られけるに、未だ七日も経つや經たすに早跡式を争ひ、諸道具兩方へ分け取る、件くだんの刀をば兄も弟も心懸けて論ずる事の見苦しさに、親類立ち會ひ兎角惣領なれば、此の一腰は藤六に渡せと、いろ／＼に申せど弟は更に合點をせず、兄は是非に取らねば肯かず、何れもあつかひに日を暮らしぬ、藤六申すは、二つに分けたる家を皆藤七に取らすべしと申せば、やう／＼あつかひ濟みて、藤六は刀ばかり取つて家を出で、向後百姓を廢めると、それより遙々の都に上り、目利へ行きてこれを見するに、奈良ものにして然も燒刃もかつてなれば、重ねて人手にも取らねば、また故郷に歸り母親の方に行きて、刀の様子を尋ねけるに、老母語りけるは、其の昔國中百日の早ひやくひ、ふか田も干涸となつて、村々の水論のあしし時、隣里の男を親仁斬り付けられしに、しぶり皮も剥けず危き命を助からりしなり、其の時此の刀の斬れぬを喜び、命の親とて一代家の寶物とは申されける、はじめより無銘の何の役にも立たざるものとは隠れも無きに、其方が萬に換へても欲しがる事の不思議なり、然も水論は正保年中六月はじめつ方の事なるに、所村の大勢千貫桶に群らがり、庄屋年寄一名を捨て、争闘して、今や危き折節日の照る最中に、一つの太鼓鳴り黒雲舞下つて、赤禪襠を掻きたる火神鳴の來て里人に申すは、先づ静まつて聞きたまへ、久しく雨を降らすすして斯く里々の難儀は、我々夥間の業なり、このほどは水神鳴ども若氣にて、夜這星に戯れ、可惜水を滅らして思ひながらの早なり、各々手作の牛蒡を送られたらば、追附け雨を請合ふと申す、それこ

そ易き事なれと、あまた遣はしけるに、龍の駒に一駄附けて天上して、其の翌けの日より早曉を見せて、ばらり／＼と麻病しんぼうげなる雨を降らしけるとぞ、

◎蚤の籠ぬけ

武勇之段

富士嵐の騒がしく、府中の町も用心時の年の暮れになりぬ、世を渡る萬の事も不足なく、武道具も昔を棄てず、歴々の浪人津河隼人と申せしが、如何なる思ひ入りにや下人無しに、唯一人少しの板廂いたばしを借りて住みけるに、十二月十八日の夜半に、盗人大勢忍び入りしに、夢覺め枕刀まくらばちを抜き合はせ、四五人も斬り立て追つ散らし、何にても物は取られず沙汰無しにして、近所も起こさず濟ましぬ、其の夜また同一町はづれの紺屋に夜盗入りて、家を荒らし染絹かけ碗を取りて行くに、亭主鎗の鞘はづして出で合ひけるに、七八人も取り巻く主人を斬りこかし、思ふまゝ諸遠具まで取つて行く、夜明けての御詮議ごせんぎに下々の申すは、皆鬚男の大小をさしてまゐつたといふ、斯かる折ふし彼の浪人の門に、血の流れたる世間より申し立て、様々の申し譯其の證據も無ければ、是非なく牢舎らうしゃしてありける、昔は如何なるものぞと、御尋ねあるに、此の身になつて名は無しと打ち笑つて申す、何ともむつかしき詮議にて年月を重ね七年過ぎて、駿河の牢舎残らず京都の牢に引かるゝ事あり、又此の中に交り都の憂き住居武運の盡なり、あまた人はあれども其の身に科かを覺えて、今更公儀を恨みず命を惜まず、ある

雨中に鏡の窓より幽かなる光明を受け、鮑の貝にて髻を抜くもあり、塵紙にて佛を造るもあり、色々藝盡くし一人も鈍なるものは無し、其の中に髪白く巻き上り、宛然仙人の如くなるが薄緑の糸にて細工に虫籠を拵へ、此の中に十三年になる虱、九年の蚤なるこれを受して、食物には我が肥肉股を喰はしけるほどに、勝れて大きになり、優しくも懐きて、其の者の聲に虱は獅々踊をする、蚤は籠振する、悲しき中にも可笑さ増さりぬ、後は石川五右衛門より傳授の晝盗みの大事、または高名咄になつて、ちよろりの新吉といふ男に、片耳の無い仔細を聞く人に語るは、我けはしき事に出合ひしは四十三度一度も手を負はざりしが、或時に駿河にて浪人方へ押し込みしに、手ばしかく切り立て、皆々命をやう／＼拾ふ、一代にこれほどすかぬめに逢つる事は無し、それにも懲りず其の夜染物屋へ入りて、主人を切り殺してとありのまゝに語るを聞きて、我こそ其の浪人の隼人と申す者ぞ、其の方どもの仕業我が難儀となるなり、斯かる身となりてさら／＼命を惜むにはあらず、侍の悪名取つて相果つるの事口惜し、何とぞ此の難晴る、やうにと申しければ、盗人聞き分け我々はそれのみならず、此の度は女を殺しての科彼是のがる、事なし、御身の事御訴訟申さむと、牢番を頼み兩人あらしを申し上げれば、久しく濟まざる事の埒明き、牢人を召され、永々の難儀の段思召し、何にても願ひを協へ下さるべき仰なり、牢人有難く存じ、然らば此の二人の命を申し請けたし、最前は彼等ゆゑの難に逢ひ候へども、此の度の申譯にて、武士の名を埋まぬ事の嬉しさ、かさね／＼言上申し助けゝるとなり、

◎面影の焼殘

無常之段

東山の花に暮らし、廣澤の月に明かし、浮世の悲き事を知らず、上長者町に酒造り込み、春夏の隙なるたのし屋あり、久しく子を願ひしに、娘一人設けて乳母を取りて育てしに、今十四歳になりしが、いづれを難いふべき事も無き美女なれば、諸人思入も深かるべし、母の親の才覺にて晩からぬ事を取急ぎ、縁附きの手道具までも残る處も無く拵へ、彼方此方の言入れも合點せず、都の花をと智見競へし折節、風邪の心地と惱みけるに、京中の薬師に懸けて種々看病すれども効なく、借や眠るが如く世を去りける、二親の愁歎限りも無し、其の日も暮れて潜に野邊の送りをして、千本のみつ鐘に無常覺めて煙を懸くる時、下々の女までも同一火に飛び入るばかりの思ひをなして歸るに、春の闇さへ辛きに、雨の降り出で殊に哀れを残す、其の夜の明方七つの時取をして灰寄せに行くに、乳參らせたる乳母が夫、我が宿より直に人よりも早く墓原に行くに、道すがら人を見えず、三月二十七日の空宵の氣色よりなほ物凄く、焼場に行けば何とも見分け難き形足許へ踏みあて、これはと驚き燃えさしを上げて見れば、死人は疑ひ無く、如何なる亡者ぞと念佛申し、さて娘御の火葬を見るに、早桶薪木の外へ轉げて出でけるに氣を附け、彼の死人を見れば髪頭は焼けても風情は變らず、未だ幽かにいきづかひのあれば、木の葉の雫を口に灌ぎ、我が單衣を脱ぎて着せ參らせ、後へ餘所の白骨を入れ置きて、そ

れより負ひ奉り土手町の貸屋敷に行きて、年來目を懸けし者を叩き起こし、忍びて養生をする病人と申し、一室なる所へ閉ぢ込み夜明けて見るに惣身黒木の如し、再び人間にはなり難きありさまなれども、脈に頼みあれば不斷の醫者を呼びに遣はしはじめを語りてしのびくくに薬を盛れば、次第に眼を開き足手を動かし、自然に見苦しき事もやみぬ、半年も過ぎて様子を聞けども嘗てものを謂はねば、現の人に逢へる如し、是れは醫師も合點ゆかず、占はしても見たまへと、安部の何某をよびて八卦を見るに、此の人何ほど薬を盡くしたまふともさく事更にあるまじ、仔細は親類中に浮世に亡き人の吊事をしたまふゆゑすと、見通すほどに申しける、今は秘して協はじと、長者町に行きて二親に段々此の事を語れば、夢の覺めたる心地して、譬へ姿はともあれ命さへ世にあらば嬉さは是れすと、俄に佛壇の位牌を碎き佛事を廢めて、精進を魚類に引き換へて、祝言にいさめをなせば、忽ち其の日よりもを言ひ出し、此の程の耻を悲み親達の愁歎を思ひ遣り、萬の志常に違ふ事無し、我無事末々は出家になしてと一筋に思ひ定め、其の後は親には一門にも逢はず、斯くて三年も過ぎて昔に變らず美女となりて、常々願ひの通り十七の十月より身を墨染の衣になし、嵐山の近なる里に一庵を結び、後の世を願ひける、また例も無き蘇生がかし、

諸國はなし卷之三終

諸國はなし

卷之四

十七 お霜月の作髭

▲此段 馬鹿

□大坂玉造にありし事

十八 行末の寶船

▲此段 無分別

□諏訪の湖にありし事

十九 八疊敷の蓮の葉

▲此段 名僧

□吉野の奥山にありし事

二十 因果の抜穴

▲此段 敵打

□但馬の國片里にありし事

廿一 形は晝の眞似

▲此段 執心

口大坂の芝居にありし事

廿二 忍び扇の長唄

▲此段 戀

口江戸土器町にありし事

諸國はなし

◎お霜月の作罷

馬鹿之段

大上戸の同行四人、いつとても諸白二子切に呑み干しける、此の御寄坊主はじめの程は雫も嫌はれしが、人々に薦められて諸々の小盃を振り捨て、阿波の大鳴門小鳴門と名附けて渦まく酒を喜ぶ、何れも子どもに世を渡し、年齢に不足も無ければ、何か思ひ残する事も無し、娯樂は飲死と定め、折節十月二十八日、今宵御取越とて殊勝に御文を頂き、有難き御談合に涙を流し、後は例の大酒になつて、前後を知らず小唄交りに慰みける、其の次ぎの室に近所の若い者ども、親仁達の噪ぎ可笑がり、これを聞寐入にして居る中に、夜更けてから沙汰無しに聲入をする男ありしが、嬉し顔に内にも入られず、爰に其の時分を待ち合はすを、彼の法師の見附けて、此の男めは今晚聲入をするを、豫て聞いたり、先きの娘の美麗さ、昔の淨瑠璃御前も及ぶまじ、憎や彼奴めが御會子様に月代を仕済まして、よばぬ前から女房自慢なる顔色に、然らば祝ふて釣罷と、墨磨り筆に染めて、物の見事に作りければ、年寄ども其の筆を奪ひ合ひて、我もくと造るほどに、顔一つ手習ひの如く書き汚しける、其の後けわしく宿に歸り、袴着るまでも人の氣も附かず、其の姿にて聲入せしに、先きにて與を覺えし、差添を提げて驅出すを、勇留めて申すは、此の上は各々堪忍遊ばしても我等肯かず、最早百年目と死扮裝にな

りて行くを、兩町聞き付け、さまぐにあつかへども、肯かざれば、四人に作り髭をさせ、頭に引裂紙を付け、上下を着し日中の説言、よい年齢をして孫のあるものども面目無けれど、死なれぬ命なれば是非も無き事なり、可笑きは御坊の上髪をかき、

◎行末の寶船

無分別之段

人間はどもの、危き事をかまはぬもの無し、信濃の國諏訪の湖に、毎年氷の橋懸かつて狐の渡り初めて、其の後は人馬ともに自由に通行をする事かきし、春また狐の渡り歸ると其のまゝ、氷解けて往來を止めけるに、此の里のあばれもの根引の勘内といふ馬士、廻れば遠しと人の留むるにもかまはず、我が心一つに渡りけるに、真中過ぎはどになりて、俄に風暖かに吹きて、前後より氷消えて浪の下に沈みける、此の事かくれも無く哀れと申し果てぬ、同一年の七月七日の暮れに、星を祭るとて梶の葉に歌を書きて湖に流し遊ぶ時、沖の方より光り輝く船に、見馴れぬ人あまた取り乗りける、其の中に勘内高き玉座に居て、其の由々しさ昔に引き替へ、皆々見違へける、船より心静かにあがり、前に役はれし親方の許に行けば、何れも驚き様子聞くに、某唯今は龍の中都に流れ行きて、大王の買物使者になりて金銀我隨に仕ると、金銀二貫くれける、さてこゝもとより米もやすし、鳥肴は手捕へにする、女房は撰取、旅芝居の若衆も来る、時花唄を唄ひあかして、寒いとも空腹いとも知らず、正月

も盆もこゝと少しも違ふた事無し、十四日から灯笼も出して、こゝと變つた事は借錢乞ひといふものを知らぬと申す、此の七月は我がはじめての盆なれば、ひとしは馳走のために、國中の色よき娘、十四より二十五まで、未だ男を持たぬをすぐりて、大踊のこしらへ、それはくゝまたあるまじき事なり、其の用意の買物に参つたと申す、召し運れし者ども、何とやら磯貝く頭魚の尾なるもあり、螺のやうなるもあり、萬の買物を持たせ出で行く時、彼の國のいたづらを皆々見せましたい事じやといふ、それはなる事かと謂へば、其の隨意なり、十日ばかりの隙入にして御越あれ、白銀錢を船にいつばい積みて参らせむと申せば、我は常々の好誼、人よりは懇ろしたと行く事を争ひける、親方をはじめ其の中に七人伴ひける、取り残されし人これを歎きしに、耳にも聞き入れず、件の玉船に乗りさまに一人分別して、命に代へるほどの用のありとて行かず、さらばくゝ頓てといふ間も無く舟は浪間に沈み、それより十年餘も過ぎ行けど音信も無く、踊を見にと唄にばかり唄ふて果てぬ、此の六人の後家の歎き、又一人行かぬ人も今に命の長く、目安書きして世を渡りけるとなり、

◎八疊敷の蓮の葉

名僧之段

五月雨の降り續き、吉野川も渡り絶えて、常さへ山家はものゝ淋しやと、昔西行の住みたまひし、若清水の跡を掬ひ、殊勝なる道心者のましますが、所の人此所に集まりて、煎じ茶に目を暮らしぬるに、

雨類に俄に山も見えぬ折ふし、板縁の片隅に古茶碓のありしが、其のしん木の穴より長七寸ばかりの細蛇の一筋出て、間も無く花柚の枝に飛び返りて上ると見えしが、雲に隠れて行方知らず、麓の里より人大勢驅付けて、唯今此の庭から十丈餘りの龍が天上したと申す、此の聲に驚き外に出て見るに、門前に大木の榎のありしが、一の枝引き裂け、其の下にはれて池の如くなりぬ、さてもく大なる事やと、人々の驚ぐを法師打ち笑つて、各々世界を見ぬゆゑなり、我筑前にありし時、大蕪菜あり、又雲州の松江川に横巾一尺二寸宛の餅あり、近江の長柄山より九間ある山の芋掘り出せし事もあり、松前に一里半續きたる昆布あり、對山の島山に髭一丈伸ばしたる老人あり、遠國を見ねば合點のゆかぬものぞかし、昔嵯峨のさくげん和尚の入唐遊ばして後、信長公の御前にての物語に、靈鷲山の御池の蓮葉は、凡そ一枚が二間四方ほど開きて、此の薰る風心地好く、此の葉の上に晝寐して納涼む人ありと語りたまへば信長笑はせたまへば、和尚お次ぎの室に立ちたまひ、涙を流し衣の袖を絞りたまふを見て、唯今殿の御笑ひ遊ばしけるを口惜く思し召されけるかと尋ね給へば、和尚のたまひしは、信長公天下を御知り遊ばすほどの御心入には、小さな事のおもはれ、涙を溢すとのたまひけるとす、

◎因果の抜穴

敵討之段

鍵持乗馬を引き連れて、家中また無き使者男、大河判右衛門が風俗世に見習へと謂はれしに、武士の身ほど定め難きものは無し、昨日故郷豊後の國より文遣はしけるを、女筆心許なく明けて見るに、兄嫁が書き越しける、判兵衛殿事此の十七の夜、妙福寺の恭會に些少の助言よりいひあがりて、寺田彌平次打つて早土地を立ち退き申し候、子も無き人の御事なれば、各々様ならで誰か他にはたよりも無し、女の身の是非も無き仕合せと哀れに申し遣はしける、思案に及ばず俄に御暇申し請け、一子の判八ばかり連れて武州を立ち出づる、此の彌平次は殿より御取寄ものなれば、深く秘してなか／＼手にはまはるまじ、常々傳へ聞きしは、但馬の國に里人に親類ありとや、定めてこれへ退くべし、我々も此所へ行きて心懸くべしと、急ぎ但馬に下りてしのび／＼に尋ねけるに、案の如く百姓の門造に二重垣をして、半人あまたかくまひ、用心の犬まで何疋か、夜は油断なく柏子木を鳴らし、間もなう眼を覺ましける、一夜雨風烈しく然も聞なれば、焚飯拵へ先づ犬どもに近寄り、横手の塀を切り抜き、又内なる壁に道つけて廣庭に忍び入りしが、彌平次聞き附け何者かといふ、親子ともに板の切を啣へ、魚の骨の如くにもてなし、犬の真似いたせしに、これを聞きて犬には天窓が高い、皆起き合へと呼はるはどに、豫ての壯者どもおきめ渡れど、未だ配慮をして彌平次は出でず、けわしくなれば先づ此の度は退けと、出でさまに鍋釜を提げて戶外に捨て置き、はじめの抜道に出づるに老人の不自由さは、潜る時隙いる處を後より大勢兩足に取り着き、少しも身の動きならず、判八立ち歸りて親の首を切り、

其の首提げて遁げ延びけるに、あとにて詮議さましく、鍋釜の様子を見て盗人にも疑ひなしと、其の通りに済ましける、其の後判入は我が手に掛けし親の首を持ちて、入佐山の奥深く秋萩の下葉を分けて、世に斯かる憂目もある事かな、敵は打たず如何なる因果ぞかし、江戸にまします母の聞きたまは、我をふがひなく御歎きも深かるべし、然れども一念掛けし彌平次を打たでは置くまじ、御心安かれと御自由に物を語りて、さて木の根を覆へし埋所の穴を掘りしに、下より白骨骨一つ出でける、是れも如何なる人の昔ぞと、識らぬ哀れ並べて埋め、露草を折りて水を手向け、其の日もまだ暮れに遠ければ、人の目を忍び夜に入り里に歸らむ、塚を枕に暫時まどろむうちに、彼の白鬚告げて語るは、我は判右衛門があさましき形なり、我がためとて敵を打ち来て、汝が手に掛かる事はこれ定まる道理あり、前世にて彌平次が一門、理由なき事に入人まで失ひければ、天此の科を許したまはぬを、今此の身になりて覺ゆる、此の方とてもこれを免れ難し、武勇の本意を廢めて墨染の身となりて、先づ立ちし二人が後を能くく吊ふべし、此の言葉の證據には我が形あるまじ、再び掘つて見るべしと告げて失せける、彼の塚を掘るに、はじめの白鬚無き事不思議ながら、よもや討たで置くべきかと、心を盡せし効無く、判入もまた返り討ちにあひぬ、

◎形は晝の眞似

執心之段

淨瑠璃の太夫に井上播磨とて、種々の節を語り出して諸人に口眞似させける、一時の正月芝居に、一の谷の逆落の合戦を五段に作り、人形も一つく細工人心を盡くして拵へ、役者も銘々の魂入りて、源平西東に立ち別れ大合戦の所をつかひけるほどに、大坂中うつしてこれ見物事とて久しく時花りける、其の頃は二月の末の事なるに、明暮春雨の降り續き、萬の落芝居まで休みて物の寥しき夜半に、千日寺の鉦の聲、蛙の鳴くより外は聞く事も無く、樂屋番の小兵左右衛門木枕をならべ、灯火幽かにして談話寝入に前後も知らぬ時、人の足音に眼覺まし、二人ともに夜着の下より天窓を上げて見るに、つかひ捨てたる人形ども、ものこそいはね其のまゝ人間の如く、立ち合ひ暫時叩き合ひ喰ひ附き血煙立つて恐ろし、其の後に西の方より越中の二郎兵衛と名附けし木偶人泰に出でければ東の方からも佐藤次信出で、これは半時ばかりも切り結びしが疲れて合引にして次信は腰をうつて休む、二郎兵衛は徐々庭に下りて、天目干杓を取つて呼吸つぎの水飲むありさま、舌の音して人に少しも變る事無し、其の後は敦盛の若衆人形に取り付き、または女郎人形に似たれ、いろ／＼の事ども宵の恐怖さやみて可笑くなりぬ、通夜次郎兵衛の人形驅廻りけるが、拂曉に鳴りを止めける、樂屋番の二人驚き太夫元にてこれを語る、皆々横手拍つ中に、四藏といふ故き道化のありしが、少しも騒がず、昔より同じ人形ども喰ひ合ふ事は例多し、如何にしても水を呑みし事不思議なりと、翌の日本戸番札賣とも大勢かけてかつて見るに、年経し狸ども床の下より飛び出で、今宮の松原に失せにける、恐ろしさども

なか〜

◎忍び扇の長歌

戀之段

館住居氣詰りも上野の花に忘れて、諸人の心たま浮き立つ春のありさま、衣裳幕の内には小唄交りの女中姿、はんの櫻よりは詠めずかし、日も暮れに近き折節、大名の奥様めきて、先きに長刀二つ挟箱持たせて、高蒔繪の乗物續きて、後より二十歳餘の面影、窓の簾の隙より見えけるに、其の美麗さや和國美人揃の中にも見えす、うか〜と附いて廻りける、此の男やう〜中小姓ぐらゐの風俗、女の好かぬ男なり、想ふに及ばぬ御方を戀初め後より行く仲間尋ねしにさる大名の姪御様とあらまし、様子を語り棄て行く、さてはと其の所を知りて、奥方への御奉公を移さしに、よきつてありて相済み、二歳ばかり勤めしうち、彼方此方への御供申せし折ふし、思ひ入りし御乗物に目を着けたるに、縁は不思議なり、彼方にもいつともなう思召し入れられ、末々の女に仰せ付けられ、長屋の窓より黒骨の扇を投げ入れける、若い者仲間より見附けて彼の半女と心のあるやうに申すを沙汰無しに酒など買うて口を塞ぎぬ、其の夜御扇披き見るに、筆のあゆみただ人の文柄にもあらず、思召す事とも長歌に遊ばしける、よく〜讀みて見るに、我を思は、今宵のうちに連れて立ち退くべし、男に狀變へて切戸を忍び命を限りとの御事、此の忝なさ身を碎きてもと思ひ定め、其の時を待つに御知らせ違はず、小

者姿にして御出で遊ばしけるを、御門を紛れ出で早其の夜に、土器町といふ處に好誼のものなり、これに忍び少しの裏店を借りて人知れず住みけるに、何の心も無く出で給へば、世を渡るべき種も無ければ、御守護脇差を質に置きて、月日を送らるゝうちにまた悲しく、男は夜々切疵の膏藥を賣れども抄取らず、後には詮方盡きぬれば、手馴れたまはぬ濯ぎ洗濯見る眼もいたはしく、近所も不思議を立てける、屋敷よりは毎日五十人宛御行衛を尋ねに、半年餘り過ぎて搜し出し、大勢とりかけ彼の男は繩を懸けて、其の夜に成敗にあひける其の後姫は一室なる方に押し籠め、自害遊ばすやうに仕懸置きても、なかなか其の志も無く、時節移れば、如何に女なればとて後れたり、最期を急がせて大殿より仰せければ、姫の御方に参りて、世のさだまり事とおいたはしくは候へども、不義遊ばし候へば、御最期と申し上げれば、我が命惜むにはあらねども、身の上に不義は無し、人間と生を請けて、女の男單一人持つ事作法なり、彼の者下々を思ふはこれ縁の道なり、各々世の不義といふ事を知らずや、夫ある女の外に男を思ひ、または死に別れて後、夫を求むるこそ不義とは申すべし、男無き女の一生に一人の男を不義とは申されまじ、又下々を取り上げ縁を組みし事は昔より例あり、我少しも不義にはあらず其の男は殺すまじきものと、涙を流したまひ、此の男のあるとふ爲めなりと、白から髪をおろしたまふとなり、

諸國はなし卷之四終

艶
隠
者

近代艶隠者序

宵は時雨して。軒ちかき板屋に。冬をはじめてしらす。枯野につれて。人の心も次第に。山眠がごとし。折ふし時鳥の。九聲して。夏かとおもふ程に飛鳴を。是が詩歌の種にして。前代聞も及さる事^{ことごと}。不思議のしばらくやます。世の中をおもふに。何かめづらしからず。鳥に口ばしありはねあり。鳴も飛も心にまかすべし。人ながら人程替りたるものはなしと。無常を隣に。夢を我宿に語る時。笹の納戸を。せはしく音信^{おとづる}に^{おちやがせ}。皆枕をそば立。松の嵐すはと明出れば。旅姿の法師。笠もとりあへず。命かあれば二たびと涙衣^{なみだ}に包む舊來聲^{ふるまこ}は聞馴て。替る形に驚ず。いつならん難波を別れ。諸國に心の行。日敷を今おもへは。五年の其神無月にありぬ。風をいとほす雨にとまらず。執行かさねしうちに。面子^{おもて}ひかしのなきを燈にうつす。我も古里ははなれずして面に寄る皺^{しわ}を悔み。今にもしれぬ身の程を。今ゆふもおかしく邂逅^{あきど}に逢ぬれば。語るにつきず。聞に世間の廣ひ事かかし。此年月残らす見めぐり給ふ。何國いかなる所の風俗。都にも見ぬ事もやと尋ねけるに。花は櫻をさして詠^なめ。月は秋の最中^{もなか}に見るなれば。世の百様に替る事もなし。思ひの外なるは。世を深く忍び。遠くのがれて。隠徳の有人。風流男女にかきらす。名を埋みて住しを。其國其里々に。境界殊勝におもはれ。あらしに書うつして。土産^{みやげ}に迎包籠^{むかひかご}たる物を明れば。名所紙のゐるにまかせて。かさね捨られる。おろかなる我。たのしみ

の種にもなりぬべしと。筆の行方に心を留す。物かたるうちに。ひとりく名のなき人を尋ねしに。皆世に傳へし人也。其身の取置きに氣を付て見しに。いはでそれとは隠れなし。屈中に有て見し見しと書しは。死去し人也。行脚あんぎやに寄て書くは世にある人とは是を語る。に鷄鳴とみやうてつねの曙前に。また見ぬかたも有と。旅の事ども取いそぎ。又行す術をしらず。西驚軒橋泉是を書残しぬ

難波俳林

西

鶴

近代艶隠者目録

卷之一

一 樂の岩穴

無我の旅僧 心の通ひ舟

二 勇武の血隠

花葉の翁 朝覺の翁

三 市中の風流男

淺草の風人 芝の花作り

四 形見の獸

白川の葛男 住吉の異人

五 淺黃の襟思ふ

菟の遊女 市谷の牽人

卷之二

一世は捨賣の棚

岡崎の市隠

真葛原の艶男

二 百日の瀧參詣

五條の笙吹

清水の乞食

三 俄百姓の樂

谷中の三重切男

小石川の楊枝賣

四 泪の花桶

汐汲婦人

人形おとこ

五 夢又夢の宿

吹捨の尺八

七弘の浪人

卷之三

一株も花の木の末

都つれ夫婦

二 袖に留木の昔

嵯峨風流男

三 紅葉は心の廣庭

四つ竹の隠者

四 便は現の文

芋うみの尼

五 和朝の風俗

難波の歌翁

卷之四

一朝の山夕の海

隱家の老人

二 身は酒にひたし

一日暮しの鍛男

三 作り世の中

富士郡の賢漢

四 生死の海魚

目籠の翁

五 物の哀は萩垣

畢栗の道心

卷之五

一 千年の花鳥

菊の翁

二 一夜物かたり

網すきの浦人

三 時取の切火繩

渡し船の老人

四 心中の草枕

柄の兄弟

五 名は埋れぬ石塔

備前の水汲

近代艶隠者目錄終

近代艶隠者卷之一

一 無我の旅僧 心の通ひ

何の風もなく、ある日虚舟に棹さして、東の濱に航して、靈山を見る、その高さ無數丈、ひとつの窟にいたる、暫ありて楫を解て、岩間に維捨て、其中に入、窟誠に清けにして、出入嵐す、しく、扉に瓊の石をたへ、聲尋常に玲瓏たり、なほ奥にのそめは、日月のひかり清明に、芳世かはり、菓露色付、見るも住よげに、かへらん心をわすれて、因循として立しに、獨の御神に逢奉る、其形蒼海の海月のことし、須臾にして、うるはしき小童と化して、頭に珠の冠をいたし、左の手に御貌を杖に突、右の手にはいまだひらかさる白蓮を持たせたもふこと、ある巖に片足をうち掛け、御うしろより光を放たせたもふに、神跡皆金色にして、御胸に觀の字すはれり、見奉るも難有て、信を疑し、和南して退けは、神聖我れむかひて、爾ころあらは、爰にとまり、其樂をなせと、のたもふ御聲も彌尊く、是唯一心の、王舎城と觀じて、草庵を引ひすびつ、爰にしばらく留まるに、明暮何ころもなく、月は曇らす花はちらす、雪は替らすして、身をひたす汗といふ夏をわすれぬ、

二 花葉の翁、土器の翁、朝覺の翁、二王の翁

漸夕陽影しづんでは、扇なくしてもかなと思ふころ、雨一通りして薄吹風、茅嫋ます露、萬の蒼涼々折から、獨の老人跡より、美童を伴ひ、彷徨として來り、其躰仰見るに、布の單なる物を頭にかぶり、右の手に藜の杖を突き、ひたりの手に杜氏の詩を持ちたり、後なる童は、世に窈窕に粧ひて、緋に塗籠せし太刀打かつぎ、片手に助老をさげて、老人をたすけあゆむ、いかなる人やらんと見るに、洛陽白川の、東北に住ける人也、石上纒に因もありければ、座を去て招き奉りしに、翁も席につきて、世にあらばなど語る程にこそあれ、我今爰に來りし事餘の義にあらず、足下には清靈未明の地に來り、神聖にま見へ奉り、一生のおもひでをなすときくに、心ひかれ床しさまさりて、我生涯の有様をも語らん爲に、推して來たりしなど、世にむつまじけ也、我もそのかたどなくむかしを哀におもひ出、しのびの顔なるを翁察し見しにか、人はいかにもあれ和國の八十氏の武たるわさはど、世わたる品も勇々しきはなし、殊に文にも武にもうとからぬ、人の春雨五月雨のそぼり時鳥の一聲をまつも、他の哀をまつはどなるに、我に益なき友ひとり、ふたり、しめやかに世の變易身の述懐などさゝやき、あなふの奥を尋ん事を願ふも興ありし、あるひは一治一亂のはかなき跡をかかへ、世傳へし程の名將を感じ、かたみにこしの譽を云慰も勇し、また我樂をいはゞ常に勇力を觀じていさぎよき心を種とし、物來つて是を妨ぐれば詩におもひをのべて汚を吐、感慨を催し、吟じおほせて感あれば、我にひとしき人かなど、待間のたのしみなを慰まじ、一生妻といふ物なければ、かれに着する事もなく、子孫

なければ後名を煩ふ事なし、今また隱家の寂寥なれば身をたのしむに足りなると語るに、言いさぎを咨嗟し、泪袂を霑し、時しも秋風をうら見さくに、又年の半もたけすぐらんと思ふ程に見へて、北國言葉にきこへし人の、手の手に艶書をたづさへ、女の童に三筋の糸掛たる曲器をもたせ、いとたのしげに歩行く爲に、いまだいつれの人といふ言をしらす、翁も座をくだり我も席を遠く退きて、其人を進しに、此人女童に持せたる糸器をとりてしばらく調べしを見るに、切金にして朝覺といふ銘をうけり、その聲實に妙に、風景佳興をもよほし、耳にきくさへ、氣たへ目に他言をおもふ程也、すこしありて彼曲器を擲て、翁にむかひて言しは、足下にはいまだ謂かはす事もなければ、今爰に來るを不審おもひてかたるがかし、遠く傳へきくに此所は天地の靈精神の集る所也、然るに穢はしき身にして、爰にあそぶ事ゆへなし、足下のけがれをいはゞ、往昔公の命にしたがひ、上方表の戦争にまかんでしに、かくれもなき功をなすといへども、己のが名譽を立んと思ひ、公の忠をおもはず、屯の法を破る兵家は、勇武を元とはすれど、是をよしとは云かだし、公慈悲心のあまり、しばらく答を在宥たまひ、二度つかへん事を免し給へば、功成名遂の文にふけり、恩をわすれて身をかくし、蟬の小川の和歌を吟じて、都の内へも出ず、此心また世の人をうとんで、已れをたつる答あり、夫文をまなび詩を唄ひ、和國の歌を尊むも、無我にもとつのはじめたり、又天地は陰陽にはじまれり、人はそのめぐみによる、然るに妻と云ふ名もなく、その身につたはりて末を絶もゆへなし、又愛を斷捨て其もとに復かど

おもふに、邪よこしまに小童を寵し變を見てはおどろき、斷袖だんじゆうの思ひをのべて、着心追悼ちゃくしんしゆいどうの詩を作し、春風泪を乾兼せきかね、是よりして其罪少からず、來り進め我境をかたらん、尋常無我じゆんじやうむがを此朝覺に觀し、そこしなへに天地を友とす、萬に心をこめば樂みとならぬはあるまじけれ、ど分て男女の中のみそがことは、生を樂しむの常たり、分そむる葉する露より、おもひのそらにみちぬるかなしさ、いはでしのぶ心の中など思ひあまるもいとおかし、中ちゆうくうとからまじかはと、逢て絶にしも悔まじく、枕ゆふなる宿なれど、契は同じ名殘の惜まれ、須摩の上野の烟をかこつもおかし、夜闌よたけなはにして琴の調高く坐歌さくもおかし、行かふ友の首尾小語さびごともおかし、朝の別れを送らるゝもおかし、時うつり事さりて忍びし頃の夕をおふもおかし、云つゞくれは言をやむる期なしなご語りるに、其興々に入りておかし、然る所に髮白糸をなしたる男、土器のさまくなるをわじかへに入て、荷かまこひ來り榻をおろし、踞すくりてありしが、ふたりの言をききおはつて悠然ゆんぜんと立てしは、兩所の武名至隱のいたることは我にすぎたり、然れども心にいまだ天遊をしる事すくなし我むかし藝州の城を枕し、死爰に極めんと思ひし時は男を知りて道をしらす、今天性の自然にもとづきし、我境界を二人に語ん、夫市中を市中にかくし、人家をかまはぬ野逕とし、まつことなきを常とするは、天遊のはじめ也、身を山中小にかくし人を去て已を誇るは、身をのがれて心のかれず、已を遠とほておのれを立物也、是非を捨て人と共に樂み、名を恐れて跡をなさず樂をしれども、たのしみも求めず、自然と來を樂み、おのづと去をたのしめは是無爲の初也、

このゆへに成は外を捨て、内を樂此家業を愧はにかむと云ふに、又いとあらゝか成法師の、禪衣の袂うちより七尺の柱枝跡より、二王の書圖を持來り、席の上に座して、三人むかひて笑つて云、先より人々のかたる所木陰より聞に、いまだ自己變生を明らむるにあらず、然ども至隱勇武の極まりをいは、何れか三人にまさらん、三人ともに外はたがへども、内は一也、此三士を以大明たいめいを見るに、ならふもな、今日本にも少からん、必ずあらそふ事なかれと云に、漸あけぼの雲引、軒の雀も朝を噪こゑは、四人ともに更にまた暮を賴貌たのみかほに其所を立去し

三 淺草の風人 芝の花作り

秋の朝爽氣あささわぎの雲かきわけて、窟ほらの邊りに獨の風人淺草のかたよりあゆみ來る、扇に珊瑚琥珀さんごこくぱくの玉を付たり、是にそ其名はしれぬらんとおもふに、咲殘る芙蓉ふようの露に貌をそゝぎ、笑める朝貌に袖をうちおほひ蘭のかほりの吟枝をとめて、つはめる菊にたのしみをふくみ、寓爾ぐよにとしてありしに、また獨の風流男、野分雪に裳ももをしほりかね、夕の酒に醉をのこして、そのかたとなく來り進しか、風人の悠々とした、すみ給ふ有様、願はしやありけん、側近くよりて、君今こゝに心を解とき、神を釋かつてあそびたまふ、躰見奉るにさへ、たのしむるねがはくは君の樂をきゝて、君たのしみをまなばん、我うれひを説といて、愁うれひをさげん、我父の家を忍び出て、あだ妻に通ふに、行時は後のうれひをわすれ、心のまよひ

氣うごきて、言を偽り、坐に首尾をつくらひ無数の歩も勞する事をしらす、相逢たのしみには一生の前後をわすれ酔に和しては分限に過る言葉をかざり、我實心の信をしらす臥ては時を告る太鼓をうらみ朝は門をばはく箒に音ありて情をのこし漸別る、籬かもとをすぐれば本分のこゝろにかへりて、父のいさめんことおそれ、母の思はん事をかなしみて歸るに、人家早く扇をひらき孝子の朝手水すゝむる音、新婦の曉髮梳る音に、おどろかれうれへをおこし心周章ねがわくは此まよひを解て、たのしみの一言をさづけ給へといふに、風人杖をたて、和歌をうたひて、猶湛然としてあり、風流男深くなげきてうれひ解事を請に、風人しばらくありていふ、足下爰にどどまり、今家にかへらん事を恐る、其心ひとへに愁をもとむるにあり、夕の行はゆふ興の時を得るもの也、今歸るは行時の順なるもの也、時を得て順にかへるは物の常也、何をかおそれ何をか歎かん、人のおもひは限なし人命はかぎりあり限ある命をもつてかぎりなき思ひを愁ふ、愚なるにあらずや、限有命を樂むに誰をかおそれ誰をか憚らん、夫人は後に悔むを至愚と云時を得るにもたのしみ時を失ふをも、樂を風人といふ、風人は行て遊ぶ時内をおもはず、あそぶに外をはからず、是非をとかめず座とともに利して悦びをなし、人をたのしめて已を安んずる也、歸るに怨をおもはず、人の嘲をあつかからず、是を風人と云、愁喜は我にありて天にあらず、此心を樂まは、たのしみをしらんと語るに、風流男ふかく感じて、よろこびをすゝめて歸りしか後に聞ば父母に夫より暇こいつ、弟に世を讓べき約して、片里に籠るしを、父の死し時、

家財をふたつに分て遣はせしに、風流男のいふに富貴は身をいかすにたらず、財はこゝろをたのしむ物にあらず、親の家人にさきくばりて、一毛もうけず、是より芝といふ所に出で、春夏秋冬の四時をたやさぬ草花をつくりて市中商ひ一生を送りけるにと也、

四 白川の葛男 住吉の異人

窟澹寂として、自塵事を去心の垢も清まる折ふし、越のかたよりなまめいたる男の、賤なす業してきたり、岩のうへにかつきし物をおろし、野山の風景を詠めて、たのしげに休らひありし、いかさまにもつねの者とおもはれず、いにしへはさも、人の衰へたるにてあらんと、哀に草庵に招き入れば、男語つていふ、我むかしは江戸の市中にありしか、或日片田舎へ行て山家の邊りを通りしに、年の程十五六斗の美女の、婀娜なるが、行なやみたる靚粧ながら、猫などよりもさゝやかなる物を抱けり、其毛色まことに奇班にして、薰蘭麝も、いまだおよげぬ程也、いと怪異におもひてしたひ見る中、彼艶女の婉轉の美はしきに引れて、自と御供なごとうかれまといひ、何國ともなふ山道を越行ば、岸も杳に見かすむばかりの門あり、水の流れも漲り、浪も普通より高かければ、彼女を負つゝむかふへ渡しけるに、女もうれしげに笑て手に持し異獸を我に送りて、しばしの道つるゝも、まことふかき因縁なるべき、おぼろげにおぼしめすな、永き世迄の縁を御形見になんぞいふに、いとゞやしきを添

て、戀心彌増身も消行やらんと、我ながらあやしむ程にて、なをゆきむかふに、杉のひら立蒼くたる木蔭に近づく、爰にいたりなば、しばらく休らひて情に想あらしをいはんとするに、里のかたより網代の組に羅紗の張たる駕輿昇て、婢の女あまたさいめひて來りしがこの美女を見付て、怪しやいかなれば、かくおそろしき所になと云て、人皆とりまきつゝ歸り、是よりあらぬ他人に心を勞し、その形見の異獸を抱もてかへり、日は日毎になげき暮し、夜の長きをそらみて次第に憔悴とおとろへ果、哀なる様になり行し或夜月殊更星めぐりていやましに過し、娥媚の姿をおもひ出て、やるかたなき折ふし、彼獸の尾より、唐花のごときうつくしき物の咲とおもへば、忽に火となりて燃あかりし、あたりの方に此事をいへども兼てより獸を見ず、今また火のあかるをも見ずといふに、なを不思議やまざるに、其日より猛火度くもへて見へし程に、こゝろ物くるをしくなりつゝ、ひさしきなやみとなりぬ、親しき者などよりて、都いさなひ、藥の様くをつくし祈加持などすれど更に驗なし一日住吉に參詣侍りて、病の事も神慮に頼奉つり、退て松の林の陰に徘徊いれは、年四十計の法師の、あらくしきひとへを着て、里の子供の、松葉かく助てありし、いかなる人やらんと所の者に問は、此法師はいつの比よりか、此はやしに來りしが、朝は人よりはやく、松葉さらへ柴童にあたへ、夕はまた夜迄かさよせて、里男にくばる、人皆此心に感じて食を施し衣をつかはせども更にうけず、いかにして朝夕を送るもしる人なしといふにおかしき者かとおもひて、立よりて語るに、さして物をもいふ事なれど、

自相ありて、親しみ舊友にこへたり、此ゆへにおもはずも一日むかへて時くは世の様など咄に其こたへひとへに常の人にあらず、かれと語る内には病の氣さしもなく、本性の心に也、立歸れば彌信を被して過し此山にてありし事、其後よりなやみし品ども語れば、僧いふ、是窮鬼のおかす所也色心いまださらざる内は、様は替り品はことなれども、人のなやみに此わざ多し、智をもつてものがれがたく、才をもつてものがれがたく、明をもつてものがれがたし常に只善惡の境におらず、無我自然の境界に工夫なさば、なやみさらんといふに、なをそのあらましをたづねて、別れ夫より無爲の徳をもつて、今奥州白川に引込、葛の根を掘て喫ひ是を商なつて寒をふせぐ、まことに此たのしさ誰にしらすべき人もなければ住吉にてまみへし法師にあはんと後また尋ね行しに、又何國に隠れし、更に有家をしろ人なしと語りてかへる、

五 兔遊女 市谷半人

或日幽淵の間に座して、世上有様を見る中に、時得たる大人の、忍びに遊興すると見へて、勇くしげにさめめかしづく事大方ならず、さし覗きて見れば、魚肉の炙または鴻鴈の羹粥充て、座の外に泉をたたへ盃盞ぞうかべ沉麝を割くべし、酒器を焼に、多くの歌舞女の替く泣、かはるく唄ふかくする折ふし、甘ばかりの男の、編笠ふふかくかぶり長劍に腰をひかし來るが、其様流石見落すべき

にもあらぬ風俗、下には白練の消げなるに淺黄の襟さして、三柏の紋付たる上重し其邊に立めぐりしが、時めく客の美麗におくせしにや片脇にかくれて休居けり、かくて日も西淵せつしんに落、月東階に臨比はひ、ひがしかたより物馴貌にやんことなげなる女の、白菟の白くうつくしく見へしを抱て、妓二人に琴に盃を添てもたせ徐に歩て來し其形の逶迤たひやにいとゆつ始つて、香風はとりを拂ひ、靜たふにイどばかりありて、岩によりかかりて妓をまねぎ、盃を取て汲ひ、其艷色にしてゆたけし、いかなるやらんとゆしく見る中に、遊べる大人のかたより使して、遊婦を呼様なりしに、目もて見歸りもせず座せうに返事してかへし其身は依然として、兎愛するやうに見へしが編笠さたる男をまねぎ酒すすめてころに垣なしたまいず、長からぬ浮世になんど云つつ、手づから琴しらべて、たのしげにうとよてありし彼男さかつきをさし置て少聞て問は、今大人の許より使來れども、其方をさへ見やり給はず、爰に遊びてはしなく返事し給ふは、いかなる心かと云は婦打笑て、なげかしの人心や、天高しといいと望ぬ心からは高からず、海深けれどもはからねばふかからず、小盃を汲とも、酔は則ち満ぬ、琴聲拙なけれども、我を慰め足事をしりては、外を何ゆへかの予まん、かく思ふよりして日毎に替る一夜妻も醜みにくといふをしらず、賓來りぬをも悔ます替るうき世もうらみず、奈にも應ず、我好む所のころをはなるれは人をたのしめ、我たのしむ今人々の爲に、曲るを見るよしなや、酒もてこよ迎、また盃をとりて數獻けんに及ぶに編笠男ふかくはづる色ありて云、我心をそれへ見を勞して、名利にふける今のたまふ事を

さきて、内外の分をさとりぬとて市谷の田町といふ所に隠れてあさましき奴やつがねの妾となり、母の爲に野菜を商つて、養育渡世せしが、朝は肩に目籠を荷ひゆふべは無爲の工夫をなしし暮しぬと

近代艶隠者卷之一終

近代艶隠者卷之二

一 岡崎の市隠 眞葛原艶男の

春の名残も今しばし迎、山野のけしきも見すぐしがたく、烟霞洞をつつみ小雨斜に降て寂寥ゆふべ成に、哀猿一聲を叫び、廬山のむかしもおもひ出され、過し世の中の事など打かこちて、春の外を見やれば、あやしの男枝に歩を進て來り、にけゆく菴中に入て黙して座すに、衣垢づき裳裂破れたれど留伽羅の薰もたいならぬに、そのさまもいとけたかく、流石昔日はと思はるるなれば、何國にか住せ給ふやらん、いかなる業に身をなしたまふと問ふ、男在家は答ずして、成事とは色にてそあれ、是身を生種なりと云捨て、また黙してありたり、我おもふに、かれそ昔往財産にうとからずして、春は花に酔ぼけ、秋は月にうかれて、世わたる業さへしらす暮しし人の、傾婦のたはふれにはだされ、事舞の扇曲にふけりて其身をおとし、今下様の家職も口惜く、其はじめまみへし妓女遊童のおもはん歌も愧かしみて、かく替たる異相の人となりつつ、世上を紛らしく渡にてあらんと、やさしくも哀におぼへて見るに、又むかふより艶色に作りし男來て、彼異人にいふはまこと見わすれたまふ事などもあらん、むかしは足下の下風に習ひ、戯の席にも望、盃の間なす品をも見なれ、文の言葉書をも知りて人にも立まじる程になりしが、今も替ぬ家業は捨ず、自勞して世渡れと、色情の里をはなれぬ氣にあ

りながら、中へ心をうごかし、身のさはさを樂しむ境は二人たり、しかれどもいまだ、色滅色有の間を離るるはあらず、潜に人の語には足下にははや此境界を悟りて、常に白茅を褥とし、煙霧を自然の錦帳となし、樹間の風吟を無常のしらべと觀し、心慰まると聞し、呼至かな色道の學、吾もその元をしりつつ、一度浮世の闇を出て、長久の道を願ふ同じくは君の物語をきかんといふに、異人答て、色なき人に此道をかたるもむつかし、しかし足下にははじめより相馴し情にもわれは、あらくしく語らん、今人界の男たる者色をしらぬは其様いやく、心かたましく世に住甲斐なし、色より至道に入こそ誠の道なれ、此道のいたりといはは、色におはれ情にひかれ遊をことと成にあらず漸入ては人のころはせを知、世のままならぬ常をさとり、契しかねこそ夢なる事を思ふは此はじめたり、初春の朝我閨に曙の鐘を哀み、宿の軒端に霞を見るもおかしく、秋の初夕、佛前に魂まつる業、物すごき暮の冬も、月を見るころとなつて、其色里の硬きかぬ事も還てたのしひは、至道に入の門たり、形は外をかざらず美人色をわすれ、心を懷て静にし自默して言をやむるは心をゆたかにせん爲也、ゆたかなれば色心動す心うごかねば、形を勞せず、形安ければ心悅、こころ悦時は常に色有て樂足りいまだ逢見る逢見ぬをいふにはあらず、此境にいたれば、形うるはしく老に至事遠し、是より物と相さかはす、知を捨て愚に入時は色道の至極となる、爰をもつて徳をつつしみ道をまなび給へといふに、艶男裡に泪を掛て去りしが、次第に心を琢き、家業を自然と退むかしは歌にも眞葛原と讀たるも寺前と

なりし、片市中に入て古物欄などに詫つつ、うき世を安く暮し侍りしが異人の住家岡崎に通ふて、水魚の思ひをなしつつ居けると也、

二 五條の笙吹 清水乞食

ふしぎ成し事を聞しは、きよらかなる男の、ある夕草葉の沈かきをうち拂ひ、笙をあやなく調もて來り、岩下に座をなして吹やます、誠に聞音哀に感をおこし、うるはしく愛ありて、誘ふ暴風しづげく其聲あやにく奇怪なり漸時うつりいやましに妙なる聲びゞき、其人も己をわする頃に可愛艶麗なる女出て、其曲をきく、視に其様よのつねならず、彼男もあやしく思ひながら、其形の媚なるにめでて、寵をなす事更に他なし、しばらく有て目まじろくまに女は何國へか行て見へざりければ、男愁る様して、其行所を尋ね求むれどもしるる事なし夫より心まよひ形つかれて、戀慕の心月を追日重ねて、まさればあるにもあられず神佛の力を頼ば二たび彼女に逢もやせんなど、深く信をおこして、洛陽清水寺に百日が中詣でけるに靈山通る道の上かたに一人の非人ありて、毎日履を作りて商ひゐしが友の乞食來て物いへとへども答へず、其日の糧を求むれば、あたり岸に寄かかりて眠かごとく跣座してあり、いと不思議なる者ご心を付て見しに、中へ只ならぬ相ありければ、かの人の側近くよりて、いか成御かたにましますはかく世をうとみて隠れ徳をあらはさず、光を包でやしまししけると問に、此

人笑つて何をかのためふやらん、只貧苦に責られし非人なる者をとばかり、其後は何の言葉もなかりし、是よりしては參詣する毎に、此人に語りて歸るに、時として果敢くわかんなんと送れば請、外に米錢の類はうけず、はや百日の歩も今すこしになれば、けふは酒肴を調へ、山陰に席儲けて家人ご加へし非人を招て、しめやかに語るに、此異人我に問は、足下の有様を見まいらすにいかさまにも心におぼする事ありて、かく佛縁にも近づき給ふならんといふに、はしめよりあまましを語は、非人いふそれこそ足下吹かせたまふ、笙の感聲かんとく疑て、しはらく形をなすもの也、然るを是に着して、笙をやめ給ふによりさて消ぬ、人天五濫びんてんごらんのかへることし、吹ば生し止ば則消、變化なにかかかなしまん、變女もとより元なし、變じて生じ變消、元また笙の外になく、又笙の中にもなし只笙を弄もよほして聲に愛心を吹出す、其變たるもの也、其變又變ず、愛も皆私の愛心にして、あいしん元外になし、愛を思ひて着を去給へど云に、誠成かなと心付て、それより觀音の御前にて、法師と成常に愛せし笙を抱て何國ともなふさまよひ出し、後間に草双紙經くさふたじなすと負て市中賣廻しが、かりにも賣べき外の道をいわず、糧の絶る迄は賣事もなく暮しけると也、

三 谷中の三重切男 小石川の揚枝賣

微雨斜かろに清てしろかり夜、寒蛩かみづあはれを催し、あぢきなくも枯行聲に、生死二門の觀をおこし、嗟峨

岩下に居をしめて有ける折ふし、谷中のかたより奇異の世落人來りて岩ほの上に裾打掛てありしが、稍して袂より三重切の升取出し、奇金の花寛を織たる白緒のむすびに解て、片脇になをし、椒蘭かきの蕪しめやかなるよ通ぬいて、半呂の音に調つつ吹すさむに其聲儼然として已をわするるがごとし我其人にむかいていかなる人やらんと尋たるに奇異の男答て、我は是より北に當て杳の國の生たり、我一生のありさまを語らん、十にならぬ春秋を越し程は、父母の懷にて育せられて寒温の境をしらす其年の過る比より我家の武家の武を稽かき、詩歌の大概を學ひ、藝にあそんでおのれをわする、漸十五を過て年をかさぬるにしたかひ、身の才能にふけり、父の家を去て都にうかれ、江府に至て身の便を成に、財を求むれば遊興に費し、一日は夢現よりも他成事を思惟して、一時のたのしみに迷ひの眠をさます、あたへあれば駕かたに乗て心のおもむくにまかせ、あたへ絶ればやむ、かくする事三十餘年和歌に興じ糸竹に遊じ宴に及に至りては南面玉たのしみも心にたらず、常に此竹に遊興をかかへて、愛を遠る物也、今吹やめてたのしまむも訖し、竹に徒然まじを忘れる云て、また調子を替て吹すさぶに鹿鹿かも溪に下り、狼狐ろうこも爰あに踞りぬかく語る初より片脇に又獨の悪人きたり此あらましを聞居たるが其體衣ひとへに過す、纔にありて竹吹人に聞いていふは、足下の境界きくに我たのしみとなす所にあらず、我一生の失命は足下に似たり樂所には異あり其違をいは、既に生じて以來、の進退替事多、有時は士官と成、從僕をたつさいある時は野徑に草枕す、飢て糧なく寒て暇なし、然れども境界に分をわするれば、財を

求る暇もなく貧しけれどもうれへず、富ても驕らず、畢竟貧富ともに如是と観すれば、今楊枝をけつり商て、小石川といふ所の裡棚にゐて、世をわたれる足下今財の來ることを窺ひて、遊を待は下哉と笑ふに、三重切男泪を流し、異人をともなひて歸りしが直に萬西といふ里に入つ、二人ともに此所にし、自耕して夜は三重切ふきて慰み、里男どもに樂しみて暮せし、

四 汐汲婦人 人得男

かならず窟の草庵にありて、月を亘るに或日行脚の語しは、我むかし去國の守の住たまひし里に出れば、其邊の賑ひ、人もなやかに所の風景もいさぎよく、片脇は海邊杳にして磯際に聳たる大山あり、仰ぎて之を見れば、寂寞たる樹間にひとつの社建て、火ナンと幽にざれ行それより左のかたの濱には、賤家の奴焼汐烟に、其身に釋け手桶に肩を樂め、ちよれんに手を慰めて、さしも愁へる色なく立ならぶを、興有事よと心をこめ、鈴に小語、笠にはらひ、稍休居れば、むかふよりいやしからぬ女の色相青く、物おもひげなるが、ちいさき花手桶に砂汲入て來しを、鹽屋の人かと見はさにてもなし、いか人やらんと問ば、女俄に歎きて、御かたなんどとき旅人見るさへいとなつかし、是より縁に隔たりたる里に住もの也、幼なふて母におくれいまだ十にならぬ内に、父は名を埋む事を悔て、武藏に行しきが、便さへかれて跡は乳母のいやしげなるに育せられ、年月を過るに、おもはずも此七とせ計

先に、不慮の人と縁をむすび、二たひ替らしと嬉しく思ひしに、男いかなる故にか、此所を去て何國ともなく出たる時、書きおきし跡の化言を見れば、是よりしては妻といふ物をもたじ、それにて恨みなすなよなど、殘せし筆のかたみ見るもかなしや、女の身さへ一生聞に和語せん事も絶にしよとおもへば、末の頼として何待心もなく、愁身を責めかなしみ、袖に餘るとおもふに付て、夫のうれへをわすれん友もあらじと、猶いたはしく侍に我こそひとり朽果るとも、せめて彼人はいかなる婦をもむかへて契れかしと、人汲汐に此山神の瑞籬をさよめつ、祈奉ると語るに、賢女のこゝろざしを感じて哀をとめ行は、ある山際に水の流れていさきよげな邊に、ひとつの草庵ありし立よりて見れば、ちいさき相人形ならべて其脇に廿五六なる男の何心なく遊ひたはれてあり、ひとへ逢にし女の語りし人にながはず、いと不審なれば彼婦人の有増を語るに、此男笑つて、人間世上のあり様皆かくのごとし、やむればやむを悔み、退けは退くを慕ふ、やまざれば譏り進は誣る、是珍敷事にはあらじといふに、我いまだ男に問ふ今遠く退き止を樂むは、人にしたはれんを思ふにや、男なを笑つて愁すたのしまさるは徳の至り也、何ゆへしたはれん事を思はん、物とまぢらはず獨あるは淡の至也、和を求むるは和にあらず、水の水にして外をまじへぬは濁なく、澄ば則是靜也、靜なれば、變せず、變せざれば無爲也、我は無爲に遊んで徳を助くる物也、人の爲にやむにあらずと云しと語る是こそ都北山の隠士なるべし、

五 吹捨の尺八 七弦の半人

或時人の語しは、我いにしへに諸國執行の心ざしありて、尺八の僧と成つゝ、見なれぬ國々里々を、脚にまかせ風にしたがひて、さすらひありきしに、其はじめ相馴し時、一日も離れん事のかなしかり妻のことすら慕心なれば、夫より以下他に通ひし一夜づま、迷ひ妄をかさねし傾婦の枕、相逢中の絶にしかなしみ更におもひ出す事もなく、家々の軒下に一曲をしらべて、施物を請ず、吹捨にして通る、其樂み人しらぬそら笑ひして行に比は涼川すゞしき水をたつねて、男女粧ひに媚を誇し、立舞袖しげく、ゆふべもちかふなれば、流れに盃をうかへて、思の色をおくるも有、貧家樽瘦て笑ふを磯邊に残すもあり、文客履をとめて立やすらひ、騷人藜を立て枝に眠るに、我も盃に詩魔つけられ、イ子中にさしも長き夏の天さへ、はや黄昏呼程になれば、とある山間のに入つゝ、一夜をおしまぬ宿もがなど、あなたこなたするに皮屬の蘇ひしたる木にて門かまへし、薪に薄結ませしたる家あり、さしの分きつゝ、見るに銀のうすすゝけしたる屏風中に絳綾の垂布手揚て、奥には駕籠の這子ななどもあるに、輕羅張九張の中より、小々なる聲して藥や香汗ぬぐへと言もいとかなしげに姉が過行しさへ身もともと思へど、御身の世にあればこそ、おかしからぬ命もながらへ侍れ、もしも母を置て先立たらん跡に残りていかにかせんと、歎しづむ様も哀し、扱は内に病人あるよと聞あるに又外よ

り人跡吊ふ法師二三人來て、誦經など打して歸らんとするに彼に帳の中より年程三十ばかりの女のうるはしげなるが、皆物おもふ事の數添しに、打しはれたる體にて、女の童にかしづかれ出つゝ、彼僧を引とめて、貌もてあげず伏しづみてありしが、漸としてかの小女に小語聲しけるに、奥より小袖に琴添て持出ければ、艶女其琴を彈鳴して、なを愁にしづむ貌なりしが、是こそひとつの死し娘が常に弄びてしらべつる程に、責ての形見と留置しかども、見るもなほ面影の立てかなしきに、菩提の種ともなしてたべよと、僧にあたへて奥に入を、我彼人の袖をひかへてかくなげきの中に申も申々なれど、今宵は一夜を明すべきかたもなく行暮たれば、明日迄のあるとに頼よるなど言に、さしてつらげなる色もなくとかふ返事はあざやかならで内に紛入り、しはし有て彼女童に饗やすらかに調じて持せ出せり、是に心やすまり今宵は爰にこそとゆたりけく夢むすふに、夜中に過る比奥に聲して水よ薬よとどよむ中に、はかなや息も絶しと計、其後は物の音も絶て時々はいかにせん我身の上と云聲の外なし、扱は夕はの見し、なやみ人死にこそ誠に一夜を明し兼て、他成宿りせしにといとはかなかりしに、漸夜も明れば、なき人は無常野に送る様也、母はなげきに歎きをかさねて、氣もたがいぬるにか、自劔の上に伏して死けり、見るもためしなく、哀も筆を絶る計なりし、かゝる時しも、其間杳に隔たる屋の奥に、七絃の箏に感聲を凝音しけり、此愁の中にいか成事にかと其所を求め見れば、むかふに生死事大に額掛て四十計の男椅子に倚かゝりて遊ぶにて有し、いと異な人かなと思ひてかく

衰傷の中に、いか成人なれば樂しげにと言に、なを彈しやます我問ていふ乾坤打破せん時何れの所にむかひ瑟瑟せん、答て打破せん時爾にいはん、即今打破すいかん只箏問答おはりて異人箏をさし置て、さればとよ死たる者は我妻子也、人として生死をなけかぬはなけれど、強て悔は愚成也、既に變じて生じ、變じて死は變の常たり、變何をおどろかん朝は起夕は臥、是つねの變たり永臥永起るは生死の變たり、覺て後變たる事をしらん然れば覺る人にむかひて我何をか歎かんと云に、此生を以は他生を破らぬ事を語て蹄し、此男こそ江府に聞し、七弦の翁たるべし、語し人は武藝の達人、後には筑前の福岡に住しが、常に馬を好んで朝は釜の沸にたのしんで禪單工夫を凝し世を送し異人也、

近代艶隱者卷之二終

近代艶隱者卷之三

一 都のつれ夫婦

行すゑのしらの浮世、うつり替るこそ變化のつねにおもひながら、去年もはや暮て、初霞の朝長閑に、四隣の梢も蠢、よろづ温和にして心もいささしげなるこそ、しばらく此所をも去て世の有様をも窺ひ猶身の修行にもせんと思ひ、さしも捨がたき窟の中を立出、志て行國もなく心にまかせ歩行に時は花咲比、樽に青氈かつがせさへに席を付て、男女老少あらそひこそり、櫻か下に座の設して遊ぶに、此景たゞに見てのみやあらん、花のおもはん事もはづかしなほど、詩にこゝろざしをのべ、歌に思ひを吐、楊弓に興じ、圍碁にあらそふ、思ひの成業歌舞音曲も耳に滿て、其様言葉にのぶべくもあらず、又ある松の木隠に、その體うるはしき男の色ある女に、湯單包をもたせ、藤浪のさよげなる岩間づたへに、青苔の席をたづねて來りしが、とある所に座して、竹筒より酒を出し、酔をすゝめて花見るさま也、時へて後彼女にもたせし包物を明て、ちいさき春、ほそやか成杵を取出して二人の手しけしらげけるが、また水を汲、火をきりなごして、あたりの散葉拾ふて、炊揚つゝ、是にも足よとて、たはふ笑ひ、たのしげに食ふ、我此人に問は、先より見まいらすに、只ならぬ人にはありながら、他成仕業のみ多し、いかなれば功すくなきを取、功のまざるを捨て、身を勞したまふといふに男

憂へるけしき有て、世の道しる人こそまれなれ、かなしきかなと嗟歎して、顔もてあげて言ば、今花陰の賓客美味酒肴をと、のへ、珍膳珍菓をたへて、春興をしたへども、まことの天樂をしらす、人間上下常に愁の多き事は、皆己の成業なり、試にこれをいはば手より自事を調て食ふ時は、形はうごけれども、心定まれば、神安し、神安き時は、何をか愁へん、うれいなきを徳と云、世の勞をぬすまず、無徳の者は世の勞をぬすむ、このゆへに形は静なれども心動く、こゝろうごけば氣さはがし、氣さはがしければ、神安からず、かくして何國を樂といはんや、世を偽りて富貴を求め、謀つて財祿をたくはふるは愧る所にして取る所にあらず、自出かへし自織出し自炊、みつから食ふ、故に心に勞なくつねに恐なし、勞もなく恐もなければ自然に天樂あり、てんらくをしらざるものは、或は愁あるいは悔、或は憎、此こゝろより世をもうとむ事あらん、我世に迷懷なく、たのしむ事不變にして、愁と言事をしらす、噫はかなの足下のこゝろやと云に、いかにして其もとをなさんと問ば、あさましくもまよへる人かな徳といふは外を捨て内を治め、外をしらすして内を知るおのれをかざらすして天性をやしなひ實にかへつて世俗に交る物也、外何をかたのしまんといふに其住家はと問は、浴外の隠士と答ふ兼てきぬる人にありけり、

二 嵯峨の風流男

卯月のはじめ、青葉の茂みもなつかしく嵯峨の方を心掛けて行に、山間の静なる所に幕張まはし、緑の被緋の氈をのべて咲残る遅櫻に名残をおしむ客あり、さしよりて見れば、内に主人とおぼしき人の其體貌々と威儀をかざり、躰ひを推して座するに、姪稚妙なる妻妾をいろいろ盡盡したる上着に、自直して左右にかしづきをれば、偏愛侍婢の、嬌なる双鬢など、品好みたる裝束、花を枝折帯に、紫濃助帯迄も、石流ゆへありけに調して、立さけは、外には兒童つかはれ、おのこ次第に列を引て並后りたりし、少程へて主人盃出よとあれは、蒔繪したる飲器美味盛し器、玉かざる、調子もて来り、上下入見たれ宴に及て酒闌也、しはありて西のかたより壯年の男のつややかなるが、身にはいやしげなる布に、綾うらうちたる、物着て、手拭の單帯して金ののしつけのさすがに、燈袋をさげて、浮洲の筈に足やすめて進來れり、是も岩陰におり居て、友なき異郷を笑ひ、自香の焚今様の歌をうたつて鬻解つ、うち亂して、僕にもたせし腰筒とりて、香事數獻醉て眠覺て唄ふ、あたりの男女わやしみ見れども、さらに其方に眼もやらず、ゆたかに臥、豊に起る幕のあるじ不審おもふにや有けん、この男にてこよといへば、従者至りて其よしを告るに、風人答て、先よりそのかた見奉るに、我友とする人にはあらず、此よし歸てのたまへと言て更にゆかず、彼主人盃を捨て、此男の側に來りて敬をなして問は、我境界足下のこゝろにあらすど使の言し、いか成ゆへにかある、此事をたづねん爲に、今爰に爰見へり、詳に明して是をしらせたまへと言に、おとこ答て君か樂む所、實は外にして、實は内をたのし

むにあらず、自おもふに國主城主の威を重して、士官を携へ、かりにも權を厚するは、皆民の上たる役にして、人を治むる爲にあり、今若其位にあらずして、威義をおごそかにし、外をつくろふ事何のゆへにかある、今爰に帷帳いまくらを引器をかざる、又兼て催する勞あり、心を樂むにあらず、今妻妾をともなふ、且又他人の見ん事を恐れたまはん、是こゝろを愁ふるにあらずや、いざ從者多し此ゆへに其身を慎み、下の亂れざるをおもはん、勞するにあらずや、今君の過麗を見ては、世上皆うらやまん是また人を罪するにあらずや、夫よりして已い君かなぐさむ事は悉く外のみにして内をたのしむ事うとし、慰する事は少して、勞する事は多く、非はありて是は稀也、さるから我願ひとする所にはあらず、我も又從僕すくなき身にもあらず、又財産のさばしきにもあらず、然れども富の因て來に誇らず、財のおほきをあつかからず、故ゆへに財に一心を汚さず、是清福にして清貧に何おとらん、貧富自然に隨ふ事をおもへば家業を人にまかせて、欲心をしらす身を僉約にして世の責をなさず、只遊比となる事を恐れて、然も世俗をはなれず、内外の分を定めて此里に引込、氣を養ひ性をたのしむ、栖興すいかきやうつくれば都に出、舊都に行、時にふれては舞妓にたはれ、舞童あそぶ、しかれどもかれに愛を請るの心なく、富貴に奢る心もなしかれと共に遊び、かれと共に慰む、世人と強て語る事なければ、人譏そしめをおもはず、そしりあるもかなしまず、循じゆんとして行、循々として歸る、是心をたのしむ所にして外にはあらずと言に、客歇然きゃくしやくぜんとして前非を悔る様也、我里の椎夫に彼男を問は、鳴瀧なるたぎあたりの遊男なりと答

て暮しぬ、

三 四竹の隱者

はや紅葉も盛に、通天の色こそよけれ、名に高雄をこそ更也なんと、心くの道いそぐ人にうかれて、神もせきあはず計見ありく程に、精神もと、根性と觀破し、破れる草鞋を笑つて、ある片里に入つ、見れば、山陰の人げ稀なる所にわづかなる家ありし、内に立年りゅうねんと見やる男の、よつ竹と言物をうちてたのしむあり興有事かなとしはし腰うち掛て見れば弄竹りやうちくをやめて眠れる事良久し、我も爰におなじく休み居けり、しばらくあれば、男また夢覺て見ゆる是にむかひ言はいまだ御年もいと若くて、殊には器量も人にまさり、何故かゝるあさましげなる所に引籠りて、世を捨顔に住せたまご問に、男の言は我いにしへ身の使の求め先祖孝をもなさんとおもふ折ふし、或人と坐に云かはせしに、此男世渡る品もさかしく、愚なる様もなくして、少は學びの道にも入、財をたくはへる事もかしこげなれば、友とするに益あるをと思ひて其比むつまじく語てありしに、かれ田舎へくたり行、ある城下に住所を定てゐけるか、大守の命にたがひ、遠津島へ流されけると聞、子細を問に其比は殊に家富藏満ふさむらて勇々しげに待りしが、世にもまれなる寶物を求出せしに、國主深く望たまへとも出さず、剩へ偽りかざれる其答により、財産ことごとくめしとられて、其身もかく罪に逢ぬと語るに誠まことに化し世成かなとおもふ比

に、又ひとり親しく伴ひ咄し得る色里の友、是も程なく傾色の情やまず、流牢の身と成て、行方しらす、かれは平日妓女に枕をならべ財を費すのみか其女を家につれこし少の内は相住せしが、かゝる事には成行し、誠に此人は色よりつるゝ友なりければ、互に隔つる心もなく常にも語むつびし程に中々分て哀も深く侍し、是より人間有様を觀じ見るに獨の友は世俗の家業に疎からず、財を求る事もさかしくしかりしが、還て是に仇せられし、又色にふけり興をこととせし友は色情に身を失ふ、然は何れの所に身を置んと思ふから、世に述懐もなく、世を背にもあらねど、しはらく夫用ると言に我重て問、しからは爰にゐたまふは、善惡の境をこへたまふにや、男言さにてあらず、人間の品をはかるに、知恵有者はする事なきを憂、辯ある者は語なきを病、淫ふければ色を愛し聲にふければ糸竹を尊む、此故に我其心よりかりにも、心に發る事を果し遂ざるなし、色を思へば姪なし、聲にふければ糸竹を聞、今又靜なるに着す、こゝを以て閑居に籠れり、夫心といふは好所をなさざれば、一生愁と成、とけなせば則飽、飽は則着なし、着やめはたのし、たのしきを樂んで、一度自然の道をまつと言、又問前の二人の内は何れかましならんと言に、男答て世渡にかしこきも樂んで渡らば、是則是ならん、色にふけるも樂んでは則是ならん、何を非とし、何か是ならん、是と非は皆内にありて外の見るにはよらじ、世渡にも財の集を樂み財の散を悲しまば、樂はあらざらん、色にふくるとも又同じ有ものしみなきも樂まば畢境是也、進にもたのしみ退にも樂しまば爰に是非なく、外にからざる時は皆善惡あり、外

をすつれば二つなしと云し、能々かれか德義を聞ば、高雄の山里の隠者、心あらん人は尋ね見よかし、

四 芋うみの尼

朝とく宿立出行ば、舊都のあれはあれしかども、稻余風残りて、古跡の數もあるなる所に出て、此度ならでは又いつの世になんぞ、さすらへある名所をはや見終ぬ、それより市中のかたはひに出るに、此日こそ男にも成つらんと見ゆる人の、其跡垢付て、遠旅して來ると見ると見へしが我側にあよりて、小官は是より杏東の國の者たりし都へ用の事ありて登に人より、文ことづてられけれど、其行先いまだ近からず、さあるにはや道のいとなみ書て羈旅の饗たへて便をうしなふ、見奉つれば足下には廻國の躰と察せし程に、ねがわくは、此文届てたまへど渡せば、のがるべきかたなくて頼まれしに、男はよろこびにたへて立去し、それよりおしへのごとく彼所に越て、あなたこなたと尋ね侍れしに、あやしき踐の男出て、今たつねさせ給ふ家こそ、あの森の中よと言に嬉しく、とく門に入てうかへば、いか成ゆへか有けん内には、はさやかに作り立たる男女とゞめければ、外より婦人のもてる手箱やうの物はこび入に、樽ひらけよ、肴いわたてよなど、ことぶきする様也、猶奥を見るに人あまた集り居て、饗膳する躰もいかめし我もしばらく其邊におりて内も少しづけくなる時、下の女をまねさて彼文を渡し、ことぶかりしまゝと言捨て歸に、下女しはしと袖をひかへて、其身は奥に入し、少有

て彼女出て、今文こさせ給ふかたの御母こそ、是のあるじにて渡らせ給ふか、届けまいらす人も懐し、はやくこなたへ仰せける程に、あれへわたらせたまへと具して行し、あたりを見れば故ありげに親しき人どち打よる中に、母とおぼしき人彼文を手に持ながら、いまだ封じ目もさらず、うれしげに我にうちむかいて、足下には遠き所を是能届けたまふ、物かな此文越けるは我一子にて侍るが、去年より此國の守護につきて、遠き江戸に行しに、久しく便も絶て、いかにかとおもふ折から時もこそあるに今宵文見るも母か心と通じけるはと、上包を解て讀に、不慮なる過ありて、主君の命をそむき、けふ夜に入てむなしくなる間、此この世の御名残にと、かく書置も化し、母こそ先立まいらせ、なき御跡をもとおもひ、しものを、定めなき世のならひ、かならずなげかせ給ふなど、こまくとありける、是はと驚き周障、息も絶るやらんと打なげきしが、漸貌もてあげて脇にゐたる小女の袖に取つき、さるにても死たる者は定る業とおもひながら、わけてかなしさままさる事こそあれ、はかなきもの、御ゆへに、年月おもひを勞する人の語れば、親の身なからなげかし、いかにもしてむかへまいらせんと思ふ中に、御身ははや人の幻してむかへ奉ると聞から、吾子の深く歎かん事の不便におもひ、わりなく乞請今宵事なるうれしかりしに、いかなるあだし世なるかなと、猶歎きを添る様なりし、小女すこしもなげく色なく、母にむかいて云は、生死誠におほいなれども、變ずる事は一也、おろかにも變をなげき變をよろこぶ物かな、まよへば生あり死あり、生も自然に應じ天と共に行、死も自然に物に化

す、天と行物と化すは皆内にして外にあらす、生死合て共に一也、此理をしる時は心安し、安きは物の常たり、つねたる所に何の愁喜あらん、我天然と此事にあへりなげくべきにあらす、悦ぶべきにあらすやと、自警みづかちりきらんとするを、一座ふかく留めければ、娘わらつて、鳥高く飛は網の恐れなく、人塵世をさくれば生死なし、是又天の常たり、幸なるかな此事とて、つゝに尼と成り、奈良の都の近里に草庵をむすび、麻の苧うみて朝をいとみみ今も靜に世をたのしむ。

五 難波の歌翁

けふは蘆の浦に出つ、昔後太子の御徳を慕ひ天王寺に詣で、夫より相なれし知人の家に行、替りし里片山かくれの物語に四五日は勞をばらし居中にむかし淺からず因よし友達をみへて過行有様など、云出し慰さみけるに、ひとりの丈夫の語りつるには、爰にもめつらしき人こそ出來り侍る年の程は六十餘の翁の朝夕歌書に心を盡し、終に菴室を出る事なく人來て、物語にも歌の外に談せず、客歸れば又書に眼をさらし、和歌に己をわする、隱徳至心の老人たれども、國の民いまだしる事なくて、其境界を尊む事稀也、しばらく爰に足を止め給へは、彼宅に行て、其境を窺ひ、學ひの便にもせよかしと言に、聞よりいちはやく慕しとおもひて、次でもあらばと待まふけし中、はかなや月日の立行事は、目をしろく間もなし、きのふは野逕に雪を踏分、しるよしの桑門を尋ねるさへに、烟のみして扉の岐

も見へわかぬも有しに、はや黄鳥のなまり聲聞程、池亭の水も自然とぬるみ、流れるを閉る氷解れば、陽國の溪間には、人しれぬ梅も咲やせんなど、おもへかはるもなをいさましく、杏に見あぐまば峰の縁に梢もうるはしくて、天の詠も馳つよなる頃、雲に入馬まなじりをさき、胡蝶も搦々として垣根をわたるに我もむなしく止りがたく、永井の浦に歸鴈をうらみ太刀造江に吟うた節ふしを立て、淡路島のしるしの烟を驚き、はや江天に影落る星か池を跡に、おもふにいにしへ土師の連明詠つらなるうたを唄しも、今松風に替し事、萬成行有様を哀みかへるに、四橋を越て其邊の人家に紫むら氏が作れる物語よむ聲しけるを、誰なるらんとしたはしくて、たつねて入て見れば、すぎし比人の語し翁にてありけり、聞しもまさりて、殊勝なる様なりければ、片脇に座して書の終るを待に、はや半鐘の聲さこへて、老翁も釋をやむれば、我彼人に問、何なるゆへにか市中に有なから、家より外にも出たます、かく引籠ましますにか、又さもあらばいかなる山陰にも隠れたまはぬなどいへば、世をはなれては、住里なしとばかり答て、何のいらへもなし、かさねて問歌はいかなる物ものや、翁答て吾もしらすと、又問足下には何をかなしたもふと言に是に答て、我はつねに四時のうつり替をたのしみて、飛花落葉に常を觀し、變化の境をおどろかす、老衰を元天利と明し、貧富の分をわすれて、偶じとして暮すと、又問然翁の身のうへに、戀こひ迷まよ懷なつかの詠はなさずや、老人答て五躰則これ法身の都、内に心玉をやすんずれば、則真人、本覺法身の都に住、得る心王は不思議、不思議、其境界より出るは歌也、思慮別地、にわたりて吾なすにはあ

らす、爰にいたりては、傳ふべき道もなく、語るべきかたるもなしと言に、和歌の奥義のふかきにおどろきて歸去る、

近代艶隠者卷之三終

近代艶隠者卷之四

一 隠家の老人

逢坂の關を越て、清明たる走井の水に、手水むすび、明神を拜し、奉るにも出入二門の輪廻をはなれ、そのむかし琵琶を弾じて、一生をたのしみ、三首の和歌に、人間のまよひを解たまひしなごおもひ出し、目前の愁喜再會別離に觀を發して、はかなくも生死をかなしむ事よと五障のまよひ感なるをなげき行に、杳を地をろせば、湖なみの上に丸木の舟蓆の帆影續きて、白鷗雲に翹も跡なつかしく、あらめなる岩角に勞し、大津の浦に出つゝ、矢橋に渡す舟に便すれば堅田の磯に落雁群て、唐崎の風景松うつ夕雨のけしき、鏡山今宵の月も見ずして、こゝにうかみ、漸むかふのおりばに着ば、草津の在家を越て、それより美濃路にかゝり、彦根の市中のしる人たづねて、かれが所にその夜はあかし、朝とく爰を去らんとする道に、時を定めぬ喚鏡なくわんきやうン口ごきこへぬ、立寄て見るに、二重の垣かきつた馬のまとひし、窓をふたぎし、風にまかするくゞりに入れば、四時を眺むる風景殊更也、無邊の光明、天然と事に應じて聲をきく、響の當頭ならん自己の心性一時に識得する、風光發生とゞまらず、半月西山を移せる燈籠も苔むしすぐろなせるには、おのれそだちの花雲にまじはる棒松、つゞきて木犀有飛名の便もどめて行に、爰に爽さわやかなる一字に巢立する椋鳥とまるはらよき葉音もあり、興するにやむ事なく、戸の聞より

さし覗きければ、ひとりの老人中央に袖香爐をあしらひ、釜沸に已をすまし黙然としてありけり、我此人にむかひて見まいらすれば居所ゆたかにして世俗を出、形ゆたかなれば心も一にして樂みよのつねならじといふに翁答へて言居所ゆたけきを好むにあらず、靜なるに若して閑を愛するにもあらず、世俗を出て世を誣にもあらず、世塵出塵の境をしらすと、天地の外にあつて天地の外に食せば、出塵ならん閑を好者に動、外靜なるものは内さはがし、我は是をこらす言に、しからば何れの所をたのしみ給ふや、老人言吾世俗にあつて世俗にうつり人を愛して人樂むを愛も天の理、分も天の理、曲も天の理、地も天の理、盡も天の理、此五つをはなれぬ時は、てんのつね也、愛すれどもおぼれず、分てども角なく、曲れどへつらはらず、知ども欲せず、盡せども心なし、かくのごとき時はこゝろひとし物をなせども手をもつてせず、見れども目をもつてせず、きけども耳を以て聞ず、是より已下は皆心もつてこゝろをなす、其心入我にあらず、是天の自然たり吾は此所に年ひさしく住馴しといふ、にしに白髭の神山近し北に埋木の里ありて南に都のむかし見る、ひがしに水海明暮かはる風情それも夢見るごとし、何の心にかゝらすこゝに住ぞかし是々世に聞し近江の國に隱士ありとは、此人なるべし、

二 酒樂の鉄男

尾陽名護屋に至て爰にしばらく留まり居ける中、年の程四十餘の男風雨の境をいはず、曙のまだ霞く

らきより、肩に鐵打掛いとたのしげに歌うたふて通るが夕はま酔に和して歸る、かくする事度重なり、いといぶかしくおもひて、其あたりの人に尋ねたるに、何國の者ともしらねど、人に雇はれて世を送るものにこそあらんさばかりにて、徳を語る人なし、或日去人の家に入て、終日咄し暮しける序に、彼男の噂仕出しつれば、其座に此男の分しりたる人ありて、こま／＼と語を聞に、毎日己が肩に替たるあたへに、酒を求めて呑より、いといさましげに歸が、あたへなき日は酒屋へも入ず、此分年へて吾よくしりて、淋しけに通る時は呼掛つ、盃を出せば、心の足程呑つ、明日の價をつくのふ、取ざれば捨置てかへる、何様かわつたる者氣をつけて見るに、そのささいやしからず、此ゆへにいかなる者かと問とも筋目をかたらず、住家を問ごもいはず、さもあれ不思議なるものよと言に、こゝろ床しく、重てかれに會なば家を見届、様子をも尋ねんとおもふに夜明ぬれば又彼男例のごとくに通りし、うれしく思ひて夕さりかいらん時を待て居けるに黄昏つぐる程に座歌して來りければ、呼入て兼ての擧げなご出し酒香といふに、辭して言、我けふ人の爲に肩借つ、其借を乞取て酒肴をと、のへ腹滿せり、充て喰ふは世の中の費也、手を拱て喰ふも又道にあらずとて、更に請ず、しばし世上の事など語て歸し是より不審さまして、跡より行つゝ見るに、はるか成道へて、纒なる小家のうちに入りしほどに、物のかぐれよりうかゝへ見れば、古き筵一二枚敷たる内に、竈に土鍋を掛て外には器物とても見へず家に入ると枕引よせ湛然として臥けり、我内にさし入て、萬の事なご問ども更にいかなる答も

なし、是非なく夫より立歸しが、道にむつまじく語る友達われは、かれの所に立よるに此人もむかしは富貴なるを世へしかど、今は替り果て其時とはこゝろのまゝならぬ様ながら、夫婦家人五七人にて寂寞として暮しぬ、是も天性隱徳あるこゝろざしの達士なれば、彼おこの様子今見て來し物語するに、あるじふかく威衷していざ明なば、酒肴を携へゆきて共にあそびて慰まんよとて、彼家に人つかはし明日他に雇はるる事なかれ、我く行てかたらんと言送に、おとこ答て我一日の糧は肩の外になし、家にありては何をか喰ん、若肩に用あらば行て肩かさんといふ、使聞て足下の肩に用あるあらず、けふは此所に来て酒肴あそばさんとの事也、男悦ばずして言、力を盡さずして樂みなす時は、かならず憂來る、是徳を破るもにして、たのしみにするにあらず、且又物と交るは隔つるのははじめたり、淡して、全のはじめにはあらず、又はじめわけなくてまじはりをむすぶは、彼交を絶もとなり、何ぞ我其人と遊ぶべき道なしとて、手馴たる鍛をうちかだけて出けるに、色く留てもとまらず、其後にかれが行衛をあなたこなたたつね聞に、そもく生國は尾州の者にもあらず、その先は何國より來るともしれず、日毎に片里をめぐりありきて、農家に雇れて其日を送る、もしまた貧家の野夫にやどはれし時は、その價をとらず、つねにまづしき人の耕作を助て富貴には近づかず、いかなる人やらん此むかしをおもひやられし、

三 富士郡の賢農

詠めづらしき、日本一の富士見る事と、大かたならぬ風景、吉原の茶屋にやすらひ、己をむすれてまもり居に、そのあるじ語は是より行道總にありて、ひたりのかたに田の畝有、爰をつたひてむかふに出れば、富士郡の内の田舎宿有、此里より見る景こそ、山の形もひとしほになをたへがたき詠めにありと言に、夫よりこゝろ付て尋ね求めて爰にいたれば、誠に聞しにたがはず、一村のかまへの農家ありける、岩に腰掛て杵の予けば、地靈にして寥亮、峰は白雪をかづひて稱虚清田子の浦浪、金毘を翹して、催る逸興樵夫哀歌をうたつて、樹猿を叫はしむ漁夫釣竿をふせて、水鳥を伴ふ此様、實に腸を断のおもひ、昔日赤人の詠せしもあれになつかしくて、分なる泪に袖をぬらして、彼はどりの寺に立寄見れば、獨の法師法華を修してありける田舎の人にことかはりて、物やさしげにこなたへ入よなんどさまぐもてなし浮世の咄佛世のむかしを語るにもきくことぐに殊勝さまされば、いかさま徳ある僧にてあるよと難有て此里の見し様なと思ひよるま、法師にむかひ、片田舎は人の心も奸く、又は貧家野夫も多くある物成に此所は民情も邪ならず、分て飢たる色さへ見えす、家もにぎはひゆたけく見へ待るは、足下此里に住せ給ひて御法の尊きをも説たまふゆへに、人心やはらぎ天の恵もあるにてあらんと語るに、住僧答て、われに徳なければ争でさる事侍らん、しかれども此所は獨り

の奇異の男有て、いかなる事の業をまねびて、實は牛飼 童 薪かづく女迄も、脇の里よりも賢き様見へ待ると言に、扱其人はいかなる事を常に業かと思はば、僧答てさしも人に異なる事はなければと、其身世々に貧しからずして、人をも多くつかへは待るに、いまだ家人のうらむる事を聞ず、家内にあらそひをなす事なく、上下和してへだつるなし、此おとこよのつねの物いはす、朝ごとく起て従者に先立て畑を打田をかへして、身を安くおかす、所の者諫て手足自らかく勞したまはぬとも、多くの人の持給へは、事成行なん、只牀を休めてゐたまへと言に、男の言吾自然の幸を以、かく富貴の身となるとて、人に勞をゆづり、吾遊興して世を渡らんや、天の責を思へは遊ぶ時は心つかれ、身をつかへば心ゆたけし、是故に外を捨内を樂む、又吾にしたがうものなればとて、かれを勞さしめ、已を誇りてあらんや迎、物をなすにも難き所をなし、食をなすにも人におくる、貧者飢れば施し、買たらねば補ふ常に吾爲の奢をなさず、儉約にして身を慎む、此ゆへに自然と村賑ひ、民心もすなは也、と語に、聞より至人かなと思ひて、彼家を尋ね行ばき、しにも似ず、わづかなる體に野つら石なんどかき揚て、其上に篠竹の組垣さしもあさましき内に、四十餘の男の親の木像を拜し居る、婦は茶を汲て庭の奴にあたへ善をなす様なりし、吾彼人にいふ今聞に足下の仁性近隣の境に溢たり、譽あるものに賤あり、譽におれば身を勞す、功成て身退とは此謂也此心を知也、男答て言我もと功なし、善をしらす名もしらす、我なす所はつねたり、成事に譽を求す、なす名をもとめず、成に利を求す、此ゆへに機を勞せず、

心を愁す、神をいためず、只平日自然にまかす言に、面々はゆくて立歸りし、

四 目籠の翁

次第に武藏路に近づくに、昨日箱根の難所をこへつ、長途のつかれに取添て、今宵は此町に宿り、明日は一日逗留して足を休めて居けるに、獨の老人小鯛といふ魚を荷ひ賣ありしが、餘所の魚を皆人にくれて歸りし、いかさま替たる者とおもふに、心床しく彼宿を慕ひ見置て、明日の日彼者の家のほとりにやごしてよく其境界もうかがはんと思はば、先にも行ず是より跡に見し、唐作りの寺に參詣て、和尚に謁し退て問、いかなるか西來意、答て已性を悟りて見よと計、其後は尋べき力もなくして、御法のふかき道など問つ、肝をかたぶけ、實をおこし身の愚なる事憂ふるうち、早陽影溪に下り、瀧の流れ春は、夫より門下去つ、彼見置し家近ふやごして、心を付て待侍るに、くだんの卑夫目籠かげて歸るが、昨日のごとく又餘れる所を他にくばりぬ、我宿のあるとを呼て、何ゆへにあの男、商ふ魚を人にあたへくばるやと問、あるじの答へて語る、此者こそ常々儲くる分限を極め重て賣といふ事なし、其日は一日夫婦ともに遊びて暮しぬ、扱あした成と是より遙の濱邊に出て、魚買て來る婦は一日の人仕事取て是を業とし、其價をとりて酒に替て夫を待、夫歸れば二人頭かだぶけて飲ぬ、朝夕の饗とてもいやしき麥の飯などに暮す、隣家親しけれども一生米錢を借す、人また用をいへば衣も替

てもあたま、おかしき男と語るに奥深くおもひて、其卑夫の冢に行て見れば、古き衾紙の衣より外はなし、喫茶に勞を忘れたる様して、油火幽にかゝけて居けり、此たのしげなる體に床しさ彌増、我も茶などを乞請、しはし語りて其志を問に、男いふ別に何の心ざしもあらねど、長て以來物とあらそふ事しらず、人を恨むる事をしらず、人をこらかす事をしらず、財を求むる事をしらず、富貴に近づく事をしらず、命の惜き事をしらず、死の來る事をしらず、貧をはづる事をしらず、一世の利をもしらず、然れども分を知て分をたのしむ物也、我おろかにして人たる者の樂みをする事をしらすとはなけれど、自然の道を思へば、我をも恨みず、天をもうらみず、只春夏秋冬に相當る魚鳥を、日毎に商て暮す、いまだ一日も飢る事なし、是天道のあたへとうれしく、自然と商所の餘慶を種として今日迄はくるしむ事なしと語るに、又問自然の餘慶をもつて糧となさば賣餘所の物を何ゆへ人に施すやといへば、おどこ笑つてけふの身天是を生す、しかれば生る所の身をもつて食を求む、明日また天より身となす事しらず、今日糧足ぬれば、足ざる人の爲に施す、たらざる人をはうへさせて、たりぬる吾にたくはへんやと言一生徳をつゝしみ、ふかく隠れて人に見しらぬば、むなしくやがて朽果ぬらんと計、

五 筆築道心

志す所は爰の事にてこそと、品川に入つゝ見れば、行かふ車馬駁をあらそひ、九家者流の人立騒ぐ、勇々けなる様言ばかりなし、其日は一日知人の宿たづねつゝ、漸求め出して、舊里舊友の物語に、夜明し日暮して、それより此野の葉末をわけて、あなたこなたとするすに、永代島のはどりを通りしに筆築の聲幽に聞へければ、立とゞまりて見るに、いまだ三十を過ぬ程の法師の悠々として、調子の妙を樂むにありし、庵中を見れば御室焼の茶釜の、さゝやかなる鍋ひとつの外は、朝夕の饗する物さへ見へず、棚には莊老の二書、机に口よせの香爐、むかふに朱衣の達摩、かくてはいかに住託侍るやと、あやしき道に思はれ、なをかれが調子を聞居けるに、其曲まことに感憂ありて、愁喜ともに忘れて、虚然として立しに、はや夕陽山陰に移り、鳥罫をたづねければ、かへらん道の遠きをおもはれ、立さらんとしけるに、彼法師我たもとをひかへて、行ん道野邊の露もふかゝりなむ、殊に夜行の恐も多し、さして用ゆる身にもあらずば今宵は草庵に明して、明日歸りたまへかしと言にうれしくて其夜はそこに留り、終夜を語り明に、法師の言は、世の中の何に付ても、皆夢現の儘今語も中々ことかましけれど、我もはじめは富貴の家に生れて、貧といふ事をしらす日夜遊宴にとみて、慰め業をことごとくし同じ心したる友と傾肆に入れ明し、小歌舞曲の小章とたはむれて暮しぬ、ある時は年比相馴し、淫婦と枕をならべし夜、世の中よろづ心にまかせぬ事を語出して、是におとろきつゝ、朝露のしげみが末をわけて歸るに、夕傾婦の語りし事とも、是世上の習ひなるよと觀すれば、願ひ滿おもひのままなる

うへに樂みと成ても、いまだたのしにはあらず、かくおもふより世の外なる樂みあらんと思惟し、風とおもひ付し事の侍れば其日に家財悉く分て、家の一門親しくかたる友に心當して、書置細くと調へ自愛根の髻を切捨、此筆簪を抱て何國ともしらす出つつ、二とせあまり行脚せしに、見殘す所もなく今爰に來りて、此たのしみをなしぬ、はかるべき智のなければ人の善惡をしらず願ひなければ愁なし、一門親しきよりわづかの助を請す、へつらはす、恐れず驚かず朝夕の烟糧のあるにまかすると語りし、

近代艶隱者卷之四終

近代艶隱者卷之五

一 菊の翁

武藏のかたはひに、しはしは留り居りつつ、めづらしき西國行脚の物語して、人を慰んとかく書捨るもはかなや、むかし筑紫に結ひし草庵も心に染まねば、柴門の斜日に爰を任捨て都のかたを心ざし行に、ひれふる山を詠めても 忘姫の哀を心にうつし、王鳥の水の鏡に跡立消ん事を名殘、絶す流るる思川に他なる世上を笑つて過れば、はや筑前の鐘か御崎漕越、生の松原にかかるに、其間一里に過、雲玄妙に磯砂明なり、兩岸苔蘚緑々として胡摩の清風眼を打、遠帆の魚舟沙鷗の飛かどうたかふに、青島の海原ちかく、那古の賤屋も寥然なる頃、鹿の音送る風にまかせて、箱崎の浦を見掛、袖の湊に草鞋をとひれば、其日は彼邊の野家に明して、あした日闌て起るに、隣の裏に女の聲して、今年は鷺毛も生よし御愛醉楊妃もそたちもよし、天野原玉の出来も大形なりし、そこ根まはせよ、此目をかけと言にいかなる事やらんと垣越にさしのすけば五十ばかりの姫のひとりの娘つれて、齒なる菊を愛するにて有し、其様よく見るに、其種々の名分したる上にひとつ覆の具して、少女は團扇を持て葉未なる菊虫を拂ひて居けり、良久しくありて鬢白糸をなし形三輪組なる翁の己か仕業の農作をしてかへると見へしが、かた脇に鑄鍛おろし、けふの便もなしけるよ迎、彼菊島に出れば、姫手を引女

女は腰をおして苗を見せまはるに、翁たのしげに枝の露を拂ひ根の虫をせせりて、しばし片脇なる床机にありて夫婦ささやかに物語してあるに、娘はうちに入ておかしげ成鈴の徳利に、盃添て持出しを、翁引請て吞より姫の前にさし置て、いとおもしろげなる聲して、死て金を北斗につむよりは、手前の一樽にはと笑つて眠し、是を見るに其境界浦山敷、こなたより名を問とも謂ず、夫より宿のあるじに尋れども、菊好事さへしらぬと答は、答ける、餘の不思議におもひて、垣をくゞりつゝ、行て翁に謁し、いかなる徳士の世にかれて、かく市中の至隠と成たまふ間に、翁歸り見て忍笑て、至隠は賢にこそあれ、我何の賢かあらんと斗に、さしていらへもせねば、問べき言葉もなくて、又の朝垣より見れば、翁と共に三人うらに出しが、缺残す芭夏まきの菜など引て、あしたの饗する様なりし、しばらく有て翁は拐に肩かして出けり、けふこそかへらんを待て、是非に其意をも聞なんと思ふに、見しにたがはず、菊愛して遊びし、我袖垣を越、翁にむかひさるにても床しや、御有様を見たて奉るに、歎樂自然にして、中々見るもたのしくこそ待れ、御心の中をも語りたまひ吾學びにもなさせたまと言へば、翁さし仰のいて我若かりし程は、友達のかなしき事を見侍りし、彼者三が津をかけめぐり家業おこたらず、元見しよりは次第に富貴の身と成、後は家をも求めて有し、夫より財寶日々にさなり、年々さまさりて利増事大かたならず、終に津々浦々をめぐれど、遊女歌舞の里にも入らず、毒藥を恐るゝことくにして遠ざかり、剩四十にいたらずは妻も持て迎、獨身のおさめて居けるが、日夜に只利欲の事

のみ思惟し、朝夕食にも飽なる喰ひ、身を苦しめ心を勞して、貪婪はしひままにせしが、心つかれ氣はおとろへて癆病を憂終には若死してありしが、其の比かれが語りし友皆うち寄て、はかなき仕業や一生かく勞しても、財を讓べき子孫もなし、皆他人の物とはなして、樂みもしらで死しよ、人の非を見て已をしるこそ、學びのひとつにてあれ迎、とりくのおもひ入なりしか、其中に獨異人ありて、深く山中に籠り閑居の身となりて有ける、是は人家をはるかにへたしゆへに、一年狼獸のあれし時に、かれが爲めくらはれて死し、かれは心養ふ爲に命をうしなひ、前の男は外をかまぬ迎命をうしなふ、是よりして我境界を觀して今爰にとかたりぬ、

二 網すきの翁

なを一日も歩行を留されは、小倉の渡しを越て、下の關を立こし行に、日をへて長門の萩につきしに、やうく暮におよび一夜の宿をたづぬる比、五十餘の男、吾をとめまいらせんと言て宅にともなひ歸る、内に入て見ればさしも、いやしからず作りたる亭に子昂か馬繪、目馴ぬ花入のよそおひ、脇には禪板禪單も見へたり、庭にはなたまめのおかしげなる垣にまとひ、めうかの若はへ路のさかんなるはやしなごありて、寥々に勝手には四十あまりの女の、ゆへある様しながら漁夫のいとなむ網すいてありしが、彼男奥に入つつ、今宵は客儲しず、饗應せよないへば、女房自、飯炊ねんごろにいと

み飢を助けさせ湯なんと取てつかれをぬやさせ、さま／＼いたはりければ、いと心有人かなやと感じて、夫よりは互にうちとけて、それかれ物語し、深更になれば四隣しづかに人しづまって、邊寂寥我あるじに間は、むかしはいやしからぬ世渡らひと見奉りしに、何とて奴、婢、もなく、かく自身の稼する身とは成たまふかと問に、あるじ女房こたへて、今のたまひしごとく妾も過つる程は、人の頭ともよばれ、財産にもとはしからず暮せしに、此十年まあり前に爰なる人の甥に、器量人に勝れ、形もやさしく生れつきたる、美童ありしに隣國の太守御目に入て、是非にめしつかはんなど仰せて、身にもあまる程の祿たまはり、日は終日御側に候じ、夜は寢所に寵せられて中／＼日月の光さへ見ざる程なればかれがこころにおもひもし、言もし、する事毎に叶はざるはなし、又かれの弟も長なるに及び、兄の美質にもまさり、才能もよのつねならず、さもゆたけそたちし程に、是も隣國の守につかへて、慈愛外にすぐれければ、かれか威勢に一門誇り、吾等夫婦もなを富貴をましつづ、偏に飛龍に天にあるがごとし然に五年跡の春、彼兄なる者男となつて後には國の掟する程になりし、誠に世のならはしかな、下さまより妬いかりて、かれが罪さへ國主の御覺たかへとぞ寵しに、身ゆへに主人の御名を汚す事我又朋友に疎せられしを愧しにか、其年の中程洞家の禪室に入、書置こま／＼と調べ、自切腹して死し、その弟も此とし月彼太守の前はなれず、勤居しに嘆を得ては失はん事を愁、寵をうしなふても愁ふる先言こころに染込、かなしさをさると計書捨、ひそかに主君のもとを出て、黄檗山に

吹込、髮剃こぼちて何處もしらず、道心執行となりしが、むざんや數年近所の宮づかへに、心氣のつかれ果たるゆへにや、むなしく死て、はや是も三年のけふに當れりとて泪襟を霑すに我さへ哀をまして聞に、おとこも共にうれへ貌にて思にて眠みたるが目をひらひて言、今のあの者語るごとく、世の中萬の事を思ひまはせははかなく、善惡の境をはなれんにしかしど、かくのごとくの身と成果、世上の害をまぬかれければ、今おもふに人のうへだにも淺ましく、ありさまを見るに自伐ものは功なく、功なるものは懸、名のある者は虧と悟得て、此洵民の中にしおのれをくまましてむかしの帛を襦にかへ、何か富貴をたのしみに替たりと笑ふに、此心ざしさりとはおもしろく、其夜もすがら語り明しけるに、ともし火もかぎりありて消ぬ、何をか身にまく夜の衣もなし、されどもあるじの身の取置に、くらからずさむからずして程なく曙に、爰を立別れつるに、きのふ迄見し落葉の薪も絶て、更に煙立べき風情もなく、きさんとなる草の戸をあけて旅の名残のさらばといへど、亭主は名残を惜むけしきにもあらず、

三 渡し船の老人

既にけふは安藝の廣島に出しに、筑紫中國にはいふも稀なる町並人の風俗も、いやしからぬは爰に少しばし足をこめて所の舊跡または寺社なども拜しめぐりて、東の川はたに付つゝ、行に船よする湊に人

呼ぶをきけば嚴島への乗場はこゝよりと言に、扱は明神への海路にてあるよと、舟長に便をもらひて、彼島につきぬ、まことに其佳景靈々として、並松の群立もおごろく、里の小鹿の鬣さへに淋し、神前ちかふ歩行程、こゝろも清くといさきよきに、漫くたる夕干潟はるかに有て、磯絶の普通に遠ざかる浪の上を見れば、景旻天に霽ててるゆふ虹のこどく燿廻樓雲に續ひて、冥迷たるに、百八の籠砌にめぐつて、只蒼海を焼かとうたがふ、瑞籬のうちにさし入れは金を鏤めて、珠玉の彩る、寶前を見るに驚聞にまざりて、己を忘れ儻々として、徒倚に威靈影のこどく響のこどく、不測の神徳眼前に分明たり頭をめぐらせば須彌の頂き嵯峨とそばたち、松桂に深ふして岨あらく、峻嶺修竹しげりあへり、のぼり見れば磐石堆く、瀑流溪に張り、老大の木天聳する中に雲を帯たれば、自と鳥の聲ふひかとおやしく、俯て詠れは釣する小船の幽にかへり、里の柴かり帆風にまかす、遊賓酒を携へ、騷客に添る、その眺望中く目を悦はすにたへたり、なほ濱邊をつたひ行見るに大師の筆の額、其外古人古賢の詩文、言葉を絶し書に断たり、是よりまた神前に詣で心靜に拜し奉つりて、直に城下にかへらん逆岸のうへに立ぬしに、むかうよりさはやかなりし男どもの、こゝろの中に色ありげなる様して來れば、跡よりまた遊女のあでやかなるがあまた送り、またあふ迄の名残をおしみかへるに淫肆のあまる敷女房まで出て彼をどこをかしづき、のする様いとゆゆしげにおかし、我も此舟に打乗は船人繩を解て出すに、あとも次第に遠くなり、はや浪間一里も漕過るんと思時、舟長櫓の手せはしくおもしろけにうたつて、

人の物語りさへきかず、異様成躰なりければ、彼男も聲を揃へていふは、今見るに船人程世にかなしきはなし、晝夜風雨の境をいはず、雷霆暴温にも海上をわたり、死をしらず生をくるしむは是よりかれを見れば、たのしむ事はあらしと思ふに、いか成にやと笑へば、船頭さして吁かなしの足下の心や從者にかしづかれ美味珍膳にあき、遊興に長じ酒に酔をすゝめて、なき色里にたはれたまへど、其餘の日は憂多からん、たのしみ給ふ所あるも、我と足下と日をいへば一日をかへ、時をいへば一時をかへたりけふの樂は明日の樂にあらず、先のたのしみは今の樂みにあらず愁ふる所もまた同じ、しかある時は何をか願ひ、なにをか悪まん、我つねにたのしむ朝は世を渡るのみ、ふね入をも忘れ、出るをもわすれする、爰をもつて天を見れば、はじまる所をしらす、終るところをしらすといふに皆口を閉て眠りし、

四 輛の兄弟

時雨もわけて淋しく雲霏木の葉散て天籟峰の景を殺に、けふは又備後の輛につきて、爰かしこと見ありく内、野末の寂然たる寺に至りし、立とまりて見るに本尊なんとも物古、つねよりはたうとげなるに、庭には雪にうごき蕉の葉蔦かづらなど四隣を掩ひ、岩に苦むし石碑崩れて、一木の松はおのれそだちなりぬ、寺の名を問はむかし平氏の派流小松三位の建られしよと言に、猶更感慨をおこして、其

名斗は現に、其人はいつの世のいつのむかしかと思ふにさへはかなの數添、しばし草鞋をとどつて立居たるに香方丈を隔て、つとめする壁の響木魚のきこへければ、いか成人の世をおもひ取て、無常迅速に心を付已本覺の心主を清むるやらんと物床しく其所を行に、線香にすけたる圓窓あり、是より内をさしのぞき見るに年の程五十斗の僧の髪うちかふり、爪長なるが禪單を出て、誦經するにてありける、見るも殊勝なりしに敬を主宰してかた脇に座すればはや、御經も終りて、又禪に入給ふを三拜して、猶菴中にあるにけふの日も黃昏告る鳥の聲、行べきかたも思儲ねは、此所にしはし足も休めんと和尚に説て、臥に哀猿岨に叫ひ梟樹下に音する比しも生垣のあなたに男女の聲してさゝやかに物言あり、いといぶかしく耳を属てきくに、親の免さゝりし縁を約して、人目の關をうらみ物おもひする人の適相遇にてありけり、其物語いとあさまし、世のうき様すきこしむかし後世の契の事返むつましけに泣つ笑つする中、此世にてこそ永々契もかさね、老衰ともになしてんと思ふはよしなや、のがれぬ因果の化名ゆるさぬにこそ、人物に語も我身のうへよと心に愧れば外又隠するに使なし、父母の色あい見にくきさへ、もしや身のうへにてかなんど、胸うもれ思くるしく、かく思ふよりしてけふ迄の憂其數いかにかぞへん、其もと問は皆生と鉢との有ゆへぞかしいざ此生を替て他生を契らんよと、念比に語とおもへば啞といふ聲きこいて其後は物音もなかりし、我不審におもひて、朝のくらきより扇を明て見れば、いと艶にうるはしき男女の、いまた甘はかなるが二人、草に臥たり、比よし寺守僧に

云はむなしき人の知よしの有方へ人を走に彼親しきもの集り來りてかなしむ有様見れば、更にいふばかりなし、とかふし二人を塚につき籠し、夫より人沙汰に毎夜此死人どもの來りてなげきかなしむ連、夜に入れば此あたりに来る人なし、或月詠めすくし、星まれなるに五十あまりの翁、時ならぬ花のやさしげなるを手折て、忽然として來る何國の人かと問に、此寺の檀方關町の者と答ふはらく其様を見るに算仁大度にして常の人にあらず、我彼人に問、此程當寺の裏に、妖怪ありとて來人すくなししかるに何のおそれもなく、爰にぞといへば翁にたへて我さくに人間の有様夢見るうちは夢を惜むと、なんぞ爰にかへらん、覺ての後のあたなるをしるがごとし、彼夫婦夢をさませり、又生を替ては二人が中の愁とけ和する事大かたならず上に恐る人もなく下憚る人もなく、寒温の境しらねば、衣服の望も絶、財寶に心もなし、天上のたしきもこへ、仁皇の遊にもこへたり、かかる樂を捨て今爰にまよひ出る事あらんや、ここをしれば、おそる事なしと笑ふ、おかしき人かなと心床しくて明の日かれ家にたづねて行て見るに、市中に家業いやしげなるあたり、物淋しげに住なしたり、内に入て見れば、家のうらには種々の草花、折々の様したるをうへて其脇に机床をかざりて、二人の男酒を香水魚のおもひをなしてありし、我其邊ちかくよりければ夕の翁見付て席にすすめて語る、いまひとりとはと問に我弟なりと答ふ、是も鉢ゆたけく、兄に替る人にはあらず、しはし語りて其所を去て他の人に此者を聞に、兄弟常に恨みけなる色なし、兄は浦の業をなす事に糧をもとめ弟は諸國の船客を請て世わた

りとなす、しかれども一毛も利欲なし、若客し商賣に利を得てかれにあたへければ兄弟酒に暮し或は僧に施に引、いまだ人に一錢の邪をなさず餘慶あれば一日も手におかずして數寄なる草花躑躅やうの物を氷めて、是に心をつつし折ふしは、小松禪寺の廣場にも來て、手づからに植置、我死て葉すゑなる露を詠めん、と、笑ひて是を愛したまへりすこし家業の間を得てはたのしみ自身を勞して、人の勞を拂ふ、まためずらしき男と、不斷事とも迄語るに、深くかんじて立歸り見れば門口のしるしに升屋とかや、姪表ありし、

五 備前の水汲

是より船に便して備前の岡山に志し、折ふし順風、快くて、備中の沖をはせ過れば、いそのかみ名につき飛鳥井の臣の扇残して哀をとめし所よと聞に、むかし戀しく反呼舟人に物の淋しさもまさりて、杳にゆけば、風景都わする、讀し、虫明の追門はあれならんといと、心も忍ひがたきに、唐琴の泊に舟よすれば、浪間に音のみかよふと聞しもわすれて、あやしき妙なる曲に我國ならぬ異州來て、湘妃の怨曲をきくかどあやしく大島の曙はれて、沙鷗の噪く翅に夢を覺しつゝ、三里の川口を漕入或寺にしるよしあれば、此所に又とまりしに年の程四十あまりの男の桶に柄杓を添、拐に肩を瘦さし、水荷て賣歩くいかなる者かと道通人に問は、かれは此三とせ巳前迄纒の宮づかへてありしに主人は太

守の命に違てむなく成給ひしが、子孫さへに絶ぬれば身に親しき一門連も跡吊ふ葉さへなさず、骸骨はなしく野逕に捨物かなしき死、かれの跡いたはしくおもふに、朝夕かかる事して己飢ながら石碑立べき望ありしとかや、はやく其塚を念比にいとなみしともいへり、今汲水こそ寺にみわざすべき使を求むるにやあらんと語り捨て通に、其人の心を感じ聞に尊く重て水汲人に逢ば、心の奥もたづねんと志てやどに歸るに其夜は明て朝とく件の男又水荷て來るを、しばし呼入て常の物語り等して後、さのふ足下の噂を聞に亡君の爲にかく身をやつし、追善の御業などいとなみ給ふとかや此事聞より其意の難有、覺てけふもまみへ奉るがかし我おもふ所は今少身に安く、躰もゆたかにて、主君の跡をも吊ひ給はん事もあるべきにかく迄やつれ疲たる下職、いかなる心やと問は男答て左おもひ給ふも理りあれど、身躰苦をなさざれば、後をわづらはす、後をわづらはねは、氣を養、氣を養は心靜なる初めなり水を見れば靜なるの極りなり、靜なるゆへに物影をうつす、人も又靜なるは物の鏡たり、傳聞虛靜恬淡寂寞無爲は萬物の本なりと故に水を汲て靜なる物の鏡たり傳聞わつらひを遠、心身全して恩を報はんとおもふ所有然れどもいまだ成と言事をしらす猶こまかしく尋ねんとすれば、國の守に召あつて祿給はるとさざめき、彼男をつれ行し後に聞に士官となつて忠節をつくすとかや、

貞享三丙歲 孟春良辰

近代艶隠者卷之五終

好智五人女

好色五人女

好色五人女 (貞享三年板)

卷之一

- 一 戀は闇夜を晝の國
室津にかくれなき男有
- 二 くけ帯よりあらはるゝ文
姫路に都まさりの女有
- 三 太鼓に寄獅子舞
はや業は小袖幕の中に有
- 四 狀箱は宿に置て來た男
心あての世帯大きな違ひ有
- 五 命のうちの七百兩のかね
世にはやり歌聞けば哀有

卷之二

- 一 戀に泣輪の井戸替

好色五人女 卷之一 卷之二

あいに釣瓶もおもひに亂るゝ繩有

二 踊はくづれ桶夜更て化物

人はおそろしや蓋して見せぬ心有

三 京の水もらさぬ中忍て合釘

目印の錐紙に書付て有

四 こけらは胸の焼付新世帯

心正直の細工人天満に有

五 木屑の杉楊枝一寸先の命

りんぎに逆目をやる杉有

卷之三

一 姿の關守

京の四條はいきた花見有

二 枕の夢

灸すゆるよりおもひに燃有

三 人をはめたる湖

死にもせぬ形見の衣装有

四 小判しらぬ休み茶屋

都に見し土人形有

五 身のうへの立聞

夜の編笠仔細もの有

卷之四

一 大節季はおもひの鬮

かり着の袖に二ツ紋有

二 虫出し神鳴もふんごしかきたる君様

化物おそれぬ新發意有

三 雪の夜の情宿

戀の道しる似せ商人有

四 世に見をさめの櫻

惜やすがたのちる人有

五 様子あつての俄坊主

前髪は又花の風より哀有

卷之五

- 一 つれ吹の笛竹息のあはれや
さつまにかくれなき當世男有
- 二 もろきは命の鳥さし
床はむかしと成若衆有
- 三 衆道は兩の手に散花
中剃はいたづら女有
- 四 情はあちらこちらのちがひ
同じ色ながら緋縮緬のふたの物有
- 五 金銀をたまつてめいわく
三百八十鎰あづかる男

好色五人女卷之一

●戀は闇、夜を晝の國

春の海しづかに、寶船の浪枕、室津はにぎはへる大湊なり、爰に酒つくれる商人に和泉清左衛門と云ふあり、家榮えて萬づに不足なし、しかも男子に清十郎とて、自然と生れつきてむかし男をうつし繪にも増り、其さまうるはしく、女の好きぬる風俗、十四の秋より色道に身をなし、此の津の遊女八十七人有りしを、いづれかあはざるはなし、誓紙千束につもり、爪は手箱に餘り、切らせし黒髪は大綱になはせける、是には格氣深き女もつながるべし、毎日の届け文ひとつの山をなし、紋付の送り小袖其まゝにかさね捨し、三途川の姥も是みたらば慾をはなれ、高麗橋の古手屋のねうち成まじ、浮世藏と戸前に書付てつめ置きける、此たわけいつの世にあがりを請くべし、追付勘當帳に付けてしまふべしと見る人は是をなげきしに、やめがたきは此のみち、そのころはみな川といへる女郎に相馴、大かたならず命にかけて、人のそしり世の取沙汰なんともおもはず、月夜に提燈を畫ともさせ、座敷の建具さし籠め、晝のない國をしてあそぶ所に、清十郎親仁腹立かさなり此宿にたづね入、思ひもよらぬ俄風、荷をのける間もなければ、是で焼とまります程にゆるし給へど、さま／＼説ても聞かず、鬼角はすぐにいづかたへもお暇申して、さらばとてかへられける、みな川を始め女郎泣出してわけもなふなり

ける、太鼓持の中に闇の夜の治助と云ふもの少しもおごろかず、男は裸百貫たとへてらしても世はわたる清十郎様せき給ふなといふ、此中にもをかしく是を肴にして、又酒を呑掛けせめてはうきをわすれける、はや揚屋にはげんを見せて手叩ても返事せず、吸物の出時淋敷、茶喫もといへば兩の手に天目二ツ、かへりさまに油火の灯心を滅してゆく、女郎それへに呼びたつる、さてもく替るは色宿のならひ、人の情は一步小判あるうちなり、みな川が身にしてはかなしく、ひとり跡に残り涙に沈みければ、清十郎も口惜しきとばかり言葉も命はすつるにきわめしが、此女の同じ道にといふべき事もかなしく、とやかに物思ふうちに、みな川色を見すまし、かた様は身を捨給はん御氣色、去逆はくおろかなり、我身事もともに申たき事なれ共、いかにしても世に名残あり、勤はそれへに替る心なれば、何事も昔々是迄と立行、さりとはおもはく違ひ、清十郎も我を折りて、いかに傾城なればとて今迄のよしみを捨て、淺ましき心底、かくは有まじき事ぞと、涙をこぼし立出る所へ、みな川白装束してかけ込、清十郎にしがみつき、死なすにいくへ行給ふぞ、さあく今じやと剃刀一對出しける、清十郎又さしあたり是はと悦ぶ時、皆々出合兩方へ引わけ、皆川は親かたの許へ連かへれば、清十郎は人々取まきて内への御詫言種にもと、旦那寺の永興院へおくりといけゝる、其年は十九、出家の望哀にこそ。

●くけ帯よりあらはるゝ文

やれ今の事じやは、外科に氣付よと立さはぐ程に、何事ぞといへば皆川じがいと皆々なげきぬ、まだどうぞといふうちに脈があがることや、さても是非なき世や、十日あまり此事とかくせば、清十郎死おくれてつれなき人の命、母人の申こされし一言に、をしからぬ身をながらへ、永興院をしのび出、同國姫路によしみあればひそかに立のき、爰にたづねゆきしに、むかしを思ひ出であしくはあたらす、日數ふりけるうちに但馬屋九右衛門といへるかたに、見世をまかする手代をたづねられしに、後々はよろしき事にもと頼みにせし宿の肝煎られ、はじめ奉公の身とは成ける、人たるもの、そだちいやしからず、こゝろざしやさしくすぐれてかしく、人の氣に入るべき風俗なり、殊に女の好る男より、つとなく身を捨て、戀にあきはて、明くれ律義にかまへ勤けるほどに、亭主も萬事をまかせ、金銀のたまるをうれしく、清十郎をすへく頼みにせしに、九右衛門妹におなつといへる有りける、其年十六迄男の色好ていまに定る縁もなし、されば此女田舎にはいかにして、都にも素人女には見たる事なし、此まへ島原に、上羽の蝶を紋所に付し太夫有りしが、それに見増程なる美形と京の人の語ける、ひとつといふ迄もなし、是になぞらへて思ふべし、情の程もさぞあるべし、或時、清十郎龍門の不斷帯、中るのかめといへる女にたのみて、此幅の廣きをうたてし、よき程にくけなほして頼みしに、

そこ／＼にほごきければ、昔の文名残りありて取亂し讀つゞけゝるに、紙數十四五枚有しに、宛名皆滑
さまとありて、うら書は違ひて、花鳥、うきふね、小太夫、明石、卯の葉、筑前、千壽、長州、市之
丞、こよし、松山、小右衛門、出羽、みよし、みな／＼室君の名ぞかし、いづれを見ても皆女郎のか
たよりふかくなづみて、氣のはこび、命をどられ、勤のつやらしき事はなくて、誠をこめし筆のあゆ
み、是なれば傾城とてもにくからぬものぞかし、又此男の身にしては、浮世ぐるひせし甲斐こそあれ、
さて内證にしこなしのよき事もありや、女のあまねくおもひつくこそゆかしけれと、いつとなくおな
つ清十郎に思ひつき、それより明暮心をつくし、魂身のうちをはなれ、清十郎が懐に入て、我は現
物いふごとく、春の花を闇となし、秋の月を晝となし、雪の曙も白くは見えず、夕ざれの時鳥も耳に
入らず、盆も正月もわきまへず、後は我を覺えずして、耻しさは目よりあらはれ、いたづらは言葉にし
れ、世になき事にもあらねば、此首尾何とぞと、つきづきの女も哀れにいたましく思ふうちにも、銘
々に清十郎を戀託、お物師は針にて血をしぼり、心の程を書き遣しける、中居は人頼みして男の手
て文を調へ袂になげ込、腰元は、こばでも苦しからざりき茶を見世にはこび、抱姥は若子さまに事よ
せて近寄、お子を清十郎にいだかせ、膝へ小便しかけさせ、こなたも追付あやかり給へ、私もうつく
しき子を産でから、お家へ姨に出ました、其男は役に立ずにて、今は肥後の熊本に行て奉公せしとや、
世帯やぶる時分、暇の状は取て、おく男なしやに、眞にをれば生付こそ横ぶとれ、口ちひさく髪も

少しはちいみしにと、したゝるき獨言いふこそをかしけれ、下女は又それ／＼に、金じやくし片手に
目黒のせんは羨を盛る時、骨かしらを泣りて、清十郎にと氣をつくるもうたてし、あなたこなたの心
入、清十郎身にしては嬉しかなしく、内かたの勤は外になりて、諸分の返事に際なく、後には是もう
たてくと、夢に目を明く風情なるに、なほおなつ便を求めてかす／＼のかよはせ文、清十郎ももやも
やとなりて、御心にはしたがひながら、人めせはしき宿なれば、うまい事は成がたく、しんいを互に
燃し、兩方戀にせめられ、次第やせにあたら姿の替り行く、月日のうちこそ是非もなく、やう／＼聲
を聞あひけるをたのしみに、命は物種、此戀草のいつぞはなびきあへる事もと、心の通ひちに、兄嫁
の鬨を据ゑ、毎夜の事を油断なく、中戸をさし、火用心めしあはせの車の音、神鳴よりはおそろし、

●太鼓による獅子舞

尾上の櫻咲て人の妻のやうす自慢、色ある娘は母の親ひけらかして、花は見ずに見られに行くは、今
の世の人心なり、兎角女は化物、姫路の於佐賀部狐も、かへつて眉毛よまるべし、但馬屋の一家春の
野あそびとて女中駕籠つらせて、跡より清十郎萬の見集に遣しける、高砂曾根の松も若緑立て、砂
濱の氣色又有まじき詠ぞかし、里の童子さらへ手毎に落葉かきのけ、松露の春子を取るなど、すみれ
つばなをぬきしやそれめづらしく、我もとり／＼の若草すこしうすかりき、所に花筵、毛氈しかせて、

海原静に夕日紅、人々の袖をあらそひ、外の花見衆も藤山吹はなんともおもはず、是なる小袖幕の内
 ゆかしく、覗遅れて歸らん事を忘れ、樽の口を明けて酔へば人間のたのしみ、萬事なげやりて此女中
 を、けふの肴とてたんどうれしがりぬ、こなたには女酒盛、男とては清十郎ばかり、下々天目吞に思
 ひ出申て、夢を胡蝶にまけず、廣野を我物にして息杖ながくたのしみ、前後しらす有りける、其折か
 ら人むら立ちて、曲太鼓大神樂の來り、おのくのあそび所を見掛、獅子がしらの身ぶり、扱もく
 仕くみて、皆々立ちて寄りて、女は物見だかくて、只何事もわすれ、ひたもの所望々々をやむ事を
 をしみけり、此獅子舞もひとつ所をさらず、美曲の有程はつくしける、おなつは見ずして獨幕に残り
 て、生齒のいたむなごすこしなやむ風情に、袖枕取亂して、帯はしやらほごけを其まゝに、あまたの
 ぬぎ替小袖をつかみかさねたる物蔭に、うつゝなき空野心に、清十郎おなつばかり残りおはしけ
 るにこゝろを付、松むらゝとしげき後道よりまはりければ、おなつまねきて、物もいはす此獅子舞、
 清十郎幕の中より出しを吞みて、かんじんのおもしろい半にてやめけるを、見物興覺て、残り多き事、
 山々に霞ふかく夕日かたぶけば、萬を仕舞て姫路にかへる、清十郎跡にさがりて獅子舞の役人に、け
 ふはお影くといへるを聞けば、此大神樂は作り物にして、手くだの爲に出しけるとはかしこき神もし
 らせ給ふまじ、ましてやはしり智恵なる兄嫁なんどか何としてしるべし、

● 状箱は宿に置いて來た男

乗りかゝつたる舟なれば、しかまづより暮をいそぎ、清十郎おなつを盗み出し上方へのぼりて、年浪
 の日敷を立うき世帯も、ふたり住ならばとおもひ立ち取あへずもかり衣、濱びさしの曲なる所に船待
 をして、思ひくの旅用意、伊勢參宮の人も有、大坂の小道具うり、ならの具足屋、醍醐の法印、高
 山の茶筌師、丹波の蚊屋うり、京のごふく屋、鹿島の言ふれ、十人よれば十國の者乗合船こそをかし
 けれ、船頭聲高にさあゝ出します、銘々の心祝なれば住吉さまへのお初穂とて、やく振て、又あま
 た數よみて、呑ものまぬも七文づゝの集錢出し、燗鍋もなくて小桶に汁碗入れて飛魚のむしり肴、取
 そぎて三盃機嫌、おのくの仕合、此風真體で御座ると、帆を八合もたせて、はや一里あまりも出
 し時、前衛よりの飛脚横手をうつて、扱も忘れたり刀にくゝりながら、状箱を宿に置いて〇〇〇〇〇〇
 を見て、それく持佛堂の脇にもたし掛て、〇〇〇〇〇〇と働きける、それが爰から聞ゆるものか、〇
 〇〇〇〇〇〇〇〇が有るかど、船中聲々にわめけば、此男念を入れてさぐり、いかにもく二ツムリ
 ますといふ、いづれも大笑になつて、何事もあれじやもの、舟をもごしてやりやれとて、楫取直し港に
 いれば、けふの首途あしやと皆々腹立して、やうく舟汀に着きければ、姫路より追手のもの、爰か
 しこに立ちさはぎ、もし此舟にありやと人改めけるに、おなつ清十郎かくれかね、かなしやといふ聲

計、哀れしらすども是を耳にも聞かれず、おなつはきびしき乗物に入れ、清十郎は繩を掛け姫路にかけへりける、又もなき歎見し人ふびんをかけざるはなし、其日より座敷籠に入て憂難義のうちにも、我身の事はなひ物にして、おなつはく口ばしりて、其男めが状箱わすれねば、今時分は大坂に着て、高津あたりのうら座敷かりて、年寄つたか、ひとりつかふて、先づ五十日計は〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇おなつと内談したもの、皆むかしになる事の口惜や、誰ぞころしてくれいかし、さてもく一日のながき事、世にあきつる身やと、舌を齒にあて目をふさぎし事千度なれども、またおなつに名残ありて、今一たび最後の別れに美形を見る事もがなと、耻も人のそしりもわきまへず、男泣とは是ぞかし、番の者ども見る目もかなしく、色々にいさめて日数をふりぬ、おなつも同じ歎にして、七日のうちはだんじきにて、願状を書いて室の明神へ命乞したてまつりにけり、不思議や其夜半とおもふ時、老翁枕上に立せ給ひ、あらたなる御告なり、汝我いふ事をよく聞くべし、惣じて世間の人身のかなしき時いたつて無理なる願ひ、此明神がまゝにもならぬなり、俄に福徳をいのり、人の女をしのび、悪き者を取ころしての、ふる雨を日和にしたいの、生つきたる鼻を高ふしてほしひのと、さまざまのおもひ事、とても叶はぬに無用の佛神を祈り、やつかいを掛ける、過にし祭にも参詣の輩壹萬八千十六人、いづれにても大慾に身のうへをいのらざるはなし、聞いておかしけれ共賽銭なげるがうれしく神の役に聞なり、此参りの中に只壹人信心の者あり、高砂の炭屋の下女、何心もなく足そくさいにて、

又まいりましましよと拜て立ちしが、こもごりして、私もよき男を持してくださりませと申す、それは出雲の大神を頼め、こちはしらの事といふたれども、るきかずに下向しけり、その方も親兄次第に男を持てば別の事もないに、色を好みて其身もかゝる迷惑なるぞ、汝をしまぬ命はながく命をおしむ、清十郎は頓最初ぞと、ありくこの夢かなしく、目を覺して心ほそくなりて泣明しける、案のごとく清十郎めし出されて思ひもよらぬ詮議にあひぬ、但馬屋内藏の金戸棚にありし小判七百兩見えざりし、これはおなつに盗み出させ清十郎とりてにげしと云ひ觸て、折ふし悪敷、此事ことはり立ちかね、哀や廿五の四月十八日に其身をうしなひける、さてもはかなき世の中と見し人袖は村雨の夕暮をあらそひ、惜みかなしまぬはなし、其後六月のはじめ萬の虫干せしに、彼七百兩の金置所かはりて、車長持より出でけるとや、物に念を入れべき事と仔細らしき親仁の申しさ、

●命のうちの七百兩のかね

何事もしらぬが佛、おなつ、清十郎がはかなくなりしとはしらす、とやかく物おもふ折ふし、里の童子の袖引連て、清十郎ころさばおなつもころせとうたひける、聞けば心に懸りて、おなつ、そだてし姥に尋ければ、返事しかねて涙をこぼす、さてはと狂亂になつて、生きておもひをさしやうよりもと、子供の中にまじはり音頭とつてうたひける、皆々是をかなしくさまくどめてもやみがたく、聞もな

く涙あめふりて、むかひ通るは清十郎でないか、笠がよく似たすげ笠が、やはんは、のけらく、笑ひ、うるはしき姿いつとなく取亂して狂ひ出ける、或時は山里に行暮て草の枕に夢をむすべば、其まゝにつきくゝの女も、おのづから友みだれて後は皆々亂人となりにけり、清十郎年ごろ語し人ごもせめては其跡残しおけて、草芥を染し血をすゝぎ、尸を埋みてしるしに松柏をうゑて、清十郎塚といひふれし世の哀は是ぞかし、おなつ夜毎に此所へ來りて吊ひける、其うちにまぎくゝとむかしの姿を見し事うたがひなし、それより日をかさね百ヶ日にあたる時、塚の露草に座して守り脇指をぬきしをやうやう引とめて、只今むなしうなり給ひて泣うなし、まことならば髪をもおろさせ給ひ、すゑくゝなき人をとひ給ふこそほだいの道なれ、我々も出家の望といへば、おなつこゝろをしづめ、みなくゝが心底さつして、ともかくもいづれもがさしづはもれじと、正覺寺に入りて上人をたのみ、十六の夏衣けふより黒染にして、朝に谷の下水をむすびあげ、夕に峰の花を手折、夏中は毎夜手灯かゝげて大經のごめおこたらず、有難比丘尼とはなりぬ、是を見る人殊勝さまして傳へきく中将姫の再來なるべしと、此庵室に但馬屋も發心おこりて、右の金子佛事供養して清十郎を吊ひけるとや、其頃は上方の狂言になし遠國村々里々迄ふたりが名を流しける、是ぞ戀の新川舟をつくりて思をのせて池の哀れなる世や、

好色五人女 卷之一終

好色五人女 卷之二

●戀に泣輪の井戸替

身はかぎりあり、戀はつきせず、無常は我が手細工のくはん桶に覺へ、世をわたる業とて、雖のこぎりのせはしく、鉋屑のけぶりみちかく難波のあしの屋をかりて、天満といふ所からすみなす男有り、女も同じ片里の者にはすぐれて、耳の根白く足もつちはなれて、十四の大晦日は親里の御年貢三分一銀にさしつまりて、棟たかき町屋に腰もどつかひして月日をかさねしに、自然と才覺に生れつきは、隠居への心づかひ、奥さまの氣をこる事、それよりすゑくゝの人に迄あしからず思はれ其後は内藏の出し入をもまかさされ、此家におせんといふ女なふてはと、諸人に思ひつかれしは、其身かしこきゆゑがかし、され共情の道をわきまへず、一生枕ひとつにてあたら夜を明しぬ、かりそめにたはぶれ神つま引くにも、遠慮なく聲高にして、其男無首尾をかなしみ、後は此女に物いふ人もなかりき、是をぞしれど人たる人の小娘はかくありたき物なり、折ふしは秋のはじめの七日、織女に貸小袖とて、いまだ仕立てより一度もめしもせぬを、色々七ツめんごりばにかさね、かちの葉にありふれたる歌をあそばし祭り給へば、下々もそれくゝに唐瓜枝柿かざる事のおかし、横町うら借家迄竈役にかゝつて、お家主殿の井戸替けふことにめづらし、濁水大かたかすりて真砂のあがるにまじり、日外見へぬとて

人うたがひし薄刃も出で、昆布に針さしたるもあらはれしが、是は何事にかいたしけるぞや、なをさがし見るに、駒引銭、目鼻なしの裸人形、くだり手のかたし目貫、つぎ／＼の涎掛、さまざまの物こそあがれ、蓋なしの外井戸こゝろもこなき事なり、次第に涌水ちかく根輪の時、むかしの合釘はなれてつぶれければ、皮樽屋をよび寄て輪竹を新らしくなしぬ、爰に流れゆくさやれ水をせきとめて、三つ輪組すがたの老女いける虫をあひしけるを、樽屋何ぞと尋しに、是はたゞ今組あげし井守といへるものなり、そなたはしらすや、此むし竹の筒に籠て煙となし、戀ふる人の黒髪にふりかくれば、あなたより思ひ付事ぞとさも有りのまゝに語りぬ、此女もとは夫婦池のこさんどて子おろしなりしが、此身すぎ世にあらためられて、今は其むごき事をやめて、素面の確なご引て、一日暮しの命のうちに、寺町の入相の鐘も耳にうとく淺まし、いやしく身に覺えての因果、なをゆくすへの心ながく、おそろしき事を咄けるに、それは二ツも聞もいれずして、井守を焼て戀のたよりになる事をふかく問ふに、おのづと哀さもまさりて、人にはもらさじ、其思ひ人はいかなる御方様ぞといへば、樽屋我をわすれてこがる、人は忘れず、口の有にまかせて、樽のそこを叩てかたりしは、其君遠きにあらず、内かたのお腰もおせんが／＼百度の文のかへしもなきと涙、語れば、彼女のうなづきて、それはいもりもいらす、我堀川の橋かけて、此戀手に入れて、まなく思ひを晴らさんと、かりそめに請合ければ、樽屋をごろき、時分がらの世の中、金銀の入る事ならば思ひながらなりがたし、あらば何かをしかる

べし、正月に木綿着物染やうはこのみ次第、盆に奈良ざらしの中位なるを一ツ、内證はこんな事で婿の明やうにとたのめば、それは慾にひかる、戀ぞかし、我たのまるゝは其分にはあらず、おもひつかする仕かけに大事有、此年月數千人のきもいり、つねにわけのあしきといふ事なし、菊の節句より前にあはし申すべしといへば、樽屋といとかしもゆる胸に焼付、かゝ様一代の茶の薪は我等のつゞけまゐらすべしと、人はながいきのしれぬうき世に、總路とて大分の事をうけあふはをかし、

踊はくづれ桶夜更て化物

天満に七ツの化物有り、大鏡寺の前の傘火、神明の手なし兒、曾根崎の逆女、十一丁目のくびしめ繩、川崎の泣坊主、池田町のわらひ猫、うぐひす塚の燃からうす、是皆年をかさねし狐狸の業ぞかし、世におそろしきは人間ばけて命をこれり、心はおのづからの暗なれや、七月廿八日の夜更て軒端を照せし灯籠も影なく、けふあすばかりと名残に聲をからしぬる馬鹿踊も、ひとり／＼己が家々に入りて、四辻の犬さへ夢を見し時、彼樽屋にたのまれしいたづらか、母屋の門口のいまだ明掛てありしを見合せ、戸ざしけはしく内にかけ込み、廣敷にふしまろび、やれ／＼すさまじや、水が呑みたいといふ聲、絶てかぎりの様に見えしが、されども息のかよふを頼みにして呼生けるに、何の仔細もなく正氣になりぬ、内儀隠居のかみさんをはじめて、何事か目に見えてかくはおそれけるぞ、我事年寄のいは

れざる夜ありきながら、宵より寐ても目のあはぬあまりに、踊見にまいりしほどに、鍋島殿屋敷のまへに京の音頭道念仁兵衛が口うつし、山くごき、松盡し、暫く耳にあかず、數多の男の中を押し分、團扇かざして詠けるに、闇にても人はかしこく、老たる姿をかづかす白き帷子に、黒き帯の結目を當風にあちはやれども、かりそめに我尻つめる人もなく、女は若きうちの物ぞと、すこしはむかしのおもはれ、口惜てかへるに此門ちかくなりて、年の程二十四五の美男我にとりつき、戀にせめられ今思ひ死ひとひ二日をうき世のかぎり、腰元のおせんつれなし、此執心外へは行くまじ、此家内を七日がうちに壹人ものこさず、取ころさんといふ聲の下より、鼻高く面赤く眼ひかり、住吉の御はらひの先へ渡る形のごとく、それに魂とられ、只物すごく内かたへかけ入るのよし語れば、いづれもおごろく中に、隠居涙を流し給ひ、戀忍事世になきならひにはあらず、せんも縁付ころなれば、其男身すきをわきまへ、博奕後家ぐるひもせず、たかまならばとらすべきに、いかなる者ともしれず其男ふびんやと、しばしものいふ人もなし、此かゝが仕掛、さても戀にうとからず、夜半になりておのゝくに手をひかれ小屋にもどり、此うへの首尾をたくむうちに、東窓よりあかりさし、隣に火打石の音、赤子泣出し、紙帳もりて夜もすがら喰れし蚊をうらみて追拂、二布の蚤とる片手に、佛棚よりはした錢を取出しつまみ菜買ふなど、物のせはしき世渡りの中にも、夫婦のかたらひを樂み、南枕に寐蕙しごけなくなりしは、すぎつる夜きのへ子をもかまはず何事をかし待る、やうく朝日かゝやき、秋の風

身にはしまざる程吹きしに、かゝは鉢煮して枕重もげにもてなし、岡島道齋といへるを頼み、藥代の當所もなく、手づからやくわんにてかしらせんじのあがる時、おせんうら道より見舞ひ来て、お氣合はいかやとやさしく尋ね、ひだりの袂より奈良漬瓜を片船、蓮の葉に包んで、たばね薪のうへに置き、醬油のたまりをまわらせばと言捨てかへるを、かゝ引とめて、我ははやそなたゆゑにおもひよらざる命をすつるなり、白娘とても持たざればなき跡にて吊ひても給はれど、ふるき芋桶のそこより、紅の織紐付し紫の革たび一足、つぎくの珠數袋、此中にさられた時の暇の狀ありしを、是はどつて捨て、此二色をおせんに形見とてわたせば、女心のはかなく、是を誠と泣出し、我に心有人さもあらば、何にとて其道しるゝこなたをたのみたまはぬぞ、おもはくしらせ給は、それをいたづらにはなさじと云ふ、かゝよき折ふしとはじめを語り、今は何をかゝくすべし、かねく我をたのまれし其心ざしの深き事、哀ども不便とも又いふにたらず、此男を見捨給は、みづからが執着とても脇へはゆかじと、年頃の口上手にていひつゞければ、おせんも自然となびき心になりて、もたゝと上氣して、いつにても其御方にあはせ給へといふにうれしく、約束をかため一段の出合所を分別せしと小語て、八月十一日立にぬけ參を此道終契をこめ、行する迄近にいとさかはやの枕物語、しみじみとにかるまじき、しかも男ぶりじやとおもひつくやうに申せば、おせんも逢ぬさきより其男をこがれ、物も書きやりますか、あたまは後ごがりて御座るか、職人ならば腰はかゝみませぬか爰出た

日は守口か牧方に晝からどまりまして、と取ませて談合するうちに、中居の久米が聲して、おせんごのおよびなされますといへば、いよく十一日の事と申のこしてかへりける、

●京の水もらさぬ中忍びてあひ釘

朝貌のさかり、朝詠はひとしほ涼しさもと、宵より奥さまのおほせられて、家居はなれしうらの垣根に、腰掛をならべて、花氈しかせ、重菓子入に焼飯、そぎやうじ、茶瓶わするな、明六ツのすこし前に行水をするぞ、髪はつゝみつをりに、帷子は廣袖に桃色のうら村を取り出せ、帯は鼠繻子に九づくし、飛紋の白きふたの物、萬に心をつくるは、隣助より人も見るなれば、下々にもつぎのあたらぬかたびらを着せよ、天神橋の妹が方へは、つねの起時に乗物迎ひにつかはせよと、何事ともせんにまかせられ、ゆたかなる蚊帳に入り給へば、四ツの角の玉の鈴音なして寐入給ふまで、番手に團扇の風靜なり、我家のうらなる草花見るさへかくやうだいなり、總じて世間の女のうはかぶきなる事是にかぎらず、亭主はなをおごりて鳥原の野風、新町の荻野、此二人を毎日荷ひ買して、津村の御堂まいりてかたぎぬは持せ出しが、直に朝ごみに行よし見えける、八月十一日の曙まへに彼横町のかゝが板戸をひそかにたゝき、せんで御座るといひもあへず、そこくからげたる風呂敷包一ツなげ入てかへる物の取おとしも心得なく、火をともしてみれば、壹匁つなぎの錢五ツ、こま銀十八匁もあらうか

白突三升五合ほど、鯉節一ツ、守袋に二ツ櫛、染分のかゝへ帯、ぎんすゝたけの袷、あふぎ流しの中なれなるゆかた、うらこきかけたる綿たび、わらんじの緒もしどけなく、加賀笠に天満堀川と、無用の書付とよこれぬやうに墨をおとす時、門の戸を音信、かゝさま先へまゐると男の聲していひ捨て行く、其後せんが身をふるはして、内かたの首尾は只今といへば、かゝは風呂敷を提げて人しれぬ道をはしりすぎ、我も太儀なれ共神の事なれば伊勢迄見届てやらふといへば、せんいやな顔して、年よられて長の道思へばく及びがたし其人に我を引合せ兎角伏見から夜船でくだり給へと、はやまき心になりて氣のせくまゝいそぎ行くに、京橋をわたりかゝる時は、うばいの久七今朝の御番替りを見に罷しが、是はご見付られしは是非もなき戀のじやまなり、それがしもつねく御參宮心掛しに、ねがふ所の道づれ、荷物は戎等持べし、幸ひ道銀は有合す、不自由なるめは見せまじとしたりしく申すは、久七もおせんに下心あるゆゑぞかし、かゝ氣色をかへて、女に男の同道さりとはく人の見てよもや只どはいはじ、殊更此神はさやうの事のかたく嫌ひ給へば、世に耻さらせし、人、見及び聞傳へしなり、ひらにくまゐりたまふなといへば、是はおもひもよらぬ事を改めらるゝ、さらにおせん殿に心をかくるにはあらず、只信心の思ひ立、それ戀は祈すとも神の守給ひ、心だにまことの連づれに叶ひなば、日月のあはれみ、おせんさまの情次第に、何國迄もまいりて、下向には京へ寄りて、四五日もなぐさめ、折ふし高尾の紅葉、嵯峨の松茸のさかり、川原町に旦那の定宿あれども、そこは萬にむづか

し。三條の西づめにちんまりとした、座敷をかりて、おか、殿は六條參をさせましょと、我物にして行くは久七がはまり也、やう／＼秋の日も山崎にかたむき、淀堤の松蔭なかばゆきしに、色つくりたる男の人まち貌にて、丸葉の柳の根に腰をかけしを、ちかくなりてみれば申しかはせし樽屋なり、不首尾を目ませして、跡や先になりて行くこそ案の外なれ、か、は樽屋に言葉をかけ、こなたも伊勢參と見えまして然もおひとり、氣立もよき八と見ました、此方と一所の宿にと申せば、樽屋よろこび、旅は人の情とかや申せし萬事たのみますといへば、久七中々合點のゆかぬ貌して、行方もしれぬ人を、とに女中のつれには思ひ寄すといふ、か、情らしき聲して、神は見通し、おせん殿にはこなたといふ兵あり、何事か有べしと、かしま立の日より同じ宿にとまり、おもわくかたらずすきを見るに、久七氣をつけ、間の戸しやうじをひとつにはづし、水風呂に入りてもくび出して覗、日暮て夢むすぶにも、四人同じ枕をならべし、久七寝ながら手をさしのばし、行燈のかはらけかたむけ、やがて消るやうにすれば、樽屋は枕にちかき窓蓋をつきあけ、秋も此あつさはといへば、折しも晴わたる月三人の寝姿をあらはす、いづれも御參宮の心ざしにあらねば、内宮二見へも掛す、外宮ばかりへちよつとまいりて、しるし計におはらひ申若和布を調べ、道中兩方白眼あひて、何の仔細もなく、京迄下向して久七が才覺の宿につけば、樽屋は取替し物共目のこ算用にして、此程は何分御やつかに成ましてと一禮いふて別れぬ、久七今は我物にしてそれ／＼のみやげ物を見出して買ふてやりける、日の暮も待ひさ

しく、烏丸のほどりへちかしき人有て見舞しうちに、か、はおせんをつれて清水さまへ參るのよし取いぞぎ宿を出てゆきしが、祇園町の仕出し辨當屋の釣簾に、付紙目印に錐と鋸を書き置しが、此内へおせん入るかと思えしが、中二階に上れば樽屋出合、すゑ／＼やくそくの盃事して、其後か、は箱階子おりて爰はさて／＼水がよいとて、せんは茶はてしもなく呑みにける、是を契のはじめにして樽屋は晝船に大阪にくだりぬ、か、おせんは宿にかへりて、俄に今からくだるといへば、是非二三日は都見物と久七とめけれ共、いやいや奥さまに男ぐるひなどしたとおもはれましてはいかやと、出て行く風呂敷包は太儀ながら久七殿頼といへば、かたがいたむとて持たず、大佛稻荷の前、藤の森に休し茶の錢を、銘々拂ひにしてくだりける、

●こけらは胸の焼付さら世帯

參るならばまゐると内へしらして參らば、通し駕籠か乗掛でまゐらすに、物好なるぬけ參りして、此みやげ物はごこの錢でかふたぞ、夫婦つれだちでもその／＼そんな事はせぬて、やうも／＼二人つれて下向した事じや迄、久七やせんが酒迎に寢所をしてとらせあれは、女の事じやが久七がすゝめて、智恵ない神に男心をしらすといふ物じやと、お内儀様の御腹立、久七が申しわけ一つも尋あかず、罪なうしてうたがはれ、九月五日の出替をまたず御暇申して、其後は北濱の備前屋といふ上間屋に季を

かさね、八橋の長といへるはすは女を女房にして、今みれば柳小路にて餅屋をして世を暮し、せんが事つひわすれける、人はみな移氣なる物ぞかし、せんは別の事なく奉公をせしうちにも、樽屋が假りの情をわすれかね、心もそらにうか／＼となりて、晝夜のわきまへもなく、おのづから身を捨、女に定つてのたしなみをもせず、其さまいやしげに成て次第／＼やつれける。かゝる折ふし鶏とばけて宵鳴すれば、大釜自然とくさりてそこをぬかし、突込し朝夕の味噌風味かはり、神鳴内蔵の軒端に落ちかゝり、よからぬ事うちついきし、是皆自然の道理なるに、此事氣に懸られし折から、誰がいふともなくせんをこがる、男の執心今にやむ事なく、其人は樽屋なるはと申せば、親かた傳へ聞いて、何卒して其男にせんをもらはさんと、横町のかゝをよびよせ内談有りしに、つね／＼せん申せしは男もつ共職人はいやといはれければ、心もどなしと申せば、それはいらざる物好み、何によらず世をさへわたらば勝手づくこと、さまざま異見して樽屋へ申遣し、縁の約束極め、程なくせんに脇ふさがせ、かねを付させ、吉日をあらためられ、二番の木地長持ひとつ、伏見三寸の葛籠一荷、糊地の挾箱一ツ、奥さま着をろしの小袖二ツ、夜着ふとん赤ね縁の蚊帳、むかし染のかづき、取あつめて物數廿三、銀二百目付ておくられるに、相性よく、仕合よく、夫は正直のかうべをかたづけ細工をすれば、女はふしかね染の縞を織ならひ、明くれかせぎける程に、盆前大晦日にも内を出違ふ程にもあらず、大かたに世をわたりけるが、殊更男を大事に掛、雪の日風の立時は、食つぎを包みおき、夏は枕に扇をは

なさず、留守には宵から門口をかため、夢々外の人にはめをやらす、物を二ツいへばこちのお人／＼どうれしがり、年月つもりてよき中にふたり迄うまれて、猶々男の事をわすれざりき、されば一切の女うつり氣なる物にして、うまき〇咄しに現をぬかし、道頓堀の作り狂言をまことに見なし、いつともなく心をみだし、天王寺の櫻の散前、藤のたなのさかりに、うるはしき〇にうかれ、かへりては一代やしなふ男を嫌ひぬ、是ほど無理なる事なし、それより萬の始末心を捨て大熱する籠をみず、鹽が水になるやら、いらぬ所に油火をとすもかまはず、身代うすくなりて暇の明を待かねける、かやうのかたらひさりとほ／＼おそろしき、死別れては七日も立ぬに後夫をもとめ、さらされては五度七度の縁づき、さりとほ口惜き下々の心底なり、上々にはかりにもなき事をかし、女の一生にひとりの男に身をまかせ、さはりあれば御若年にして河州の道明寺、南都の法華寺にて、出家をさげらるゝ事も有りしに、なんぞかくし男をする女うき世にあまたあれ共、男も名の立事を悲み、沙汰なしに里へ歸し、あるひは見付てさもしくも金銀の慾にふけて振にして濟し、手ぬるく命をたすくるがゆゑに、此事のやみがたし、世に神有、むくいあり、隠してもしるべし、人おそるべきは此道なり、

●木屑の杉やうじ一寸先の命

来る十六日に無業の御齋申上たく候、御來駕においてはかたじけなく奉存候、町衆次第不同、麴屋長